
うつせみ血風録

三畳紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うつせみ血風録

【Nコード】

N6733X

【作者名】

三畳紀

【あらすじ】

古の風情が残る街御門を舞台に、吸血鬼になってしまった女子高生と、吸血鬼の天敵にして守護者である人間の主人公の少年を中心に物語が展開していく伝奇物。

理性を失い人間を食らうだけの化け物になってしまった吸血鬼の始末や封建時代に人間と吸血鬼が結んだ和約に背く吸血鬼の粛清という日常業務に加え、吸血鬼の存在を容認せずに殲滅を図るエクソシストたちや人間と吸血鬼の間で保たれてきた均衡を覆そうとする

ものなど多くの存在と敵対しながら、平穏な日常を守ろうとする主人公の奮闘を御覧あれ。

第1回、光と陰をまたにかけて（前書き）

この作品は吸血鬼ものが好きな著者の趣味をふんだんに盛り込んだB級エンターテインメントです。

吸血鬼が街を闊歩していたらという仮定に基づいて設定を作ったため便宜上ホラーにしておきますが、実質はライトノベル的な展開のファンタジー活劇物です。

以前前日譚を執筆しており一応その続編となっておりませんが、別個の作品とお楽しみいただけるようには配慮しているつもりです。それでは古の風情を残す街を跳梁する異能のものたちが織り成す物語を是非お楽しみください！

第1回、光と陰をまたにかけて

平日の朝は学生や勤め人のいる家庭ならば非常に慌しいものである。通学や出勤の準備による喧騒が起こるのは、3人の学生と社会人の父親がいる切島家きりしまもその例外ではなく、むしろ一般の家庭以上に殺伐とした空気が漂っていた。

「姉さんお弁当詰めるのまだ終わらないの、早くしてくれないと遅刻しちゃうじゃない!」

「あうち、ごめん今できるから……」

次女で中学生の葵あおいが弁当の催促をしてくると、制服の上にエプロンまこをかけた長女の丹がシンクに溜まった洗い物を片付ける手を止めて、慌てて妹の分の弁当箱に蓋をしてバンダナにくるんでいく。

「丹は洗い物で忙しいんだからそれくらい自分でやれ!」

「お弁当作っているの姉さんなんだから、姉さんが蓋を閉めない限り出来上がっているかどうか分からないでしょう? お弁当に入れ損ねて酸化したリングを晩御飯に出されるのはもう嫌よ」

「屁理屈ばかり言っていないで少しは丹を手伝ったらどうなんだ?」

「女の子の身嗜みには時間がかかるのよ、洗濯干したり食器を洗ったりする暇がある訳ないじゃない!」

父親の斎いが葵の横暴な言動を咎めてくると、葵は薄くファンデーションを塗りマスカラをつけて化粧をし、念入りに髪をセットした

顔に持ち前の私の強さを押し出して姉のことばかり鼻屑する父親に反抗を示す。

「何が身嗜みだ、中学生が化粧をする必要なんかないだろう！」

「父さんの時代とは違うのよ、今は中学生でも化粧をするのなんて常識よ！」

倫理や規範に厳格な斎と奔放な葵の折り合いは悪い上、相手の非を責め続ける強情な面は共通しているので、彼らの間にこうした諍いが起こるのは珍しくない。互いに憎まれ口を叩き合った末、葵はテーブルの上からバンダナに包まれた自分の弁当箱を取り上げると台所から出て行くこととする。

「葵」

「なによ姉さん、アタシ急いでるんだけど？」

「いつてらっしゃい、急いでいるからって飛び出しちゃ駄目よ？」

丹に呼び止められて葵は鬱陶しそうな顔で姉に振り返ると、丹は温厚な笑みを浮かべてそっかしい性格の妹を安全に送り出そうとする。

「子どもじゃないんだからそんなの分かってるわよ、行ってきます」

「おう、気をつけて行って来い」

「…行ってきます。父さんもさっさと会社行けば、新聞ばっか読んでも遅刻するよ」

葵は丹に子ども扱いされて照れ臭そうな顔をする。台所から出て行った葵の背中に朝刊の紙面に目を通したまま斎が呼びかけると、葵は斎に注意を促して玄関へと向かっていった。

「葵に言われるのも癪だがそろそろ出ないとな。丹、俺の弁当はできているか？」

「うん、もう炒め物も冷めているから蓋をして大丈夫」

「そうか、毎日美味しい弁当をありがとうな」

「自分の分も作っているんだし、お父さんが一生懸命働いてくれるおかげでわたしがご飯を作れるんだから感謝されるようなことじゃないよ」

「そんなに謙らなくてもいいんだぞ丹。まったくお前と葵の性格を足して割ればちょうどいいんだろうけどなあ」

「そうかもね」

父親の言葉に丹が思わず吹き出し笑いをする。彼女は洗い終えた食器から水気を拭き取りながら手際よく戸棚に食器をしまっていた。斎が弁当箱に蓋を閉めて包みの紐を結び終えるのと、丹が食器を片付け終えるのはほぼ同時だった。

「丹、弁当箱が2つ残っているがもう1つは誰の分だ？」

「誰って、クーくんの分に決まっているじゃない」

「あいつの分か…何も昼飯の面倒まで見てやらなくてもいいんじゃないか？」

「3人分作るのも4人分作るのも手間は大きく変わらないよ」

丹が家族3人の分に加えてもう1人分弁当を作っていると知り斎は眉をひそめるが、丹自身は他人の昼食の支度することを意に介していないように残った2つの弁当箱を持参できるように包んでいく。

「それであいつはどうした、まさかまだ寝ているのか？」

「クーくんはわたしと一緒に登校するのを見られるは恥ずかしいって先に学校に行ったよ」

「あの小僧、丹と一緒に登校するのが嫌だと言うのか…いや、しかしあんな不良が可憐な丹と並んで登校していることは許せんし……」

「理由はどうあれ遅刻の常習犯だったクーくんがちゃんと始業時間に間に合うようになったのはいいことだよ」

丹が弁当を作ってやった人物と長女との関係に斎がやきもきしているのを、丹は愉快そうな目で見つめながらエプロンを外して自分の椅子の背にかける。

「お父さん、わたしもそろそろ行くね。戸締りお願いしてもいい？」

「ああ、任せておけ」

「よかった、それじゃ行ってきます」

「いつてらっしゃい」

丹が弁当の包み二つを携えて台所から出て行くのを斎は見送ると、新聞を畳んでテーブルの上に置いた。

「認めたくはないがこうして変わらぬ日常を過ごせているのはあいつのおかげだ、飯の面倒くらい看ててやってもいいよな？」

斎は開放されている台所の窓に鍵をかけながら、丹が弁当を渡す少年から自分たち家族の受けた恩恵によって平穏な日々を過ごせているのだと苦笑する。丹の交際相手として好ましい点ばかりではないにしろ、その少年の人物を認めている節があることを斎は苦々しく思いつつ自認していた。

「来栖託人、吸血鬼いやウツセミの天敵と守護者を務める男が……」

斎は自分の家族が巻き込まれた一連の騒動の解決に大きな貢献をした少年の顔を思い浮かべると、その少年の名前と彼の一族が先祖代々受け継いでいる責務のことを口に出した。

* * *

御門市東部を南北に流れる鱧川はもがわの下流に面した稲荷区いなりに立地する公立校くいな橋高校のグラウンド。高く澄み渡った秋空の下、生徒たちが心地よい環境の中で持久走に精を出している。

「来栖、それだけの脚力を持ちながら何故どこの運動部にも入ろうとしない？ 今からでも遅くない、ラグビー部に入ってその脚力を活かしてみないか？」

まだ半数以上の生徒がグラウンドに白線を引いて作られたトラックを走っており、所定の周回を走り終えた生徒たちも苦しげな顔で喘いでいる中、涼しげな顔で佇んでいる長身の男子生徒来栖に彼の担任の体育教師盛田、通称ゴリ田は自身が顧問を務めているラグビー部への入部を勧めてくる。

「残念ですけど部活やってるほど暇じゃないんでお断りします」

「部活やってるほど暇じゃないだと、青春を部活にかけることの何が悪い？」

「誰も部活に打ち込むことが悪いとは言ってませんよ、ただ俺は他にやるべきことがあるってだけっす」

「じゃあお前は何に力を入れているんだ来栖、少なくとも勉強に打ち込んでいる訳じゃないだろう？」

「なんだっていいじゃないっすか、少なくともセンサーが心配してるようなことじゃないっすからご安心を」

部活動を軽んじているような来栖の発言を聞き捨てならずゴリ田は来栖に絡んでいくが、来栖は担任の詰問を軽くあしらって視線を眼前の筋肉達磨から逸らした。ゴリ田から逸らした来栖の視線の先に1人の女子の姿がある。

「あの馬鹿…何考えてんだ?!」

多くの生徒が半そでのシャツやハーフパンツで走っているほどの陽気であるのに、上下ともしつかり長袖のジャージを着込んで帽子

を被っているその女子生徒の姿を見止めると、来栖は弾かれたようにその女子生徒に向かって突進していった。

「おい丹、あんた何やってんだ？」

「何って…普通にジョギングしているだけだけど？」

「普通にジョギングしているだけだと、あんた自分の体が今どんな状態か分かっているのか？！」

「うん、それはもちろん…きゃっ、ちょっとクーくんいきなり何するの?!」

ゆったりとしたペースで走っている上下ジャージ姿の女子生徒の傍に駆け寄った来栖が口角を泡立てるような勢いで捲くし立てるのを相手の女子生徒はきよとした表情で見つめ返すが、来栖は暢気な返答をしてくる相手のことを無理矢理膝と背中腕を通して抱き上げた。

相手の女子生徒は女子としては比較的大柄な170cmほど上背があつたが、来栖は相手の体格をもともせず軽々と彼女の体を宙に持ち上げる。突然の事に目を白黒させて驚くが、来栖は彼女を抱えたまま小走りで校舎に向かっていく。

「来栖くん、丹を連れてどこにいくつもり?!」

「急病人を休ませるために保健室だよ！」

「急病人って、丹は普通に走っていたじゃない?!」

丹を抱えていずこかに連れ去ろうとする来栖の背中にクラスメイ
トの天満カンナてんまの質問が浴びせられてくるが、来栖は早口でカンナ
の質問に答えながら足早に歩を校舎へと進めていく。

ペースは速くなかったとはいえ呼吸も乱さず安定した足取りをし
ていた丹のどこが急病だというのかと訝しげにカンナは眉をひそめ
るが、来栖はもうカンナの質問に答えようとせずに丹のことを腕に
抱いて校舎の中へと入っていった。

「センサー、こいつを休ませるためにベッド借りるよ」

来栖は足で乱暴に保健室の引き戸を開くと、保険医の返事も待た
ずに空いているベッドの上に丹を強引に座らせた。来栖は丹をベッ
ドに横たえると仕切りのカーテンを閉めて外から中の様子を覗かれ
ないようにする。

「クーくん、わたしどこも悪くなんかないよ？」

「丹、ジャージを脱げ」

「えっ、クーくん何を言ってるの?!」

「いいからジャージを脱いで中を見せろ!」

丹が自分の体調はどこも悪くないのに来栖が強引に保健室へ連れ
込んできたことに抗議すると、来栖は丹に服を脱ぐように命じる。
来栖の正気を丹は疑うが、彼女が躊躇していると来栖は無理矢理彼
女の羽織っているジャージを剥ぎ取ろうと手を伸ばす。

「いやっ、クーくんやめてよ!」

「つべこべ言うな、いいから見せる！」

丹は自分の服を脱がそうとする来栖の手に抵抗するが、か弱い女性が長身に加えて均整の取れた筋肉の厚みのある男に勝てるはずもなく丹はなす術もなくジャージを剥ぎ取られてしまう。丹のジャージを脱がせた来栖は半袖の体操服の袖から覗く丹の白い二の腕や首元を凝視した。

「よかった…どうやら日光の影響は受けていないみたいだ」

「よかったって何が、あつ?!」

「丹、いくらあんたが烙印らくいんを刻んだことで普通のウツセミほど肌にダメージを受けなくなったといっても、それでも昼間の日差しを浴びるのは危険なことに変わりはない。それなのにあんたはこの晴天でジョギングの授業に出るなんて自殺行為を平気でしている、少し自分がウツセミだということに自覚が足りないんじゃないか？」

丹が来栖に自分の肢体を嘗め回すような目で見られることに怯えた顔を見せると、来栖がほっとした表情を浮かべるのを見てようやく彼の意図に気付く。来栖は吸血鬼になった自分の体を心配して燦々と日差しの降り注ぐグラウンドから屋内の保健室へと退避させ、更に自分の体が火傷を負っていないかを確認したのだと丹は察した。

背中に銀の刃で十字の烙印を刻み、吸血鬼特有の超人的な身体能力や捕食者として研ぎ澄まされえた五感を失う代わりに、吸血鬼の肌には強過ぎる昼間の陽光を浴びても人間と大差ない影響しか受けなくなったことで丹は吸血鬼でありながら日中外を出歩くことができるようになった。

その体質のおかげで彼女は今も人間だった時と同じように学校に通うことができているが、それでも直射日光を浴び続けることが本質的には夜行性である吸血鬼の健康にいい影響を及ぼすとは考えにくく、来栖だけでなく丹の両親も丹が昼間学校で生活することに不安を抱かずにはいられなかった。

丹は自分の体に痛みを感じる部分はなかったし、素肌を曝している腕や首筋も焼け爛れてはいない。来栖は丹の体が強い日差しを浴びても無事だったことを確認し安堵すると、顔を引き締めて彼女の浅薄で無防備な態度を非難する。彫りの深い顔に陰が差し、精悍な眉が吊り上げられた来栖からかなりの威圧感を丹は感じる。

「ごめん…長袖を着て帽子を被れば大丈夫だと思っていんだけど調子に乗り過ぎてた」

丹は自分以上に日中吸血鬼が活動することのリスクを来栖が考慮していることに気付かされると同時に、あのままグラウンドを走り続けていれば日光にその身を焼かれてしまったかもしれない自分の迂闊さを悔やんで視線を床に落とした。

「最近たるんでるんじゃないか？2学期が始まった頃は自分の体が以前と違うことに留意して慎重に生活していたが、この所日光への警戒が甘くなっているぞ」

「ちょっとつかれていたのは認めるけど、でも学校で普通に生活してたら外に出て陽に当たる機会だって自然に増えちゃうよ……」

「言い訳するな。学校でのフォローをあんたの両親から頼まれているとはいえあくまでもこれはボランティアのサービスだ、ウワバミ

本来の責務もあるんだからあんたのことにばかり構ってはいられない」

「わたしはクーくんの手を借りなくたってちゃんと……」

来栖は高慢な物言いで丹の学校での生活態度を非難していく。来栖の言い分は日光に弱い丹の体の安全を考えてはいたし、御門市内にいる吸血鬼の同胞全体に目を行き届かせなければならない義務を負っている来栖の負担を考えれば丹に余計な世話をかけられたくないと思う気持ちも理解できなくはなかったが、今の自分のことを見下した言い方をされると温厚な丹でもいい気はしない。

丹は俯いていた顔を持ち上げて眉間に皺を寄せて来栖の顔を見上げた。しかし棘のある眼差しを向けた直後、軽い眩暈を覚えて視界が暗転し体から抜けていった丹は腰掛けていたベッドからずり落ちそうになる。

「丹！」

来栖は前のめりに床に倒れかけた丹の体を正面からしっかりと抱き留めてベッドに座らせ直す。来栖に支えられてベッドの上に戻った丹の瞳は虚ろで生氣がなく意識が漠然としているようで、元から色白の顔は病人のように血色が悪く虚脱したようにぽっかりと口を開けていた。

「そっぴゃここ数日、血を飲ませてなかったな、そろそろ精気を補充する頃合いか」

丹の魂が抜け落ちたように呆然としている姿を見て、来栖は精気を自給できない丹に血液を介して精気を分け与える必要を感じる。

来栖は半袖のＴシャツから剥き出しになった自分の筋肉や血管が浮き出た逞しい腕を丹の眼前に差し出した。肌の下に健康な男子の熱い血潮が流れていることを容易に想像できる腕を見せつけられて、虚ろだった丹の瞳に情欲の炎が灯る。

丹は突き出された来栖の腕を両手で掴むと口を大きく開いて彼の腕に顔を近づける。丹の形のいい唇は口腔から滲み出た唾液で怪しく光り、彼女が吸血鬼であることの証拠の人間の平均よりも鋭く長く伸びた犬歯が露になる。

「…要らない」

だが来栖の腕の皮膚に丹の牙が突き刺さろうとした瞬間、本能的な欲求に突き動かされていた丹は我に返ると噛みつくのを止めて顔を来栖の腕から離す。

「何言ってるんだよ丹、気を失うまで我慢してたってことは相当渴いているんだろ？」

「わたしのせいで腕がそんなに傷だらけになっちゃってるんだから、頻繁にクーくんの血をもらっちゃ悪いよ……」

来栖は丹が血を飲むのを止めるのを見て怪訝そうな顔をするが、丹は来栖の腕にある多数の裂傷や歯形に目を留めるとすまなそうな顔で血を飲むことを拒む。

「こんな傷大したことねえから気にすんな、むしろ血に飢えたままでウツセミを野放しにする方がよっぽど迷惑だぜ」

丹の殊勝な考えを聞かされても来栖は呆れた顔をするだけだった。

自分の発言を聞いた来栖の反応に落胆する丹だったが、来栖は呆れながらも丹を労わりの目で見つめる。

「本当にいいの？」

「ああ、弁当作ってもらったしその礼だ。交換条件ならあんたも納得できるだろ？」

「…うん」

丹が念入りに訊ねてくると、来栖は踏ん切りのつかない彼女にじれったさを覚えつつ昼食の礼として血を分け与えるのなら丹の良心も咎めないだろうと訴える。自分は来栖に弁当を与え、その見返りに来栖から血をもらうという交換が成立することようやく丹は血を飲むことを決心する。

丹は再度来栖の腕に顔を寄せていく。丹の口は大きく開いてはいるが先ほどのように肉食獣が獲物の息を止めるような獰猛な感じではなく、子どもがリングに齧り付くような微笑ましさのある感じであつた。先鋭化した犬歯よりも先に丹の唇の柔らかな感触に来栖が顔を弛緩させかけた直後、丹の牙が来栖の腕に食い込んでくる。皮膚を突き刺される痛みに顔を引き攣らせながら、自分の腕から滲み出た血液を舐め取っていく丹の舌に来栖は官能的な快感を覚えていた。

丹は来栖の腕に舌を這わせて唾液に含ませながら、彼の血を吸っていく。丹は小さく喉を鳴らして血を嚥下していくと、欠乏していた精気を補充して渴きが満たされたことに対する満悦と血の味に酔いしれて仄かに顔を紅潮させた。

来栖は腕に唇を押し当てて自分の血を飲み喜悅の表情を浮かべた。丹の姿を見ると、内側から異性に対する情動が湧き上がってくることを感じ、自制心を働かせて自分の理性を押しやろつとする欲望を御する。

長く伸びた丹の四肢は引き締まり、その肌は白く滑らかで瑞々しい。全体的に丹は細身の体型はしているが、肉付きが貧相な訳ではなく女性的な曲線美を充分に描いている。癖のあるショートヘアに縁取られた丹の顔は目鼻立ちがはつきりしており、瞋は猫のように吊り上っているが表情はおっとりとしているため、狡猾さや気性の激しさを感じさせることはない。引つ込み思案な性格や家事に日々追われて所帯染みた雰囲気のせいで隠されてしまっているものの、客観的に見て丹はかなりの美貌であった。

そんな隠れ美人である丹が血を吸う度に無防備な艶姿を来栖に見せ付けており、その都度彼の内側で咆哮をあげようとケダモノと理性が水面下で激しい闘争を繰り広げていた。

「気は済んだか？」

「うん、ありがとう」

丹の口が腕から離れ突き立てられた牙が皮膚から抜けていくと、来栖はほんの少しだけ彼女との繋がりを失ってしまった寂しさを覚える。丹は唇の先を僅かに血の朱に染めた顔で来栖の問いに頷き返すが、またしても来栖は丹の仕草に色気を感じてしまいそれを隠蔽するためにポーカーフェイスを取り繕う。

「はいお楽しみはここまで、続きはまた後でね」

「あ、赤城先生……」

来栖と丹がそれぞれ吸血行為で得られた快感の余韻に浸っていると、彼らを周囲から隔てていたカーテンが一気に開放される。カーテンの切れ間から白衣を纏った女性の保険医が愉快げな笑みを浮かべてくるのを、来栖と丹は逢瀬を覗かれたような気がして羞恥心で顔を赤く染めた。

「あなたたちが仲睦まじいのはいいことだけどね。ここもホテルじゃなくて学校の中ってことを忘れちゃダメよ？」

「そんなこと言われるまでもないっすよ！」

「どうかしら、来栖くんが切島さんを無理矢理脱がそうとしている声聞いちゃったけど？」

保険医の赤城はルージユの塗られた唇に妖艶な笑みを浮かべて2人のやり取りが自分の耳にも聞こえていたことを教えると、来栖は会話を盗み聞きされた怒りで身を震わせ、丹は自分たちの倒錯した関係を他人に知られたことに恐怖を感じて青褪めた顔をしていた。

「心配しないで、私こう見えて結構口が固い方だから」

「…その言葉信用しますよ」

しかし赤城は帳の奥で来栖と丹がどんなことをしていたのかについて言及しようとせず、長い睫毛の目を細めて彼らのことを凝視すると身を翻し背を向けて奥にある自分の机へと戻っていく。来栖は赤城の態度に不信任を覚えつつ、相手の言葉が事実であることを期待した。

「しかしオールドファッションで硬派な来栖くんが保健室に女の子を連れ込むとは意外よね」しかも相手は品行方正な優等生の切島さんってのがまた驚きよ。こんなビッグニュースを目撃できただけで今日は充分よ」

自分たちをダシに楽しんでいる赤城に対して何か言い返したかったが、概ね赤城の見解が間違っていないために来栖はいい反論を思いつかなかった。丹はベッドの上で俯いたまま、所在なさそうに視線をあちこちに彷徨わせている。

「さ、用が済んだんなら早く教室に戻りなさい、みんなに騒がれるのは嫌でしょう？」

「はい……」

含み笑いを浮かべながら教室に帰ることを促してくる赤城の言葉に、完全に彼女の手玉にとられた来栖も丹も黙って頷き返すことしかできなかった。

* * *

秋が深まると共に陽が暮れるのも早くなる。帰りのホームルームの後、体育の授業中丹を無理矢理グラウンドから連れ出したことで来栖はゴリ田に呼び出され、説教というよりも一方的に罵倒されていた。

丹を連れて授業を抜け出して何をしていたのかとゴリ田に問われると、来栖は具合が悪くなった丹に付き添って保健室に言ったと正直に答えた。ゴリ田は保健室と聞いて何故か興奮した様子だったが、

来栖の発言の真偽を確かめに彼を従えて保健医の赤城の下を訪ねる。

普段は好きなだけ来栖のことを罵れば事実関係を確かめようともせずに彼を解放するゴリ田の珍しい行動に来栖は決まりの悪い顔でその後に従っていった。だが意外にも赤城は来栖たちに公言した通り、カーテンの中から聞こえてきた発言には一切触れず来栖に口裏を合わせてくれた。

そのため来栖は保健室を訪ねてすぐにゴリ田から解放されることができた。そしてゴリ田が柄にもなく真偽を確かめにいった動機が真相の追究などではなく、保険医の赤城に会いに行っただけということ由来栖は知る。もっともゴリ田独りが舞い上がっているだけで、赤城は彼のことなど歯牙にもかけていない様子だったが。

「クーくん」

「先帰ったんじゃないのか？」

下駄箱の前で来栖が靴を履き替えていると、昇降口の扉から丹の声が聞こえてくる。てっきり彼女はもう下校したものだと思っていたので、来栖はまだ丹が学校にいることに少し驚いているようだった。

「図書委員の仕事で残ってたから、一緒に帰ろうと思って」

「どうせ家でも学校でも顔を突き合わせんだから、登下校の時くらい離れてた方がお互い気が楽だと思っぜ？」

丹は一緒に下校しようと呼びかけるが、来栖はつれない態度で丹の脇を素通りしていく。

「…やっぱりわたしはクーくんの迷惑なの？」

丹が来栖に背を向けたまま小声でそう問いかけると、来栖はその場に立ち止まる。

「そんな訳ねえだろ、もしそうだったらわざわざ悠々自適の独り暮らしを止めてお前の家に居候なんかするかよ」

来栖は丹の気を害してしまったことに罪悪感を覚えた様子で、さきほどの無神経な発言の弁解を図ろうとする。来栖の弁明を聞いて丹は彼の方に向き直った。

「本当に？」

「むしろ赤の他人の俺があんたの家族の迷惑になってるんじゃないか？ 実際斎さんやあんたの妹はあからさまに俺のことを煙たがっているし……」

「ご、ごめんね…2人ともその、思ったことがすぐ顔に出ちゃう正直な性格だから」

「いいさ、厄介者扱いされるのには慣れている」

吸血鬼である丹に血を与える一方で彼女の監視をするために来栖が丹の家に下宿していることを、丹の家族は快く思っていないことを聞かされると丹は父親と妹に代わって来栖に不快な思いをさせていることを謝罪する。

来栖は西洋人の先祖に由来する彫りの深い顔立ちや大柄な体格からクラスメイトには敬遠され、あちこちの不良たちから因縁をつけ

られ、降りかかる火の粉を払い除けては警察や生徒指導の教員に説教をされる自分の境遇を自嘲して、丹に余計な気遣いをしないように言葉を返した。

「クーくんは人間だけじゃなくてわたしちウツセミのためにも一生懸命頑張ってるのに、みんなから誤解されっぱなしでいるのはおかしいよ！」

来栖が身を粉にして人間だけでなくウツセミを自称する御門市内に潜伏する吸血鬼の社会の安寧に務めていることを充分承知している丹は、彼の苦勞も知らずに憶測や上辺の行いだけで来栖に偏見の眼差しが向けられることに憤慨した。丹は形のいい眉を吊り上げてやや怒張して来栖に詰め寄ってくる。

「お、落ち着け丹……」

「盛田先生やカンナちゃんもどうしてクーくんがいい人だつてことを分かってあげようとしなんだろう？　ちよつと言葉遣いは乱暴だし、ひねくれたところもあるけれど、自分の運命から逃げずに正面から立ち向かおうとしている真っ直ぐで責任感の強い人だつてことに気付かないんだらう？」

丹は語気を荒らげながら担任や友人が来栖の本当の姿を見抜けないことのもどかしさに愚痴をこぼす。自分以上に自分の不当な境遇に憤っている丹のことを来栖は宥めようとするが、丹の怒りはしばらく冷めそうになかった。

「…丹、悪いけどやっぱ先に帰ってくれないか？」

丹への接し方に戸惑っていた来栖の顔が突然厳しいものになる。

来栖は低い声で丹に帰宅を促すと彼女に自分の通学鞆を押し付けた。

「クーくん、急に怖い顔になってどうしたの？」

「奴らが近くににいる、赤霧^{せきむ}を焚いて川原に引き寄せるから近寄るなよ」

来栖は制服の上着のポケットから煙草の箱を取り出すと、中から煙草を1本取り出し年季の入ったオイルライターで火を点ける。来栖が着火した煙草から赤黒い煙がたなびきはじめ、辺りに血に似た鉄錆の臭いが漂い始めると来栖は火の点いた煙草を持ったまま校門の方に全速力で走り出した。

「ちよつとクーくん?!」

自分の背負ったリュックサックと来栖が通学に使っている薄いシヨルダーバッグを胸に抱えたまま丹がその背中に呼びかけるが、来栖は振り返らずに走り続けて校門の外へと飛び出していった。

「さあお前らの好物である血の臭いに惹かれて出てこい……」

構内から外に駆け出した来栖は学校の傍を流れる鱧川の土手まで一気に駆け抜ける。来栖は薄暗い私鉄の橋桁までやってくると、全力疾走をして多少弾んだ息を整えながらその周辺を行き来して何かが見れるのを待ち構える。だが来栖が指に挟んだ煙草がフィルター近くまで燃え尽きようとしていても、彼の前に待ち望んでいるものは姿を見せなかった。

「おかしいな、近くにいたる気配は確かにするのに出てこないなんて風で血の臭いが流されちまって奴らの鼻に届いていないのか？」

これ以上持つっていると指を火傷してしまうと来栖は煙草を地面に投げ捨てて、靴の裏で火を揉み消す。一瞬足元から噎せ返るような血の臭いが立ち上ってきて、来栖はその胸焼けがするような臭いに顔をしかめた。

来栖はもう1本煙草に火をつけようと上着のポケットから煙草を取り出そうとして視線をそちらに向ける。煙草の入った箱の角を指で数回叩き、来栖は煙草を引き抜こうとするが彼の注意のほとんどは煙草の箱を握った手元に向けられていた。

「クーくん危ない！」

「喝！」

土手の上から丹の叫び声が聞こえた瞬間、頭上の線路を電車が通った訳でもないのに来栖の視界にふっと陰が差す。何かが唸り声を上げて来栖に飛び掛ってきたが、襲い掛かってきたものの鋭い爪が来栖の体を引き裂くよりも先に来栖の裂帛の気合が周囲にこだまし、雷のような青白い光が瞬く。すると来栖を襲撃してきたものは突風に煽られたように仰け反って後方へと吹き飛んでいった。

「誘いをかけてみたら案の定出てきやがった。それにしても丹、ナレノハテと戦うことになって危ないから川原に来るなって言ったよな？」

数m先の地面でのたうち回っている襲撃者が予想通りの動きをしてきたことに口の端を吊り上げて来栖は不敵な笑みを浮かべるが、自分の背中に近寄ってきた丹が忠告を守らなかったことへの不満を棘のある眼差しで一瞥することで表す。

「いくらクーくんが強くてもやっぱり心配だよ、それにわたしが注意しなきゃナレノハテが襲ってきたことに気付かなかったでしょう？」

「馬鹿、あれは奴を燻りだすための罠だよ。お前に言われなくたってあんだだけ殺気がビンビンしてちゃ気付いていたさ」

「本当に？」

「来るぞ、俺の後ろに下がってる！」

来栖の危機を救ったのは自分の助言だと丹は主張するが、来栖は敵を油断させるための罠を張っていただけだと彼女に言い返すと、肩で彼女を自分の後ろに押しやる。丹が来栖に押された勢いで数歩後ずさると、向かいから来栖を不意打ちしようとしたものが体勢を立て直してこちらへ突進してくるのが見えた。

黄昏の薄暗闇の中にギラギラと輝く金色の目玉をするそれは、若干人間の平均的なプロポーションよりも腕が長く手が大きくその先の指が鋭く尖っていることを覗けばほぼ人間と変わらない形態をしていた。しかし海老茶色の体には衣類を一切身に着けておらず、顔の造作も崩れ去り、歯茎を剥き出しにして大きな口を開いている姿からはまるで理性を感じられない。

来栖たちがナレノハテと呼ぶ大地を力強く蹴って疾走する海老茶色の肌をした怪物は、闇に紛れて人を襲いその生き血を啜る忌むべき存在であり、端的に言えば西洋の伝承に登場する吸血鬼の眷族である。

海老茶色の肌をした吸血鬼がナレノハテと呼称される由縁は、元を糺せば彼らも人間であり人でなくなり魔性の存在に変貌した者の哀れな末路ということに因んでいる。丹のように人間だったの容姿と自我を保っていられる吸血鬼たちはウツセミと自称しており、ナレノハテはウツセミが血の渴望に支配されて理性を失い、完全にひとではなくなってしまうたものとして人間だけでなく同じ吸血鬼のウツセミとも区別されている。

そして来栖はウツセミたちが現世と接点を持つ異空間の居住区の外に出ない事を条件にその存在を認め、ウツセミたちが誓いを守っているかどうかを監視しているウワバミと呼ばれる存在であった。来栖の遠い先祖に当たるウワバミがウツセミと交わした締約の中には、ウツセミたちの居住地から現世へと追放されたナレノハテをウツセミに代わって駆除するという役目も含まれており、来栖はその約定に従って今ナレノハテと戦っている。

来栖は突進してくる異形のものから目を逸らさずに正面から対峙しながら、膝を軽く曲げて腰を落とし、腰の位置に右の拳を構えてその上を左の掌を覆う。決闘に望んだ武士が必殺の瞬間に居合い斬りをするような気迫を丹は来栖の背中から感じた。

「喝！」

来栖は離れた場所にいる丹の耳朶を揺さぶる大音声と共に腰溜めに構えて右の拳を鋭く前方に突き出した。来栖の正拳突きの中から青白く輝く光の槍が飛び出していき、ナレノハテの胸を射抜いて穂先が背中から突き出る。

怨嗟の咆哮をあげながら胸元を光の槍で貫かれた異形の存在ナレノハテは背中を大きく仰け反らせ、刺し止めている光の槍が消失す

ると共にその醜い身体を粉々に飛散させる。だがナレノハテの体は爆ぜると同時に地面に落ちるとなく空気中に霧散する。肉片が消失して体内から現れた黒い影のように輪郭のぼやけた球体、ナレノハテとウツセミ共通の吸血鬼の核となる精気の真空地帯の蝕も瞬く間になくなった。

来栖はナレノハテが跡形もなく消失すると掲げていた右の拳を下げて肩から力を抜き、大きく息を吐き出す。

「クーくんお疲れ様」

「いつも通り撥で牽制した後、劔の一撃でナレノハテを吹き飛ばしただけだ、大して疲れじゃない」

丹の労いに対して来栖はぶっきらぼうな返事をする、ナレノハテが消え去った場所に背を向ける。

「じゃあ鞆は自分で持って帰ってね」

「なに?!」

「疲れているんなら家まで鞆持っただけでもいいけど、まだまだ余裕みたいだから大丈夫だよな？」

「いや、たった2発でも剣気を撃ち出すのは結構体力使うんだよなあ」

丹に預けた鞆を差し出されて来栖は決まりの悪そうな顔で丹を見返した。ナレノハテとの戦闘時に、人間の活動に不可欠で吸血鬼の養分でもある精気を攻撃用に転換した剣気を発散した疲れがあるので、

鞆を持つのを億劫に感じ丹にそのまま持たせ続けようとする。

「あれ、さっきと言ってること違うよ？」

「うるさい、とにかく俺は仕事をして疲れたんだ。鞆は家まで頼むぞ」

来栖は自分の鞆を丹に持たせたまま自分は手ぶらで帰ろうとして川原を走り出す。丹は来栖の背中を追うが2人分の荷物を抱えているために思ったようにスピードが上がらず、その差は広がる一方だった。

「クーくんの我儘、クーくんの意地悪！」

丹に邪魔な鞆を押し付けて身軽なまま来栖は家に帰ろうとするが、彼の後ろで丹が大声であり他人には聞かれたくない渾名で憎まれ口を叫んでいるのが聞こえると、来栖は顔を引き攣らせて彼女の方に振り返る。

「おい丹、あんまりその渾名を言うな！」

「なによ格好つけちゃって、クーくんはクーくんなんだから仕方ないじゃない！」

「だから止めろって、頼むからもう黙ってくれよ。自分のだけじゃなくってお前の鞆も持ってやるからそれで勘弁してくれ」

小学校時代の渾名でいまだに丹が自分を呼ぶことを来栖は内心嫌がっており、2人きりの時には我慢することになっていたが他人にその渾名を聞かれるのは耐えられなかった。来栖は元来た道に戻って

丹に詰め寄ると、彼女に口を噤ませようとする。

来栖がこれまでどれだけ脅しても宥めても丹はクーくんの呼び名を使うことを止めようとはしなかった。彼女の強情さに根負けした来栖は鞆を押し付けた償いに彼女の分の鞆も持つことを条件に丹を黙らせようとする。

「わかった、それで許してあげるよクーくん」

「くっ…早く鞆を寄越せ」

丹が少し意地の悪い感じで微笑んでくると来栖は鞆を渡すように催促した。ルーズリーフの束とそれを収納するバインダー、ペンケースくらいしか入っていない自分の鞆と比べて、きっちり6時間分の教科書やノートを収めている丹の鞆は来栖が想像しているよりも遥かに重かった。

丹のリュックサックの重さを少々負担に思いながら来栖と丹は並んで夕暮れの街を歩いていく。部活動を終えて帰宅する中学生や習い事から帰る小学生、母親に手を引かれた小さな子どもや会社帰りの会社員など大勢の人と彼らは擦れ違う。

「ねえクーくん、わたしたち他の人にはどう見えるのかな？」

「哀れな荷物持ちの男子とそいつを扱き使う意地悪な同級生ってトコじゃないか？」

ふと丹が行き違う人々の目に自分たちがどう写っているのかと来栖に訊ねると、来栖は冗談半分に彼女の問いに答える。

「もう真面目に答えてよ。でもクーくんの言った通りに見えるのなら、少なくとも吸血鬼と人間、捕食者とその餌には見えないってことだね？」

「俺たちの関係なんて同級生以外の何でもないだろ。強いて変わったことを言うなら、普通よりは強い持ちっ持たれっの関係ってトコか？」

丹は自分たちの関係が食物連鎖の食うものと食われるものという殺伐したものではないことに見えていることに期待を寄せる発言をするが、来栖は素っ気無い調子で自分たちの関係は世間一般の同級生とそうは変わっていないと切り返す。来栖の発言を聞いて丹は隣を歩く彼の顔を反射的に見上げた。

「なんだよ、それじゃ不満か？」

「うっん…ちゃんと同級生に見てもらえれば充分」

来栖が丹の訴えるような視線に気付いて同級生の間柄では不服かと訊ねると、丹は首を横に振った。自分たちが吸血鬼と人間、人の生き血を啜るものとその悪鬼を駆逐する者という特別な関係ではなく、普通の高校生に見てもらえることのならば、それはとても幸せなことだと丹は本心から思っているようだった。

もうすぐ夕日が西の山の向こうに沈もうとしている世界を、来栖と丹は同級生の男女以外の余計な肩書きはなймаま歩いていく。そうして家路に就いている2人を見て、彼らが御門の街の闇に数百年間隠されている秘密に関わっている上、丹に至っては人間ですらないとは誰も思わないだろう。そして来栖も丹も普通の人間として暮らせることが、他の何よりも望んでいることであつた。

第1回、光と陰をまたにかけて了

第2回、不死身の一族

金色の月が秋の夜空から柔らかな光を地上に降り注がせる夜更け、切島葵は姉の寝室の前に立っていた。

友人と交流を深めるためのメールに勤しみネットやテレビで流行のチェックに余念がない葵が遅くまで自分磨きに精を出しているとは対照的に、まだ高校生だというのに所帯じみた雰囲気を纏い早寝早起きを徹底して若さを棒に振っている彼女の姉はまもなく日付が変わろうとするこの時間帯にはとくに就寝している。

しかし葵はどうしても姉に頼みたいことがあるため、断腸の思いで姉の穏やかな眠りを妨げることにしたのだった。ちなみに葵が姉の眠りを妨げてまで頼もうとしていることは、明日友人と遊びに行くから姉の小遣いを少しばかり貸してほしいという催促である。

「姉さん起きてる？」

葵は姉が奇跡的に起きている可能性を考慮して部屋の戸をノックするが、案の定姉は夢の中にいるらしく返事はない。

「入るわよ、姉さん」

眠っている人間の返事を期待しても無駄なので、葵は問答無用で戸を開けて姉の部屋の中に押し入った。入り口の脇にある電灯のスイッチを点けて、強引に惰眠を貪っている姉のことを叩き起こそうとする。

だが電灯に照らされて部屋の中が明るくなると、葵は姉の部屋で

異変が起こっていることに気付いた。葵は空になっている姉のベッドを見るなり顔を蒼白にすると、身を翻して姉の部屋の中から駆け出していく。

「父さん大変、姉さんが部屋にいないの！」

深夜の静寂を引き裂くような大声と共に葵はリビングに駆け込んでいく。深夜の報道番組を受信している液晶テレビから目を逸らして、一家の主の斎は取り乱した様子の次女の方を振り向いた。

「コンビニにでも行ってるんじゃないか？」

「少しでも出費を抑えようとしている姉さんがスーパーに比べて割高になるコンビニで買い物をすること自体珍しいし、こんな夜中に出かけるなんてありえないわよ！」

「心配するな、そのうち帰ってくるだろう」

姉の姿が見当たらないことに動揺している葵とは対照的に、普段は姉のことを過保護なまでに心配しているくせに斎は妙に落ち着き払った様子で娘の応対をする。まるで姉がどこに行っていていつ戻ってくるか知り尽くしているようなほど余裕のある態度を見せると、斎はテレビの画面に視線を戻した。

「今度こそ姉さんが戻ってこないかもしれないのにそんなことを言うなんて…父さんの薄情者、もういいわ姉さんのことはアタシ独りで探すから！」

「帰ってくるなりぎゃあぎゃあうるせえな、近所迷惑も考えろ」

姉がまた失踪したかもしれないのに冷淡な態度の父親のことを見限って、葵が姉を探しに出かけようとする。と玄関の外から家の中に居候の少年が入ってきた。

「クーくん、アンタ姉さんがどこ行ったか知らない？」

「おい切島妹、クーくんじゃなくて来栖くるすさんって呼べ」

「男のくせに細かいことを気にするんじゃないわよ、そんなことよりもアタシの質問に答えなさいよ」

玄関と座敷の段差は30cm近くあったが、長身の居候来栖と小柄な葵の視線はほぼ同じ高さにあった。葵は姉と同級生の来栖に対し、薄い胸を反らして居丈高な態度で姉の行方を知らないか訊ねる。

「ただの居候の俺が、丹まいとがどこに行ったかなんて知る訳ないだろう？」

「図体がでかいだけでアンタってホントに使えないのね…もういいわ、ぼさつと突っ立ってられると邪魔だからそこどいてよ」

丹の同級生で二学期が始める頃からこの家に居候をし始めた来栖ならば姉の行方を知っているかもしれないと葵は淡い期待を抱くが、彼の答えを聞いて葵は嘆息する。身長だけでなく肩幅も広い来栖がいるだけで狭いこの家の玄関は塞がってしまったので、葵は自分が外に出るために彼に玄関からどくよう命じた。

「斎さーん、じゃじゃ馬娘が夜歩きしようとしてますけど止めた方がいいっすよね？」

「ああ、子どもは夜更かししてないでさっさと寝ろ」

来栖が玄関の扉と葵の前に立ち塞がったまま奥のリビングにいる
斎に葵の扱いについて指示を求めると、斎は来栖の発言に相槌を打
った。

「いつも11時にはベッドに入っている姉さんが家にいないって言
うのに、アタシが安穩と眠れる訳ないでしょ?！」

「あいつのことなら心配ねえよ、それに寝る子は育つっていうだろ
?」

「ちょっとクーくん離しなさいよ、こら!」

来栖は履いている大きなスニーカーを脱いで行儀正しく玄関の脇
に並べると、行く手を塞いでいる葵の体を軽々と持ち上げて座敷に
上がった。来栖の幅広の両手に肩を掴まれて子どものように宙に浮
かされた葵は足をじたばたさせながら抗議するが、来栖はそのまま
彼女をリビングまで連れて行く。

「斎さん、その姉離れができてない妹の面倒頼みますね」

「分かった、お勤めご苦労だったな」

「誰が姉離れ出来ない妹よ!」

葵は来栖の手から乱雑に投げ出されて転がった床の上から飛び起
きると、入り口から顔を覗かせて来栖の背中を睨む。しかし来栖は
葵の剣幕を無視して入浴のため洗面所に入ってしまった。

「父さんもクーくんも冷たすぎるんじゃない、姉さんのことが心配じゃないの？」

「そんな訳ないだろう、あいつも俺もちゃんと丹のことを想っている」

「だったらテレビなんか見てないで姉さんを探しに行くのが普通じゃない？」

来栖が風呂場に逃げ込んでしまったため鬱積を彼にぶつけることが出来ず、葵は行き場のない怒りの矛先を父親に向けて八つ当たりをする。しかし斎は変わらず突然家からいなくなった姉の身を案じていないようだった。

「本当に丹がいなくなったのならな、しかし今は大丈夫だ」

「どうしてそう言い切れるの？」

「それは子どものお前が知る必要はない。明日朝から友だちと遊びに行くんだろ、だったら早く寝た方がいいんじゃないか？」

父親と恐らく来栖は姉の丹が今どこにいて何をしているか知っているようだったが、葵にそれを伝えるつもりはないらしい。葵は隠し事をされただけでなく、子ども扱いされたことで一層機嫌を悪くする。

「いつまでも子ども扱いしないでよ、姉さんに何かあったら父さんとクーくんのせいだからね！」

葵は金切り声で父親とこの場にいない居候のことを罵倒すると、

力いっぱいドアノブを強く引いてリビングのドアを閉めた。ドアを留めている蝶番（ちょうばん）が壊れたのではないかと斎が懸念を抱くくらい大きな音を立てて扉が閉まり、足音を立てながら葵は階上の自室へと引き上げていく。

「さすがにいつまでも隠し通せはしないか、しかし本当のことを言ったところであのひねくれ者が素直に信じる訳もないし……」

斎はソファの背もたれに凭れかかりながら彼と丹それに来栖の3人が共通している秘密を、葵にも打ち明けるべきかどうか逡巡する。丹が今晚何の目的でどこに出かけているのかを話すのは簡単だったが、その内容は到底中学生の葵が信じられるようなものではなかった。

「無理もないか、丹と紅子が吸血鬼になってこの世界とは別の空間で仲間と一緒に暮らしていると聞いた時、実物を見るまで俺も信じる気にはなれなかったもんな」

自分自身が作り話とした思えない事実を受け容れるまでに時間を要したことを思い出して斎は苦笑を浮かべる向こうで、液晶画面に映るタレントたちは台本に記された通りの馬鹿笑いをしていた。

* * *

薄紫からオレンジへ変化していくコントラストが彩る黄昏の空の下、癖のある髪をショートカットにした女性が手元の地図と辺りの風景を見比べながら慎重な足取りで歩いている。灰色のウールで織られたカーディガンにデニムパンツを履いたその女性は日本人にしては比較的長身で体の線も女性的な膨らみがあるが、化粧つきのないその顔の表情はどこか頼りなげであり高校生くらいに見える。

「あうち…ここ来るの初めてだから自分が今どこにいるのかはつきり分からない。やっぱり誰かについてきてもらえばよかったなあ…」

見知らぬ通りを見回して困惑した表情をしているのは、紫水小路しすいこうじに住む吸血鬼の一族ウツセミの庶務全般を担当する部署の政所まんどうしよに所属している若いウツセミ丹である。彼女は同僚に使いを頼まれてこの地区にやってきたが、人間からウツセミに転化して2ヶ月余りの上、普段はウツセミの安住の地である紫水小路ではなく現世で人間だった時の家族と生活しているため未だに土地勘が覚束ない場所がいくつかあった。

使いに与えられた目的地であり、紫水小路に住まう吸血鬼の嗜好品である血液の代用品チンタの醸造と流通を一括して担っている酒蔵さかぐらのあるこの辺りも丹に馴染みのない地区の一つだった。

紫水小路にはウツセミの氏族が2つ存在していて、丹は商取引や接客業を生業としている実業的な性格の強い代永よなが氏族に属していたが、酒蔵には代永と職人氣質の富士見ふじみ氏族のウツセミが混在しており、酒蔵の敷地はちょうど2つの氏族の領地の境に面していた。

両氏族の間に交流がない訳ではなかったが、即物的かつ現実的な利益を追求し氏族内の厳格な統制を敷いている代永と観念的で理想主義でありまとまりのない富士見の気質は相容れず両者の関係は良好とは言い難かった。そのため一方の氏族のウツセミが相手の領地に足を踏み入れることはそれほど多くはなく、特に代永のウツセミが富士見の領地を訪れることは滅多にないことであつた。

そのため両氏族の領地の境界に位置する酒蔵の周辺の地理に丹が

疎いのも仕方のないことと言えたが、途方に暮れているばかりでは時間を無駄にしまい使いを果たすことができない。誰かに道を聞いて酒蔵の場所を教えてもらおうと丹が思っていると、彼女がやってきた代永の領地の方から一台の自転車がやってきた。

「あの、すみません」

「どうかした、見慣れない顔だけど君、代永のひと？」

丹が道を訊ねようと前後の荷台に大きな籠を取り付けた古風な自転車に跨っているその人物に声をかけると、自転車を運転していた人の良さそうな青年の姿をしたウツセミはブレーキをかけて丹の前に立ち止まり会話に応じる。

「はい、わたし丹って言います。あの、酒蔵の場所を教えて欲しいんですけど」

「いいよ、僕も今から酒蔵に戻るところだし案内するよ」

「本当ですか、よろしくお願いします」

「はは、礼を言われるようなことじゃないよ。酒蔵に用があるってことはチンタを買いに来てくれたんだろう、お客様をもてなすのは当然のことじゃないか」

酒蔵で働いているらしい青年の姿をしたウツセミが気前よく案内を承諾してくれると、丹はあいての親切に感謝して頭を下げた。青年の姿をしたウツセミは律儀な丹の態度を微笑ましく思ったように明るい笑顔を浮かべると、サドルから降りて自転車を押しながら丹の案内を始める。

酒蔵までの道のりで丹は自転車に乗っていたウツセミが晨あけという名前の20年ほど前に転化した富士見氏族のウツセミであること、ウツセミ全体だけでなく酒蔵の中でも若輩者であり代永のウツセミの下にチンタの配達に回らされていて今はその帰りだということ、そして人間だった時は御門市内にある美術大学の学生だったことを知った。

「富士見のウツセミって創作活動を仕事にしているひとが多いですよね、晨さんは絵を描くことを仕事にしないんですか？」

「確かに富士見氏族には絵や織物、工芸品を作り、代永のウツセミが花街で稼いだ金でそれを買わせて収入を得ているひともし少なくともいけどね、それでやってけるのはやっぱり人間の世界と同じで特別な才能の持ち主だけさ。僕程度ではとても天才肌のあのひとたちの中でやっていけないよ」

晨の経歴を聞いて丹は画家を志していた彼が筆を置いて何故酒蔵で働いているのかと疑問に思うが、晨の返答を聞いて気まずい顔になる。しかし丹が横目で覗った晨の顔には後悔の念は浮かんでおらず、自分の素質の限界に諦観したある種の清々しさがあった。

「すみません、事情も知りもしないくせに好き勝手言っちゃって……」

「いいさ、僕が絵で食っていけないのはどうしようもない事実だからね。丹ちゃんのせいじゃないよ」

丹が不躰な発言をしたことを謝罪すると、晨は彼女に罪悪感を引き摺らないように言い聞かせるように快闊に笑う。晨の爽やかな笑

みを見て、丹の表情も明るくなった。

「さあ着いたよ、ここが酒蔵だ」

丹は晨が腕を掲げて示した木製の大きな門扉を見上げる。百年以上の時を生きている住民の感覚を反映してか、人間の暮らす現世よりも紫水小路の通りの造りは数十年遅れたものになっていたが、酒蔵の門は古風な建物が多い紫水小路の中でも特に古めかしい。封建時代の関所のような門を前にして、丹はその荘厳さにしばし呆気に取られる。

「驚いた？　かく言う僕も最初に見た時は丹ちゃんみたいにびっくりしたんだけどね」

晨は丹が酒蔵の門を見て圧倒されるのも当然だと言いながら、数mの高さがある門の端にある通用口の扉を押し開けようとすると、内側からその扉が開かれた。中学生くらいの未成熟な体型をしたメイド服を着た少女に続いて門の内側から出てきたのは、丹が眼前に巨大な門が聳えていることを忘れてしまうほどの美貌をした腰まで届く艶やかな長髪の美女だった。

ウツセミに転化して以降、丹は数え切れないほどの美男美女を見てきたつもりだったが、酒蔵の門から出てきた女性の美しさに比べ、それまで目にしたもの印象など霞んでしまいそうだ。丹念にカットされた水晶の彫刻のように凛として、玲瓏としたその女性の容貌に丹は思わず魅入ってしまう。

「あら晨じゃない、久し振りね」

「ご無沙汰しております、千歳様……」

晨は硝子細工のように触れば壊れてしまいそうな美しさのその女性と面識があるらしく、自転車のスタンドを立てるとその場に恭しい仕草で跪いた。

「あなたと私の仲なんだから、そんなに畏まる必要はないじゃない？」

「いえ、族長の貴女に下つ端の私が敬意を表すのは至極当然のことと存じます」

「こんな風に私を敬うのはあなたくらいのものよ。私たちよりも上下関係が厳しい代永だってそこまでしないんじゃないかしら、ねえ烙印を刻んだ新米さん？」

自分の足元に跪いたままの晨から視線を丹に移すと、長髪の美女はそれまで能面のように無表情だった口元を微かに吊り上げる。顔立ちが整い過ぎているため、新雪のように白い顔の中でただ一点鮮やかな赤に染まっている唇が弧を描いた様は、笑ったというには余りにも壮絶な凄みがあり、丹はその笑みを美しいと思った以上に背筋が凍るような衝撃を感じた。

氷の妖精のように非現実的なほど美しい笑みを浮かべているその女性と丹の目が合って思考が停滞してしまったせいで、今自分が向かい合っている人物は以前丹が現世に赴く許可を審議する紫水小路の有力者の会合に出席していた富士見氏族の族長千歳だと思い出すまでにしばらく時間を要してしまった。

「お嬢様、烙印を刻まれるなんてあのひとどんな悪さをしたんですか？」

丹が質問に答える前に、千歳の脇に控えていたメイド服の少女が甘えた声で主君に擦り寄りながら、掟に背いたウツセミに科される罰の中でも特に重いものされる烙印の刑に処せられるに値した丹の罰を問う。

「悪さをする暇もないくらい早く、自分から烙印を刻んで欲しいと族長の源司さんに頼んだそうよ」

「ええっ、ウツセミが自分から背中を銀の刃で斬ってほしいなんて正気の沙汰じゃないですよ?!」

「そうね、見かけによらず酔狂な子みたいね。まあ、産みの母親に転化させられたウツセミがありきたりの性格じゃあ面白くないけど」

千歳は自分の一言一句に多大な反応を示す従者を愉快げに見つめていたが、実の母親の手で魔性の身に転化させられたことを述べるに丹に流し目を向ける。丹に向けられた千歳の瞳は硝子球のように澄んでいて、無機質な感じだった。

丹は千歳の視線に射竦められながら、千歳の美しさが他のウツセミと比べても際立っている理由を漠然と察する。源司や緋奈、それに母親の紅子といった知り合いのウツセミたちの美しさが色相関における赤や黄色の暖色系を用いて前に浮かび上がってくるような印象ならば、千歳の美しさは彼らとは真逆の青系統の色を使って後ろに下がって見える寒色の印象だった。鑑賞する側にアピールするのではなく、彼女の方に引き込まれてしまいその虜になってしまう危険な感じの美貌を千歳はしているからこそ、美男美女揃いのウツセミの中でも異質の存在となりえるのだろう。

「黙り込んでしまっているけれど人見知りする性格なのかしら、それでは厚かましい連中の多い代永の中でやっていけないわよ？」

千歳は彼女の美貌に気圧されてしまっている丹が自分の質問に答えないことを不服に感じたらしく、微かに眉を吊り上げた。それから滑るように静かな足取りで千歳は丹に歩み寄っていく。丹は蛇に睨まれた蛙のようにその場から一步も動けなくなったところか、瞬き一つできずに千歳がやってくるのを待つ。

千歳は差し伸ばした手を丹の頬に触れさせた。頬に触れた千歳の掌の感触は労働をしたことがないもののように柔らかく滑らかだったが、氷のように冷たかった。丹が自分の頬に触れている千歳の手に視線を向けていると、千歳の顔が自分の顔の目の前まで迫っていることに気付くのに遅れてしまった。鼻先が触れるほど丹に顔を密着させて、千歳はまじまじと彼女の顔を覗き込む。

「あ、あの……?!」

「思っていたよりも背が高いのね。でも恒^{わたる}おじさまが欲しかったのも頷けるわ、あなたが人間だったら私も手元に置きたいもの」

千歳は心底丹が同胞であることに落胆したように長い睫毛を伏せて溜息を一つ吐くと、密着させていた顔を丹から離し彼女に背を向ける。千歳が丹の前から離れ始めると、従者の少女が彼女に駆け寄ってきた。

「お嬢様、わたしの奉仕に何かご不満があるのですか？」

「いえ、あなたの働きには充分満足しているわよ。でもね永遠^{とわ}、あなたも綺麗な花を見ればそれを花瓶に挿して飾っておきたいと思う

でしょう。私はあの子にそれと同じような感情を持ってしまったのよ」

「あんなデクノボウ、お嬢様の召人^{めしやうど}には相応しくくないですよ」

千歳に永遠と呼ばれたメイド服の少女は頬を膨らませると主の腕を掴んで抱きつく。千歳は従者の少女が丹に嫉妬する姿を見ても気を害さずに、むしろ自分に愛想を振り撒いてくる彼女を可愛らしく思っているようだった。

「晨それから丹さん、私たちはこれで。またお会いできることを楽しみにしているわ」

「ありがたきお言葉頂戴し、まことに光栄です」

「は、はい……」

千歳が艶然と微笑みかけると、晨と丹は恐縮した様子でそれに応えた。彼らの返事を聞き届けると千歳は、精気の提供や身の周りの世話、場合によっては夜伽の相手までさせる専属の奴隷である召人の永遠を伴って酒蔵の前から立ち去っていった。

「同じ族長でも、ウチの源司さんとは随分印象が違うひとですね……」

「うん、一族の運営をうまくやっているやり手だけど源司さんは気さくな性格で誰とでも打ち解けられる人だからね。千歳様は源司さんとは対照的に、選り好みが激しい性格で気に入らなければ同じ氏族でも口も利こうとしない方だから」

千歳の圧倒的な美貌を前にして萎縮していた丹と晨は共に肩の力を抜きながら、互いの族長の対比をして緊張を解そうとする。

「晨さんって千歳さんと仲良いんですか？」

「へ?!」

「だって千歳さんのことよく知っているし、千歳さんも晨さんに遠慮することないって言っていましたし」

丹が晨に彼と千歳の仲を訊ねると、晨は素っ頓狂な声をあげる。狼狽した様子の晨の態度を訝しく思いながら丹は質問を重ねた。丹の質問を聞くと、晨は何か言いにくいことがあるような顔を浮かべる。

「無理に知りたいとは思いませんし、晨さんが言いたくないならそれでいいですよ?」

「…丹ちゃん、僕はね昔千歳様の召人だったんだ。精気を摂取することが最たる動機とはいえ、僕は千歳様の寵愛を受けていた。だから千歳様は昔情けをかけてやった僕が、あんまり余所余所しい態度をすることが面白くないのさ」

丹が晨の心情を慮って、彼が答えたくないのならそれでいいと言うと、晨は重く閉ざした口を開いて丹の質問に答え始める。かつての2人の聞いたものの、丹は先ほどの千歳の晨に対する態度は愛玩動物に対するものだとは思えずいまいち腑に落ちなかった。

「さあ中に入ろうか丹ちゃん、政所の先輩たちが渴きを堪えて待っているんだろ?」

「あうち…そうだった、早く戻らないとみんなに怒られちゃう」

晨に使いの用を思い出させられると丹は苦々しい顔を浮かべた。彼女が酒蔵に使いに出された理由は、政所の先輩たちから渴きを癒すためのチンタを酒蔵から買ってくるように申し付けられたためだった。ウツセミの中では割合温厚なものが多い政所の職員だったが、あまり長いこと渴きを我慢させられては彼らの堪忍袋の緒も切れてしまうだろうと丹は身を震わせる。

「突き当たりの受付に言えば、すぐにチンタをもらえると思うよ」

「晨さん、色々とありがとうございました」

「うん、それじゃまたね」

晨は丹にチンタの受け渡し場所を指で示して教えると、彼女の進路とは反対方向にある自転車置きに駐輪場へと向かっていった。丹は晨に礼を言々と教えてもらった受付に小走りで向かっていく。木造の建物に瓦屋根の葺かれたチンタの醸造をしている蔵は酒蔵の名が示す通りの広い間取りをしていて、蔵の中からは丹の通う高校の南にある酒造工場のようにアルコールに似た甘い香が漂ってきた。

「ウツセミも人間と同じで、いろんな性格のひとがいるんだなあ」

丹は受付の職員に用件を伝えて必要な分量のチンタを用意してもらっている間、今日出会った富士見のウツセミたちや今まで知り合った代永のウツセミたちのことを思い浮かべて、ウツセミの性格も人間と同じように十人十色だということを感じる。

ウツセミに転化して人間でなくなったことに丹は大きな喪失感を覚えていたが、最近ウツセミである自分に慣れてくると、人間とウツセミの違いは活動に必要な精気を自給できるかできないかくらいのことでしかないように彼女は思い始めていた。

* * *

酒蔵からチンタを購入してきた丹が戻ると、仕事を終えた政所の職員たちが我先にと籠の中からチンタの入った瓶を抜き取っていく。チンタを受け取った政所のウツセミたちは瓶に蓋をしているコルクを引き抜くと、湯上りに飲む牛乳のように小瓶の中にある赤ワインに似た液体を一息で飲み干した。

「こら、長であるわしを差し置いて先にチンタを飲むでない！」

幼いトーンの声が政所の廊下に響くと、奥から和服に身を包んだ中学生くらいの少女が細い肩を怒らせてチンタを堪能した職員たちの所にやってきた。

「申し訳ありません政所様、しかしお姿が見えなかったので先にいただいてしまいました」

丹の産みの母親で彼女と同じくウツセミの紅子ベニが半分ほど残ったチンタの瓶を握ったまま政所の責任者である少女を待たずにチンタを飲んでしまったことを、どこか皮肉を含んだ言い草で詫びる。

「最近お主も腹黒くなってきたのう紅子、ここに来た時は生娘のように清らかな女子であつたのに……」

「それでも二児の母親ですから、強かでなければ母親の役目は務ま

りません」

「朱美ちゃんあけみの分はこっちに残してあるよ、ほら」

丹はカーディガンのポケットからチンタの小瓶を取り出すと、紅子に言い含められてしまい不貞腐れている様子の朱美に差し出した。

「おお、毎度のことながらお主は気が利くのう、やはり持つべきものはよき友じゃな！」

飲み損ねたと思ったチンタを取り置きしてもらえたことに朱美は歓声をあげると、表情を輝かせて丹の顔を見上げた。

「丹、こつちで一緒に菓子でも食いながら部下にいびられたわしを慰めとくれ」

「政所様、その前に目を通していただきたい書類があるのですが……」

「わしの机の上に置いといてくれ、暇な時に見ておく」

朱美の審査が必要な書類を片付けて欲しい旨を紅子は告げるが、朱美は丹の手を取ると生返事をして休憩室がある2階へと登っていつてしまう。

「書類が溜まりすぎてもう置く場所がございませんから仕事をしてください」

「分かった、じゃが仕事に取り掛かる前に鋭気を養わねばのう。そういうことではばらく上におるぞ」

紅子は既に朱美がすべき仕事は嵩んでいるのですぐにでも取り掛かるように頼むが、朱美は上手いこと言い逃れをして2階の部屋の中に隠れてしまった。またも朱美に仕事をしてもらえず、仕事が終わらないことを悲嘆して紅子は溜息を吐いた。

紅子の気苦労を尻目に朱美と丹は休憩室の中で卓袱台を囲んで談笑をしている。朱美が暗い赤色の液体を少しずつ飲んでる傍らで、丹は煎餅を齧りながら親しげな様子で言葉を交わしていた。

「朱美ちゃんはチンタがどうやって作られるのか知っている？」

丹は朱美が味わっているワインに似た風合いの液体の醸造の仕方を、見た目は自分よりも若い但实际上は遥かに長い歳月を過ごしている友人に訊ねる。朱美はその問いを聞くと少し意外そうな顔で丹を見返した。

「詳しいことは酒蔵のものではないので分からんがおおよそのことは知っておるぞ。しかし何故いきなりそんなことを気にかけるのじや？」

「特別な理由はないけど、酒蔵にお使いに行った時に蔵の中からお酒みたいな臭いがしてきて、どんな風に造っているのかなあって思っただけだよ」

丹は酒蔵の敷地内にあるチンタを醸造する蔵の中から漂った臭いがアルコールに似ていたことで感じた素朴な疑問だと朱美に答える。しかし朱美は丹の質問への回答をどう返すべきか迷っているようで、眉を顰めて難しい顔をしていた。

「もしかしてチンタの作り方って訊いちゃいけないことだった？」

ウツセミになってから2ヶ月余り、まだ丹はウツセミの常識というものを完全には備えていなかったで、政所の同僚たちが仕事終わりの一杯を楽しむチンタの醸造を訊ねることがタブーなのかどうかも分からない。だが先代の代永氏族の族長を務めた朱美が渋い顔をするということは、あまり軽々しく口にしていい話題ではない事は丹にも察せられた。

「ちょっとチンタの醸造には込み入った事情があつてな、丹もウツセミなんじゃから知っておいて損はないがあまり聞いて得するような話でもないし……」

「それなら教えてくれなくてもいいよ、ちょっと疑問に思ったただだから」

「いや、話に触れたからにはお主には聞いてもらおう。我らウツセミの宿痾である精気の渴きを癒してくれるチンタが如何にして作られるということをな」

朱美が返答を渋っているのを見て丹はチンタにまつわる話を終わらせようとするが、今度は反対に朱美が積極的にチンタの醸造の仕方を丹に教えようとする。普段は肩肘を張らずに付き合えるのに、時折朱美は紫水小路に住む多くのウツセミから畏敬の念を寄せられている存在に相応しい貫禄を見せることがあり、今その悠久の時を越えてきた存在の威圧感を発して丹のことを見据えた。

朱美の貫禄にすっかり飲まれてしまつて、丹は反射的に首を縦に振ってしまう。

「丹はチンタを漢字でどう書くか知っておるか？」

朱美の切り出してきた質問に対し、丹は正直に首を横に振る。いくつか変換する候補を頭に浮かべてみたが、どれもしっくりこなかった。

「紫水小路に流通しておるチンタは漢字で鎮魂の鎮にニンベンの侘びるという字を書く。じゃが呼び名の元になった南蛮渡来の葡萄酒、今は『わいん』と呼んどうる酒はこういう字を書いておったんじゃ」

朱美は壁際に置かれている机の上から鉛筆と紙を取ると、卓袱台に紙を乗せて鉛筆で紫水小路のチンタとその由来となったワインの旧名を達筆で書き始める。丹は紙を覗き込んで、朱美が書き終えた2つのチンタの表記の違いを見比べた。

紫水小路のウツセミたちに愛飲されているチンタの漢字表記は朱美の説明にあった通り『鎮侘』であり、その一方で名称の元となったワインの旧名は『珍陀』と異なっている。

「2つのチンタの漢字は全然違うね、でもどうして？」

「どちらも赤い色をしたひとを酩酊させる液体ということとは共通しておるが、その原料となるものは全く別なものだからじゃ。葡萄酒であるこっちの珍陀の原料はもちろんブドウじゃが、わしが今飲んでおるこっちのチンタの材料はなんじゃと思う？」

「渴きを癒せるんだから何かの血は含んでいるだろうけど、でもただの血にしてはやけに透き通っているし……」

「お主の考えた通り、ウツセミの渴きを潤すチンタには血が含まれ

ておる。じゃが普通に生き血を絞っただけでは日持ちせんし、何より採取できる量が限られてしまう。そこで酒蔵の開祖はある程度保存の利く状態に加工して、かつ採取できる量を増やせる方法を考案したんじゃ」

「どんなやり方で……？」

丹が紫水小路のチンタの漢字表記が元となったものと異なっている理由を訊ねると、朱美は2つのチンタが見た目は似ていても中身はまるで別物ということを明かして質問に応じていく。徐々に低くなっていく朱美の声のトーンに、丹はこの先は聞いてはならないことであるような不安を感じながら酒蔵の始祖が考案した手法の詳細に言及した。

「酒を醸造するように水を張った樽の中に紫水小路で死んだものの亡骸を沈めて、特別な細菌にその亡骸を分解させて中のものを発酵させるのじゃ。細菌の働きと歳月の経過と共に樽の中の死体は肉も骨もぐずぐずに崩れ、水と体液が融和していくことでチンタの原液となっていくんじゃ。そして頃合いになったら残った骨や髪を濾してチンタが完成するというわけじゃ」

淡々と朱美は紫水小路のチンタの精製過程を語ったが、朱美だけでなく母親の紅子や政所の同僚たちが美味しそうに飲んでいたものが、人間の死体を果実や穀物のように扱ってできたものと聞き丹は絶句する。

「わしらが美味そうに飲んだるものが人間の死体を原料と知って、お主が驚くのも無理はない。じゃがわしらが人間と同じものを飲み食いしても、渴きを癒せんのはお主とて承知しておろう？」

「そうだけど、でも亡くなった人の体をそんな風にするなんて……」

「人間の良識からすれば惨いと思うじゃろつな」

丹自身も本能的に他人の血を欲するウツセミであり、朱美の言い分は理解できる。しかし丹の持つ人倫が死者を辱めるような所業を容認できそうにはなかった。朱美も丹の心中を察したらしく自嘲気味に頬を歪める。

「だったらどうしてそんな酷いことを続けるの、ちゃんとお墓を作つて弔つてあげるべきじゃない？」

「現世の道德では死体を使って飲料を作るなど人倫に悖る蛮行かもしれん。しかし紫水小路からあの世に旅立った者に対し、その亡骸からチンタを作ることがわしらなりに誠意を持った弔いの形なんじゃ」

「なんでそう思うの？」

「紫水小路が出来てから数百年、数え切れんほどの人間がこの街を訪れ、そのうちかなりの数がここで亡くなっていった。その者たち全員分の墓を立ててやれる土地は紫水小路にはないし、仮に立てられたとしても墓を参つてやるものはおらん。子孫を残していける現世ならともかく、どれだけ愛を育んでも子を成すことができないウツセミの支配する紫水小路では墓は殆ど意味を持たないんじゃない」

「だからつて死体を弄んで言い訳が……」

「丹、お主は一つ思い間違いをしておるぞ。わしらはここで亡くなったものの死体を弄んでいる訳ではない、むしろ我らが命を繋いで

いくために授かったものとして丁重に扱っているつもりじゃ。だからこそ酒蔵のものは丹精込めてチンタの醸造をしておるし、そうして出来たわしらも樽の中で朽ちたものに感謝しながら味わっておる。決して安酒を煽るような軽い気持ちで口にしてはおらん」

丹は紫水小路に迷い込んだ人間たちが生前自分たち吸血鬼に精気を供給するだけでなく、死後も安らかに眠ることも許されずにチンタの材料としてその肉体を弄ばれているように感じてその不幸に胸を痛める。だが朱美の口からウツセミたちが自分たちのために尽くしてくれた人間たちの冥福を祈る思いでチンタを飲んでいると聞かされると、少しだけ溜飲が下がった気になった。

「丹、紫水小路のチンタがあの子を書く理由は生前のみならず生後も我らウツセミのためにその身を捧げてくれた人間たちへの鎮魂と、現世で天寿を全うした人間のように弔ってやれんことへの詫びを表すためなんじゃ。未だウツセミになって日が浅いお主が、チンタの醸造法を感情的に受け容れられん気持ちは分かるが、どうかこれがウツセミの人間に対する慰霊の方法じゃと思ってくれ」

朱美は瓶に残ったチンタを飲み干すと、正座をして姿勢を正し丹の理解が得られるように頭を下げた。

「やめてよ朱美ちゃん、わたしみたいな下っ端にそんなことしたら先代の族長の威厳が……」

「過去のことなどわたしにはどうでもよい。この先ウツセミとして生きていくお主に人間とウツセミの齟齬を受け容れてもらえることの方が重要じゃ」

丹は先代の族長にして今尚ウツセミの社会に影響力を持つ朱美が

自分のような若輩者に頭を下げるのを見て、恐縮した様子で姿勢を直すように訴えるが、朱美は昔の肩書きには一切拘らず、将来を担っていく存在として丹にウツセミの抱える矛盾を容認してくれるように懇願した。

「朱美ちゃん、やっぱり簡単には亡くなった人の体を埋葬しないでチンタの材料に使って感覚が理解できそうにない」

「そうか…お主の理解が得られんのは残念じゃな」

丹の答えを聞いて顔を上げた朱美の表情は、彼女の同意が得られないことを心底惜しそうな様子に曇っていた。

「でもウツセミとして何十年、ううん何百年も生きているうちに自然と受け入れられるようになるんだと思う。だから今生理的に受け付けられないからって頭ごなしにチンタのことを否定しない」

丹は人間としての感性が強い今は理解できないが、長い年月を経ていくうちにチンタの醸造の仕方次第に受け容れられるようになるのだらうと朱美に告げる。今日話したことが、丹にとっても無駄にはならなかったことに朱美はひとまず安心したようだった。

「それにね朱美ちゃん、今日お使いに行ったおかげで酒蔵で働いている富士見氏族のひとと知り合いになれたの。晨さんっていう若手のウツセミなんだけど、すごく優しくていいひとだったよ」

「そうか、それはよかったな」

「うん、富士見のウツセミと知り合いになったのは初めてだから嬉しい」

丹がチンタに関わることにそれほど拒否感を持っていないことを知って朱美は口元を綻ばせる。丹も酒蔵に使いに行ったことで晨と知り合えたことを有意義に感じているらしく、明るい笑みを浮かべながら朱美に頷き返した。

* * *

結局夜中に家を抜け出したきり、姉の丹は家に戻ってこなかった。行方の分からなくなった姉のことが気がかりで夕べはほとんど一睡も出来ずに夜明けを迎えた葵は、目の下に濃い隈を作って家の門の前から通りに姉の姿を探し求める。

「姉さんの嘘つき、もう二度と黙ってアタシの前からいなくならないって言ったくせに……」

「葵、こんな朝早くから外に出てどうしたの？」

以前自分に誓った約束を反故にされた怒りと姉が姿を消してしまった悲しみで葵の小さな胸は一杯になり涙が滲んできた。ようやく東の空から顔を覗かせ始めた朝焼けが涙で滲んで見えた時、聞き慣れた少し間の抜けた感じの声が聞こえてくる。

葵が顔を跳ね上げると家の敷地の周囲を囲ったフェンスから顔を覗かせて、昨夜からいなくなっていた姉がこちらを心配そうな目で見つめていた。

「姉さん！」

葵は門を開いて表に飛び出ると、頭一つ分背の高い姉の胸元に勢

いよく抱きついていく。葵が突進してきた勢いに押されて、彼女の姉は大きく後方によるめいた。

「いきなりそんなことされたんじゃ危ないよ葵……」

「姉さんの馬鹿、一晩中どこをほつつき歩いてたのよ?!」

「昨日はお母さんの所に行ってたから、夜の街をふらふらしていた訳じゃないよ」

葵の姉、丹は自分の胸に顔を埋めて子どものように泣きじゃくる妹に困惑した顔で接しながら、昨晚何をしていたのかという事実を告げる。

「だったら行き先をアタシたちに教えなさいよ、というより何でみんなアタシにだけ母さんが今どこに住んでいるか教えてくれないの?」

「えっと…今お母さんが住んでいる所に行くのはすごく面倒なんだ、だから葵にはまだ教えられないの」

「父さんも姉さんも子ども扱いしないで、アタシはもう大人なのよ?!」

丹が無事に家に戻ってきたことで心に余裕を取り戻せた葵は、10年近く失踪しており2ヶ月ほど前に再会した母親の居場所を自分だけ知らされていないことに不平を言う。しかし丹は葵の年齢を理由に母親の居場所に関して沈黙を守ると、葵は父親だけでなく2歳しか違わない姉にも子ども扱いことに憤る。

「朝っぱらからキンキン声で喚いている奴のどこが大人だよ？」

「クーくん?!」

門の前で切島姉妹が言い合っていると、皮肉っぽい笑みを浮かべながら居候の来栖が玄関から姿を現した。切島姉妹は声を揃えて彼の渾名を口にする。

「丹、お勤めご苦労さん。それと切島妹、俺のことは来栖さんって呼べって何度言わせりゃ気が済むんだ、お前には学習能力がねえのか？」

「うるさいわね、居候の分際で偉そうな口利くんじゃないわよ！」

仕事を終えて戻ってきた丹を労うと共に、来栖は葵に自分の呼び方の訂正を求める。しかし葵に来栖の呼び方を改めようとする気配は微塵もなく、怒りの矛先を姉から来栖に変えて食って掛かってきた。

「クーくん今からどこか出かけるの？」

「ああ、ちょっと野暮用でな。夜には戻るから晩飯頼むわ」

「わかった、行つてらっしゃい」

「クーくんのバーカ、そのままずっと帰ってくんな！」

「それじゃ丹行ってくるわ、晩飯の用意よろしくな」

「ちょっと、アタシのことはシカト?!」

来栖は丹に今日の予定を伝えて夕食の催促をしておく、丹は来栖の要求に対して首肯して返す。憎まれ口を利いたのに来栖の相手にもされなくなったことに不服そうな葵のことを尻目に、来栖は朝霧の中に歩を進めていった。

犬の散歩やジョギングをしている人たちと擦れ違いながら、来栖は入り組んだ住宅地を抜けて御門市内の東西に延びる表通りに出る。表通りに面したパチンコ屋の角に一台のリムジンが止まっているのを見つけると、来栖はその車の後部座席の窓をノックした。

「仕事の依頼だから断れなかったけれど、どうしてわざわざこんな朝っぱらに呼び出してきた？」

「それはもちろん急を要する事態だからですわ、一刻も早く目標をあなたに始末していただきたいと思ひまして無理を承知で連絡させていただきましたの」

「そろそろ懐が寂しくなってきたからな、こちらとしても仕事の依頼は助かる」

「では続きは車内でお話いたしましょうか」

後部座席に座っていた人物が右奥に詰めると同時にリムジンの後部ドアが自動的に開放される。来栖が無遠慮に手入れの行き届いている革張りのシートに収まると、後部ドアは自動的に閉じられて車が走り出す。

「久し振りだな安倍さん、夏の終わりに会って以来か？」

「ええ、ご無沙汰しておりますわ来栖さん」

来栖が話しかけると隣の席に座った娘は縦ロールの髪を揺らして彼に向き直る。気品を感じさせる澄ました顔立ちにうつすらと笑みを浮かべていたその娘、安倍真理亜^{あへまりあ}の顔を美しいとは思うものの、どこかその奥に油断ならないものがあることを来栖は彼女と相對する時に常に覚えずにはいられなかった。

第2回、不死身の一族 了

第3回、世迷い言

休日の早朝、御門市みかじの洛中区らくちゅうと洛南区らくなんの境界となっている東西に伸びる大通りを1台のリムジンが走行している。手入れが行き届いた革張りの後部シートには一組の男女が並んで腰を下ろしていた。

「しばらくお会いしない間に引越しをされていたとは存じませんでしたわ、来栖さん」

「夏休み明けから知り合いの家に居候させてもらうことになってなうるせえガキはいるけれど、三食まともな飯が食えるんだから御の字だよ」

「やつぱり丹さんまいとはそういう関係でしたのね、高校生のうちから同棲されているなんて少し妬けますわ」

後部座席の左側に座っている少年、来栖託人くるすたくとは現在居候している家の詳細を意図的に伏せていたが、彼らに乗せて走るリムジンの所有者の家の人間である娘、安倍真理亜あへまりあはその情報を既に入手していた。真理亜に丹との関係を冷やかされて、来栖は決まりの悪い顔を浮かべる。

「あいつとはただの居候と家主の娘っただけだ、それよりも早く仕事の話をしようぜ」

「私はお2人がどのように同棲されているか詳しくお聞きしたいのに、せっかちな方ですわね。まあいいでしょう、これをご覧下さい」

来栖が切島家での生活から話題を逸らして依頼の詳細を聞こうと

すると、真理亜はつまらなそうな顔をした。だが膝の上においていたタブレット端末を数回タッチすると、酸鼻につく血まみれの死体を画面に表示する。画面に映し出された死体の四肢は不自然な方向に捻れ、顔や腕を強く殴打された後が残っていた。首筋から肩にかけて夥しい量の血が溢れており、白いシャツが真っ赤に染まっている。

「被害者は吸血鬼にやられたんだな？」

「ええ、食い千切られた首筋からかなりの量の血が抜かれていることを考えると、あの化け物どもの仕業に間違いありませんわ」

「化け物、ね……」

来栖の推測に真理亜は首肯するが、彼女が下手人の吸血鬼のことを怪物呼ばわりしたことが勘に触ったようで、来栖は端末を眺めている仏頂面の眉間に皺を刻む。

「人間に仇なす悪鬼を化け物と呼んで何かいけないこともあるのですか？」

「いいや、ただこのくらいのことは人間だってやるだろうなと思うただけさ」

来栖が不機嫌そうな顔を浮かべたのを見て、真理亜は自分の発言に何か問題があるのかと訊ねると来栖は素っ気無い返事をして視線を端末から窓の外に逸らした。

「相手を過剰に痛めつけることはあっても生き血を啜るような真似はどんな狂人だってしませんわ。命を奪うだけでなく、

その死体を辱めるような輩を主は絶対にお許しになりません」

来栖が車窓を眺めていてもお構いなく、真理亜は人を殺めた吸血鬼を断罪することに断固とした姿勢を示す。眦が大きく開いた真理亜のアーモンド形の瞳には、敬虔な信仰心とそれを遵守している自分の正当性への自負が湛えられていた。

「そうだな、この街の人の平和な暮らしを脅かすナレノハテは放っておけない。確かに依頼は引き受けたぜ、始末料はこないだと同じ額で頼むわ」

「来栖さん、今回始末して欲しい吸血鬼はナレノハテではありませんわんわ」

乗っているリムジンが信号待ちで停車すると、来栖は真理亜の言葉に適当な相槌を打ちつつドアノブに手をかけて降車しようとする。しかしターゲットが自我と人であった時の姿を失い、無差別に人を襲う化け物に成り果てた吸血鬼ではないと真理亜に聞かされて、来栖の手がドアノブから離れる。

「事件を起こしたのはナレノハテじゃないだと、じゃあまさか……」

「ええ、今回駆除して欲しいのはあなた一族ではウツセミと呼んでいる、人間だった時の姿を留めた忌々しい方の吸血鬼ですわ」

「そんな馬鹿な！」

真理亜の方を向き直った来栖は今回の標的が理性を保ち、異空間にある居住区から外に出ない事を条件に存在を容認している方の吸血鬼ウツセミだと聞いて驚きの声をあげる。

「お見せできるような映像はございませんが、私の所属している組織の者がその目で確認した事実ですわ。むしろ私としましては何故ナレノハテではなくウツセミが出没したことにそれほど来栖さんが驚かれるのことが不思議です」

来栖がウツセミの出現にたいそう仰天しているのを怪訝そうな目つきで真理亜は見つめる。彼女の綺麗な大きな目に凝視された気恥ずかしさがあるのと、来栖自身が真理亜に隠している裏の事情を見透かされるような気がして来栖は彼女から顔を逸らした。

「…先代からウワバミの役目を引き継いで以来、ウツセミを討つのはこれが初めてのことだからな、そりゃ驚くさ」

「そうですね、いくら百戦錬磨の来栖さんでも初めて合間見える相手には緊張や動揺をされてもおかしくはないでしょうし。それにまさかウツセミが街に現れる場合は、即座に来栖さんの耳に届くなんて話はないでしょうしね」

「当たり前だろう、神出鬼没の奴らの出現情報なんて一体どこから仕入れればいいんだ？」

真理亜は冗談半分といった調子で口にした発言を聞き、来栖はポーカーフェイスを保ったままウツセミやナレノハテの出現情報がタイムリーに伝われば、標的を探し回る苦労はないと肩を竦める。

「自分でも馬鹿げた話だと思いますわ。でも仮にそんな虫のいい話があるのなら、とつくに来栖さんや先代のウワバミの方々が御門とその周辺の吸血鬼どもを根絶やしにしているでしょうね。そうなれば吸血鬼の被害のない安全地帯が出来るというのに、現実がそうで

ないことが残念で叶いませんわ……」

真理亜はさも嘆かわしそうに表情を曇らせて嘆息するが、来栖は仏頂面の口元をかすかに震わせて、彼女に知られたくない何かをなんとか隠し通そうとしているようだった。

* * *

来栖がリムジンの中で街に出現したウツセミの始末を真理亜から依頼された日の夕方、切島家の台所。テーブルの上に3人分の皿を並べた丹が自分の携帯電話でどこかに電話をかけていた。

「あ、もしもしくーくん？ え、そうなんだ…わかった、それじゃ気をつけてね」

電話をかけた相手と短いやりとりを交わした後、丹は少し残念そうな顔をして電話を切ると携帯電話をデニムパンツのポケットにしまった。

「姉さんどうだった、クーくんはいつ帰ってくるの？」

「バイトが遅くまでかかるみたいだから、クーくん晩御飯要らないつて。もうご飯出来てるし、食べちゃおうか？」

妹の葵が自分の椅子に座って夕飯になるのを待ちくたびれたように居候の帰宅時刻を訊ねてくると、丹は居候が残業が長引きそうなので彼を待たずに夕食にすることを告げる。

「ご飯にするのはいいけれど、クーくんって何のバイトしているの？」

「…さあ、詳しく聞いたことがないから分からないけれど忙しいことみたいよ」

「そうなの、毎晩遅くまでふらふら出歩いてて暇そうじゃない？」

「あ、あのさ、今日はタネからコロッケ揚げてみたんだ。頑張って作ったからたくさん食べてね」

同居人の少年クーくんこと来栖がしているアルバイトの内容を葵に訊かれると、丹は無理矢理話題を逸らそうとして妹の皿の上に次々揚げたてのコロッケを盛っていく。

「ウチで食べるコロッケはいつも姉さんがジャガイモを潰して作っているじゃない…昨日は夜に姉さんが黙って母さんの家に行っちゃうし、今日は朝早くからクーくんが出かけて、父さんも夕方散歩に行ったり帰ってこないし、なんかみんなこそこそしてて正直気味が悪いんだけど」

葵はソースを振りかけた姉のお手製コロッケを頬張ったまま、拳動不審な家族の動向を怪しむ。葵に嫌疑の眼差しを向けられると、丹は碗を持って啜っていた味噌汁を危うく噎せかけた。

「たまたま急な用事が重なっただけだよ、わたしたちは葵に内緒で怪しいことをしている訳じゃないよ」

「そうかしら？ クーくんが夜歩きするのはいつものこととして、週末になると姉さんや父さんも遅くまで出歩いたり場合によっては家に帰ってこなかったりするじゃない」

「き、気のせいだよ…そうだ、今日のデザートは葵が好きなプリンにしよう」

丹は平静を取り繕っているつもりらしいが、明らかに取り乱していることは冷蔵庫を開いて中からプリンを取り出そうとする落ち着かない仕草で葵の目にも明白だった。

「…やっぱりみんなアタシに何か隠していることがある。それは多分母さんに関係していることに違いないわ」

葵は白米と一緒にコロツケを咀嚼しながら、姉と父親が何かを自分に隠していることに勘付く。そしてその隠し事は恐らく自分にだけ居場所を教えてくれない母親に関連していることだろうと推測した。

9年前の春、丹の幼稚園の卒園式を目前に控えた頃に彼女たちの母親紅子は突如姿を消した。警察に搜索願を出すだけでなく葵たち姉妹の父親の斎も独自に紅子を血眼になって捜したが、行方は杳として分からなかった。

だが母がいなくなった悲しみも時の経過と共に次第に薄れていき、父親と姉の3人での暮らしが自然なものになっていた今年の夏休みの終わり、カナダへのホームステイから帰国した葵の前に10年近く家を空けていた紅子がいきなり姿を現した。

紅子が家に戻ってくる直前に姉の丹が原因不明のまま10日余り失踪していたという事件があったため、その時はあまり紅子の帰還について深く考えなかったものの、ほとぼりの冷めた今考えてみると不可解な点が多いことに葵は気付く。

約10年ぶりに家族の元に帰ってきた紅子だったが、葵が帰国した翌日にはまた家からいなくなっていた。斎の話によると現在紅子は別の場所に住んでいるらしく、仕事の関係からその住居を離れづららしい。だが突然搜索願の出ている者が家を借りたり買ったりすることが可能なかと、そういった事情に疎い葵でさえ怪訝に感じた。

またどうやら斎と紅子の婚姻関係はまだ継続しているらしいが、夫婦として役所に籍を登録しているものが長期間音信不通で現在は別居中のままでいるというのも不自然に思える。まして斎は紅子のことを死に物狂いで探しており、親戚や会社の同僚から再婚を勧められても頑なに誘いを拒み続けているような男だった。父親の一途な姿を見て育ってきた葵には、未だに紅子が家を離れていることを斎が容認していることが奇異に思えてならなかった。

最後に紅子自身にも不審な点がある。紅子は今年の12月で39歳になるが、夏の終わりに再会した時に目にした紅子の容姿は失踪した10年前から全く変わっていないように葵には思えた。化粧でごまかしたり美容整形で加齢を防いでいたりする可能性は充分考えられるが、まるで彼女の周りだけ時の流れが止まっているように錯覚するほど、紅子はあまりにも年齢にそぐわない若々しい姿をしている。

はつきりとしたことは分らないが、葵には母親の若過ぎる見た目をしていることが、9年前の春に失踪し最近家族の前に姿を現したことや姉と父親の不可解な行動に関連しているように思えてならない。

「みんななんなのよ、まるでアタシが除け者にされてるみたいじゃない……」

「葵、どうかした？」

「別に…ちよつと姉さんコロツケの中にグリーンピース入れないでよ、アタシがアレを嫌いなことは知っているでしょう?!」

「あうち…でも好き嫌いはよくないよ」

自分に隠し事をしているくせに優しい顔をされると無性に腹が立って、葵は腹いせにそれまであまり気にしていなかった野菜コロツケの中にグリーンピースが入っていたことに文句をつける。

葵に言いがかりをつけられると丹は眉毛をハの字にして情けない顔をしながら、我慢して食べるように目で訴えてきた。葵が幼い頃から、食事に嫌いな具が入っていることに文句をいうたびに丹はその顔で葵に我慢して食べるように無言のメッセージを向けてきた。

姉の不甲斐ない態度を見ていると食べてやらないと悪い気がしてきて、葵はピーマンやキュウリを不本意ながら片付け、結果的に食べ物の好き嫌いが減っていくことに繋がったのだった。

正直に言うところではグリーンピースに嫌悪感は抱いていなかったのですが、葵は丹に八つ当たりをしてストレスを発散すると再び野菜コロツケを食べ始める。

子どもの頃から胃袋を握られてしまっているためか、押しが弱く他人からの頼みが断れない控えめな性格の姉に葵は本能的に頭が上がりなかった。おまけに丹の作る料理は年々美味しくなってきたため、成長期を迎えて食欲が旺盛になってきた葵はますます姉の作る食事の虜になってしまっている。

情けなくて弱々しいと侮蔑している姉にどうしても逆らえないという悔しさを、葵は空腹を満たすことで紛らわすことにした。

* * *

御門市の北東に位置する洛北区の高級住宅地の一角に建つ自宅の応接室で、真理亜は1人の男と向かい合っていた。真理亜の向かいに座っている人物は柔らかな椅子の感触や見るからに根の張りそうな調度品に囲まれている状況に戸惑っているようで、どこか緊張した面持ちだった。年齢も真理亜と同年代、恐らく高校生であり、この環境で過ごすことに慣れている真理亜の方が相手の少年よりもずっと落ち着いて見えた。

「^{きよし}聖さん、使徒のあなたに東京から遠路遙々お越しいただき光栄ですわ」

「いえ、こちらこそお招きにいただき恐縮です。それよりも真理亜さん、例の者にあの件はお話されたんですか？」

「ええ、来栖さんには今朝直接お伝えしましたわ。今頃躍起になって街中を捜し回っていることでしょう」

「その来栖という男、先祖代々聖火を用いて吸血鬼を始末している一族の末裔だそうです。僕たちのように洗練された訓練も受けず組織のバックアップもないまま吸血鬼に挑むなんて無謀な奴ですね」

「そうね、でもあの時代錯誤な考え方の人らしい振る舞いですわ」

礼儀正しく自分に接してきた聖という少年の言葉に対し、真理亜

は来栖のことを揶揄するような笑みを口元に浮かべた。

「その来栖という男に処理を一任してよろしいんでしょうか、吸血鬼の1匹や2匹、僕1人でも充分対処できますよ?」

「構わないわ。今までは雑魚相手に常に優位に立ち回っていたあの人が、容易には打ち崩せない相手にどう挑んでいくかを確かめておく必要があるもの」

「そのうち異端審問にかけてこの街に巢食っている化け物と一緒に肅清するでしょう、わざわざ報酬まで与えてその実力を確認する必要がありますか?」

「聖さん、ことを仕損じないためには用心するに越したことはないわよ。来栖さんの実力を把握できるのならば、あれしきのはした金どうってことないわ」

「真理亜さんも物好きですね。それじゃ今回は先祖代々この街を守ってきたウワバミさんの実力を拝見させてもらいますか」

「ええ、長旅の疲れがあるでしょうしゆっくりされるといいわ」

真理亜の用心深さに聖は脱帽すると、肩の力を抜いて椅子に背中を寄り掛からせた。その向かいで真理亜は屋敷を訪ねてきた組織の同胞を労わりの言葉をかけつつ、自分たちの掌の上で踊らされていることを知らずに争うことになる吸血鬼と来栖を滑稽に感じてほくそ笑んだ。

「真理亜さん、もし吸血鬼との戦いで来栖という男が死んだらどうします?」

「その時は私たちがあの人の始末する手間が省けますわ。来栖さんがこの戦いで勝とうが負けようが私たちの計画への影響は微々たるものでしょう?」

「できれば僕は来栖つて男に今街にいる吸血鬼の始末はしてもらいたいですね、土地勘のない御門じゃ仕事しにくそうですから」

「あら、神の教えに背く異端のものを聖火で打ち払う使徒らしくない台詞ですわね?」

椅子から立ち上が用意してもらった客間に引き上げようとする聖に、真理亜はいたずらっぽいな笑みを浮かべて彼が口にした発言の揚げ足を取るうとする。

「冗談ですよ。たかが吸血鬼の1匹を処分するのなんて、主から授かったこの力を使えば造作もないことです」

応接室の扉の前で立ち止まり、真理亜に横顔を向けて聖は不敵に微笑み返す。誠実そうな印象を受ける聖の顔には自分の能力への絶対的な自信があり、彼の全身は淡く発光する青白い光に覆われていた。

「聖さん、あなたも使徒なのだから畏まっているよりも、そのくらい強気でいた方が頼り甲斐があつてよろしいんではなくて?」

「ご忠告ありがとうございます。では僕はこれで失礼させていただきます、お休みなさい」

終始慇懃無礼な態度を保ったまま聖は真理亜に会釈すると、応接

室から出て行った。

「剣気と聖火、呼び名は違っても性質は同じ能力を持つ者同士が戦うのはさぞ見物でしょうね。でも神の恩寵を受けているハライソの使徒を相手に、信仰と共に神のご加護も棄てた来栖さんに勝ち目はありませんわ」

真理亜は吸血鬼に対して絶対的な効果を持つ能力の使い手同士が刃を交える場面を想像すると、愉快で堪らなそうな様子だった。そして真理亜は自身も所属するハライソの使徒と呼ばれる戦士たちが、同じ能力を持つ来栖に対してもその優位性が揺るがないものと確信しているようだった。

* * *

夕飯の片づけを終えると丹は予め沸かしておいた風呂に入り、家の掃除や溜まった洗濯物の片付けに追われた1日の疲れを癒す。温かい湯船に使ってリフレッシュをし、明日からの学校生活への鋭気を養った丹は妹にも風呂を勧めようとして彼女の部屋の戸を叩く。

「葵、お風呂入っちゃえば？」

だが何度丹が妹の部屋をノックしても返事はない。話し声は聞こえないので友人と電話をしている訳ではなさそうだったので、ヘッドフォンでステレオを聞いているのかも知れないと思った丹は、そっと部屋の扉を開いて中にいる妹に声をかけようとする。

「えっ、葵がない?!」

だが普段なら自室に籠っている時間だというのに葵の姿は部屋の

中になかった。丹は1階に駆け下りていき、リビングや浴室の中を覗くがやはり葵の姿は見当たらなかった。

「も、もしかしたらコンビニに行っただけかもね…よくジュースや漫画を買いに行くことあるし……」

丹は妹が夜半に衝動的にコンビニに出かけることが多いことを思い出して、恐らく自分が風呂に入ってる間に買い物に出かけたのだろうと思うことにした。だがそれから30分経っても葵は家に帰ってこない。

「き、きつとコンビニに行く途中で友だちに会って話をしているんだよ。葵はわたしと違って顔広いから、うん、きつとそうに違いない……」

自分の杞憂だと丹は言い聞かせようとするが、それも10分程度しか続かなかった。不安を和らげるために葵の部屋の中を確認してみると、葵は財布と携帯電話を持って外出しているようだった。

念のため丹は葵の携帯電話に電話してみることにする。数回の呼び出し音を聞いた後、葵の番号に電話は繋がった。

「もしもし葵、今どこにいるの？」

『これで姉さんにも分かったでしょ、突然誰かがいなくなるってコトがどんなに不安な気持ちになるのか？』

携帯電話から妹の声が聞こえてきて丹は安堵の吐息をしようとするが、電話の向こうで葵は低く押し殺したトーンで話しかけてくる。

「うん、よく分かった。でもそんなのお母さんがいなくなった時から知ってるよ」

『ウソよ、ホントに分かっているなら何度もアタシに黙って家を抜け出したりしないはずじゃない』

「ごめん、わたしが思っていた以上に葵を心配させてたんだね」

『言い訳なんか聞きたくないわ、姉さんが行き先も教えないで夜歩きるんならアタシだってそうさせてもらっわ』

「ダメだよ葵、こんな時間に女の子が独りで外をふらふらしてちゃ危ないよ！」

『子ども扱いしないでよ、そうやって母さんの居場所とか姉さんや父さんが夜中に歩く理由とか隠されるのはもううんざりなのよ！』

「葵、ねえ葵？！」

葵は最近募らせていた家族への不満を一息に丹に浴びせると、一方的に電話を切る。丹は妹を説得し直そうと電話をかけ直すが葵はもう電話に出ようとせず、3回目に電話をかけた時には電源を切ってしまった。

「クーくんが依頼を受けたってことはナレノハテが街に現れたってことだよ、そんな時に街を歩いているなんて危ないわ」

丹は居候の来栖が仕事をしているということは、この近くに吸血鬼が出没した証拠だと理解する。文字通り血に飢えた化け物が跳梁している夜の街を彷徨っている妹の身を案じて、丹は葵の搜索をす

ることを決断した。パジャマのズボンで風呂に入るまで履いていたデニムパンツに履き替えパジャマの上着の上にパーカーを羽織ると、丹は妹の姿を求めて夜の街へと駆け出していった。

自分も妹が襲われていることを危惧する怪物の同類であるにも関わらず、葵が血を吸われることに強い拒否感を持つことを皮肉に感じながら、丹はあてもないまま暗い通りを駆け抜けていった。

* * *

御門市の中心に位置する洛中区にあるビルの屋上に大勢の買い物客で賑わう目抜き通りを見下ろしている影がある。20代の青年と思いきレザージャケットを羽織ったその人影は、忙しなく通りを行き交う人や車のことをまるで店頭に並べられた商品を物色するように眺めていた。

「人間がこんなにうようよしているのに、自分たちのねぐらに迷い込むまで手を出さねえなんてこの街の奴らはよっぽど甲斐性なしなんだ。流行の草食系って奴か？」

レザージャケットの青年はこの街の闇に潜んでいる同胞たちの消極的な態度をせせら笑いながら、今宵の渴きを満たさせる獲物の吟味を続けた。

「昨日は人間の分際で俺様に喧嘩を吹っかけてきた阿呆を振り返り討ちにしたついでだったからな、野郎の血なんざ飲んでも後味が悪いだけだぜ。今日は口直しにいい女を食わねえとな……」

レザージャケットの青年は昨晚摂取した血の不味さを思い出して顔を顰めると、暗がりの中でも望遠レンズのように見通しが利く目

で今夜の獲物に相応しい人間を探していく。最近朝晩は冷え込むようになり、通りを歩く人の多くが着膨れし始めていたため、真夏のように扇情的な装いをした女性がいなくなってしまったことを彼は惜しみつつ、階下の人間たちの観察を続けた。

「どうもいま一つ気が乗らねえのばかりだな。それもそうか、こんな時間に遊び回っているような奴が規則正しい生活をしている訳ねえもんな。ニコチンやアルコール、それにクスリの毒素がない清らかな処女みてえな奴の血を飲みたかったんだが仕方がねえ、適当な奴で我慢するか」

熱心に人間観察を続けたものの、彼の食指が動く対象は見つからなかった。だが次第に内側から込み上げてくる生き血への欲求が強まってくるのを感じて、贅沢は言っていられないと彼は妥協できそうな人間を襲うことに決めた。

「お、捨てる神があれば拾う神もありとはよく言ったもんじゃねえか。あんなガキなら余計な混じりっ気のない綺麗な血をしてるだろ」

レザージャケットの青年がビルの屋上を離れて通りに降りようとした寸前、彼の目が1人の少女に留まる。緑のベロアジャケットを羽織っていてもその下にある体型は未成熟な子どものものと分かり、不機嫌そうに眦を吊り上げた顔も化粧はしていても、彼女の年齢がまだ中学生くらいであることが覗えた。

「決めた、今日の獲物はアレにしよう」

レザージャケットの青年は今晚口にしたい血の条件に適合してそうな獲物を見つけた喜びに口元を緩めると、足場を蹴ってビルの谷間に身を躍らせていく。ビルの狭間に広がる暗い闇の中に青年の姿

は消えていった。

* * *

街中で遅くまで遊んだ経験がない訳ではなかったが、その時はいずれも数人の友人たちと一緒に行動していたので葵は夜の繁華街を独りで歩くことに心細さを覚えていた。いつもなら身長の高さを気にして胸を反り返らせている彼女だったが、今は緑のベロアジャケットを着た背中が縮こまっている。

友人に連絡をして一緒に遊んでくれるよう呼び出そうと葵は考えたが、既に深夜と言える時間帯に子どもの外出を許可する親はそう多くはないためそれは難しいと判断する。また携帯の電源を入れてしまえば、姉からしつこく着信が入ってくることは間違いなかったので今晚は独りきりで過ごす覚悟を葵はする。

「ヒトカラは空しいし、今の時間中学生を入れてくれるお店もなさそうだしなあ。どうやって時間を潰そう……」

カラオケやネットカフェ、クラブなど様々な遊び場は軒を連ねているというのに、中学生の自分1人では門前払いされてしまいそうな店ばかりであることに葵は嘆息する。家を抜け出す際にしつかり化粧をしてなるべく大人っぽく見えるような服を選んできたが、シヨウウィンドウに写った自分の姿が背伸びをして大人ぶった中学生でしかないことを葵自身も認めている。誰か周りに大人がいればごまかせるかもしれないが、自分だけでは年齢確認を求められた場合に「ごまかしきれないと葵は諦めて通りを彷徨った。

「姉さんだったらイケてない大学生に見てもらえるんだろうけどなあ……」

高校生になっても化粧を一切せず肌の手入れもしていない上、お洒落にもあまり関心を持っていないものの葵よりも頭1つ分は背が高く、出るところは出て引つ込む所は引つ込んでいるメリハリのあるスタイルをした姉ならば垢抜けない学生と見てもらえるだろうと思うと、葵は理不尽な気持ちになる。

それと同時に言うことを聞いてやらなければ悪い気がする姉の困惑した顔が脳裏に浮かび、葵は急に家が恋しい気持ちになってきた。

「…アタシはもう大人なんだから、あんな鈍臭い姉さんに心配される必要なんてないわ」

「そうだな、あんたは魅力的でいい女だ」

姉の面影を振り払うように葵は首を数回横に振って、自分は姉に子ども扱いされない大人なのだと言い聞かせる。すると傍らから彼女の言葉に相槌を打つ声が聞こえてきた。

反射的に葵が声のした方を振り返ると、レザージャケットを着た精悍な顔立ちの青年が微笑みを浮かべて立っていた。

「アンタ誰、ナンパならお断りよ？」

「独りで寂しそうにしているから声をかけたけど、随分身持ちが固いんだなあ」

「…別に寂しくなんかないわよ」

葵はレザージャケットを着た青年を邪険にあしらおうとしたが、

初対面の相手にも内面の寂しさを見抜かれてしまったことに狼狽する。ぞんざいな口調は変わらなかったが、最初の威勢のよさはなりを潜めてしまい葵は恥らうように青年から顔を逸らす。

「あんたみたいな美人を慰められればいい思い出になると思ったんだけど、そりゃ残念。ま、夜は長いし別の女を当たってみるわ」

「ちょっと待って！」

レザージャケットの青年は葵の背中を軽く叩くと彼女の前から立ち去ろうとする。しかし青年が葵の脇から数歩前に進むと、葵は青年のことを呼び止めた。

「どうした、俺に何か用？」

「…アンタさ、アタシのこといい女だと言ってくれたよね。それってアタシが一人前の女に見えるってことだよね？」

「ああ、この辺にいる男の多くがきつとそう思っているぜ」

自分のことを自立した大人の女性に見えるかと葵に訊ねられると、レザージャケットの青年は当然というように頷き返した。青年の言葉聞いて、葵は家族に子ども扱いされていたせいで自分でもまだ子どもだと思い込まされていたが、他人の目には大人だと認めてもらえているのだと知り気をよくして表情を綻ばせる。

「お、やつと笑ってくれたな。やっぱ美人には笑顔がよく似合うなあ」

「そ、そう……？」

「むすつとした顔でも充分綺麗だったけどさ、笑うとますます綺麗に見えるよ」

レザージャケットの青年に煽てられてますます上機嫌になった葵は、知らず知らずのうちに自分から青年に歩み寄っていた。

「…ねえ、暇つぶしに付き合わせてやってもいいわよ」

「マジで?! いやぁ嬉しいなあ」

「か、勘違いしないでよね、たまたま今日は友だちと予定が合わなくて独りでいただけなんだから」

「理由なんかどうでもいいさ、今晚付き合ってくればそれで充分なんだからな」

自分を大人と言ってくれたことで青年の印象をよくした葵は、今晚過ごす店に入る方便として彼と一緒に遊ばないかと誘いをかけてみる。レザージャケットの青年は葵から付き合ってくれることを申し出てくるのを聞き、大仰なりアクションで喜びを表現する。

彼に気があるのではないから誤解するなと葵が釘を刺してくると、青年は一夜を共に出来る以上のことは望んでいないと答えた。青年が葵に返事をした時、それまでおどけていた顔に一瞬意味深な笑みが浮かんだのに葵は気付かなかった。

「俺は義仲^{よしなか}って言うんだ、君は?」

「葵」

「そっか葵ちゃんかぁ、いい名前だね」

互いに名前を教えあうと、レザージャケットの青年義仲は馴れ馴れしく葵の肩に腕を伸ばして自分の脇に抱き寄せてきた。

「ちよつとアンタ、いきなり何するのよ?！」

「あれ、葵ちゃん意外とウブなんだね?」

「そ、そんなことないわよ…ナンパ男にいきなり肩を組まれてイラついただけよ」

「まあまあ、大人だったらこのくらいのことで見くじら立てないで受け流してやるくらいの方がいいよ?」

「…ふん、でも変なことしようとしたら容赦しないからね」

知り合っただばかりの異性から肩を抱かれたことに葵は抗議するが、義仲に上手いことを言い含められるとそのままの状態であることを容認してしまう。

葵の肩を義仲の手は優しく包んではいたが、その腕には万力のような力が籠もっていて中学生の少女では到底その拘束から逃れることはできないほどだった。葵は常軌を逸した膂力の持ち主に自分が捕らえられている事実気付かず、初めて自分のことを大人と扱ってくれたことの余韻に酔っていた。

* * *

葵が義仲と夜の繁華街を歩いているのと同じ頃、真理亜から受けた依頼を遂行するため来栖は標的のウツセミを求めて繁華街を探索していた。ビルの谷間で一息ついている彼の指には吸血鬼を惹き付ける香料を紙で包んだ煙草に酷似した形状の赤霧^{せきむ}が挟まれており、赤黒い煙をたなびかせながら周囲に鉄錆臭い香りを散布している。

「朱印符^{しゅいんぷ}がないんじゃこつちから紫水小路に行つて、ウツセミが脱走したかどうかの確認のしようがねえからな。赤霧の臭いを餌に闇雲に探し回るしか方法がないってのは正直かなり非効率だぜ……」

来栖は遠い先祖と和議を結び数百年間停戦状態にあるウツセミに、彼らの居住区である紫水小路から人間の暮らす現世へと逃亡してきた同胞がいなかどうか、いたとすればどのような風体をしているのかという情報が得られないまま捜査を続けることの難しさを愚痴つて、フィルター近くまで燃え尽きた赤霧を地面に投げ捨てる。

「またこんな面倒なことをするのは嫌だし、次に源司さんか朱美さんに会った時に朱印符を1つもらえないか頼んでみよう。手懸かりもないまま捜すのは不可能に近いし、今日はこの辺で切り上げるとするか」

地面に投棄した赤霧の火を靴の裏で揉み消して、今晚は標的の探索を打ち切つて来栖は下宿している家に戻ろうとする。ビルの谷間から表に出ようとした来栖の前を一組の男女が通り過ぎていった。レザージャケットを着た二十代に見える青年と緑のベロアジャケットを着た小柄な女性の組み合わせだった。

青春の真っ只中にいるにも関わらず、幼少期から異形の存在との戦いに明け暮れてきたため色恋沙汰への関心が薄い来栖は、普段ならば自分の前を横切ったカップルに対して特別な感慨を持つことはな

かったが、今回は視界の端に消え去ろうとしたその男女の背中を目で追う。

「さっきの女、切島妹じゃねえか。それにあの連れの男は……」

緑のベロアジャケットを着ていた女性が居候をしている家の次女だったことも驚きだったが、それ以上に彼女の連れの青年に来栖は大きな反応を示す。来栖は世話になっている家の次女葵と彼女に伴っているレザージャケットの青年義仲の後をつけようと表に出て行くと、来栖と対照的に彼女たちはビルの間隙の角を曲がって裏通りに入ろうとしていた。

「まずい、このままだと切島妹が……」

来栖は葵の身に危険が迫っていることを察して、彼女たちが足を踏み入れた裏路地に駆け込んでいく。来栖が目凝らして薄闇の中に2人の姿を求めて走っていくと、路地の奥から甲高い悲鳴が聞こえてきた。

「切島妹！」

はつきりとした位置を掴んではいなかったが、葵の叫び声を聞いて彼女を捕らえた吸血鬼が彼女の身にその毒牙にかけようとしたのだと察すると、来栖は吸血鬼を威嚇するために声を張り上げる。

来栖が腹腔の底から絞り出した大音声と共に、彼の体内から吸血鬼への攻撃用に性質を転換した生体エネルギーである剣気が湧き上がって、葵を襲っている吸血鬼に向かって発散された。

「ぐっ?!」

来栖の放った剣氣の一撃を喰らって彼女を襲った吸血鬼のくぐもった声が聞こえると、来栖は壁際に追いやられている葵とその前に覆い被さるようにして立っている義仲の姿を視認した。

「切島妹、今のうちに早く逃げろ！」

「クーくん、なんでアンタがここに?!」

「無駄話をしている暇はねえ、いいからさっさと行け！」

引き裂かれたベロアジャケットの襟を抑えて葵が窮地に陥った自分の前に居候の来栖が現れたことに驚きを示すと、来栖は有無を言わさぬ強い口調で彼女に避難を呼びかけながら剣氣をもう一発義仲に向かって放つ。

捕らえた獲物の血肉を味わおうとしていた所を邪魔された怒りを露にして来栖の方を向き直った義仲は、銃弾を撃ち込まれても瞬時に回復できる頑健な肉体を誇る吸血鬼にも有効打を与える剣氣を叩きつけられた衝撃に歯を食い縛って堪えた。義仲が剣氣のダメージで動きが止まっている隙に、葵は脱兎の如く彼の前から逃げ出して来栖の方へとやってくる。

「聞いてよクーくん、こんなトコに連れ込んだと思ったらアイツいきなりアタシの服を破いてきたのよ! きつとあのままアタシを……」

「愚痴なら家でいくらでも聞いてやるから、俺がこいつの相手をしているうちに出来るだけ遠くまで離れろ！」

義仲の拘束から解放された葵は来栖の背に隠れて自分の受けた仕打ちを来栖に聞かせようとしてくるが、来栖は義仲への警戒を怠らないまま横目で葵を一瞥して戦いに巻き込まれないよう遠くに行くように命じる。

「…分かった。でも気をつけて、アイツ見かけよりもずっと力あるわ。このジャケットを新聞紙みたいに簡単に引き裂いたのよ？」

「お喋りに付き合っはここまでだ、行け」

葵は来栖の剣幕に押されて後退りをしながら、優男風の外見から想像されるものよりも義仲の腕力は遥かに上回っていることを来栖に忠告する。来栖の左手にこの場から離脱するように促されると、葵は身を翻して人通りの多い表に向かって走っていった。

「ひとの楽しみを邪魔したばかりか、聖火で不意打ちしてくるなんてさすがに教会の殺し屋は汚えな」

「教会の殺し屋…お前俺のことを知らないのか？」

葵が安全な場所まで逃げていく間、来栖は義仲の一挙一動に細心の注意を払ってその前に立ち塞がる。来栖の剣気を二発も喰らったことで義仲も来栖の動きに警戒しているらしく、無理に葵のことを追いかけるようとはしなかった。

葵がビルの角を曲がって表通りの雑踏に姿を消していくと、義仲は来栖の介入のせいで捕獲した獲物を逃してしまったことを問責してくる。来栖は義仲が自分の素性を知らないばかりか、剣氣のことを真理亜たちが所属しているハライソでの呼び名で称したことに疑問を抱いた。

「はあ？ この街でてめえがどんだけ有名なのかわらねえが、昨日この街に来たばかりの俺が知る訳ねえだろ」

「それじゃあお前は紫水小路のウツセミじゃないのか？」

「シスイコージなんだそりゃ？ ああ、そついやこの街の連中は遠い昔に人間と異空間にある居住区から出ない代わりにその中では好きにしていって約束をしたんだっとな。シスイコージってのはその空間のことだろ？」

「なるほど、お前が紫水小路から逃げ出したウツセミじゃないんなら、源司さんから俺に連絡がこないのも当然か」

来栖と義仲の会話は互いに思い違いをしているせいで始め噛み合わないかったものの、義仲が来栖の先祖と和約を交わした吸血鬼の一族の出身者ではなく、他の街から流れてきた吸血鬼だと知って来栖は気にかかっていた疑問を解消することが出来た。

「そうか、お前が人間のくせにお仲間といたちごっこをしているウバミって奴か」

「ああ。他所から御門に来たばかりで悪いが、この街で暮らす人間とウツセミの平穏な日々のためにあんたには消えてもらっぜ」

来栖は自分の一族が先祖代々勤めている役職の名称を知っていることを若干意外に思うが、その役目に従って人間とウツセミの均衡を乱す義仲の断罪を宣告する。膝を軽く曲げて腰を落とし、義仲の動きに敏速な対処が出来るように身構えた。

「変わった手品が使えるくらいでいい気になるんじゃない？ せつかくの獲物を逃しちまったんだ、楽には殺してやらねえぞ？」

義仲も目の前で葵を逃されてしまった怒りを来栖に覚えており、その腹いせに来栖をいたぶることを告げる。全身の筋肉を強張らせて、来栖が隙を見せた途端に人間離れした瞬発力を駆使し彼に襲いかかろうとする。

雲がかかっていた夜空が晴れて月光が来栖と義仲が対峙しているビルの谷間にも差し込んでくる。月の光で急に明るくなった視界に来栖が目細めると、それを好機と看做して義仲が地面を強く蹴り来栖に突進してきた。

「喝！」

義仲が動いた気配を感じると来栖は裂帛の気合と共に剣気を速射できる撥の状態で発散する。来栖の体を中心に青白い光の漣が空間に広がり、来栖に向かって疾駆してきた義仲の体に襲い掛かっていた。

第3回、世迷い言 了

第4回、暗闘の大儀

御門市の上空を覆っていた雲が晴れ、月光が繁華街の片隅に屹立するビルの谷間にも差し込んでいく。月明かりに照らされた路地裏で2人の男、厳密には1人と1匹の吸血鬼が今まさに拳を交えようとしていた。

「シャアアッ！」

「喝！」

獲物に飛び掛ろうとする蛇のような声と共に高速で疾駆してくる他所からこの街に流れてきた吸血鬼の義仲を、先祖代々御門の平和のために吸血鬼と戦ってきたウワバミと呼ばれる存在の末裔である来栖託人は威勢のいい掛け声を発して迎え撃つ。

来栖の全身が青白い光に包まれた後、活動のため生物が自給している精気を攻撃用に転換した剣気が義仲に向かって放たれ青白い光が同心円状に周囲に広がっていく。

物理的な破壊力はないものの、剣気は銃弾を撃ち込まれても鋭利な刃物で斬りつけても通常の武器で受けた傷は瞬く間に回復してしまう吸血鬼にも確実にダメージを与えられるものである。

来栖がこれまで始末してきたナレノハテと呼ばれる海老茶色の肌をして理性を失った異形の吸血鬼には剣気を1、2発当てれば充分にその動きを封じることができたが、現在戦闘状態に陥ろうとしている理性と人間だった時の姿を保ったままのウツセミと呼ばれる吸血鬼に分類される義仲には2発ではあまりダメージを与えられなかつ

たらしい。

吸血鬼に対して有効な対抗手段を持つ来栖と戦うことになって、義仲は物怖じするどころか、むしろ捕食者としての闘争本能を駆り立てられ、生存競争にも血沸き肉踊っている嬉々とした表情で望んでいるようだった。

打ち寄せてくる波のように来栖の発した剣気が迫ってくると、義仲は迫りくる剣気を遮るように左の掌を前に突き出す。

「ハアアッ！」

義仲が精悍な顔を険しくして気合を叫んだ瞬間、大きく開かれた彼の掌に、夜の闇よりも暗く奥底の知れない影が30cmほどの直径の円を描いて広がる。義仲の掌に展開された円形の影の中に来栖の放った剣気は残らず吸い込まれていく。

義仲を牽制して自分の間合いの中に踏み込ませないように放ったはずの剣気を無効化されて来栖は一瞬動揺するが、剣気に足止めされずに進撃してきた義仲がコマ送りしたように自分の眼前に現れると反射的に右肩を軸にして半身を捻る。その刹那、来栖の鼻先を捻りを上げて義仲の振るった右の拳が掠めていった。

来栖は義仲の繰り出してきた拳をかわすために後方に仰け反って不安定になった姿勢を立て直そうとするが、義仲は吸血鬼の強靱な足腰の筋肉を駆使して強引にその場に踏み止まると、無造作に左腕を前方に振るって来栖の顔面を殴りつけようとする。

来栖は尻餅をつくように姿勢を低くして、直撃すれば顔面の陥没は免れない義仲の剛腕の一撃をやり過ごす。急激な動きをした軌跡

を示すように宙に広がった来栖の髪のが、義仲の腕に触れたことで舞い散った。

「喝！」

来栖はバランスを取るために地面に着いた左手と両足のバネを使って、大きく後ろに飛び退きながら再度義仲に向かって剣気を放つ。大振りの攻撃を外してできた隙をつかれ、義仲は先ほど来栖の発した剣気を捌いた円盤状の黒い影を展開できず、今度は剣気でその身を打ち据えられる。

来栖は退避した先で即座に立ち上がり義仲の様子を覗うが、三度剣気を当てられても義仲には大きなダメージはないようで、攻撃を仕掛けて反撃されたことを憎々しく思っているような顔ですぐに来栖の方に向き直ってきた。

「紫水小路の出身じゃなくてもやっぱり蝕の具現化はできるのか……」

来栖は御門以外の土地に生息しているウツセミも、その肉体に内包している精気の真空地帯であり吸血鬼にとつての魂に相当する蝕を外部に具現化して、精気の変質したものである剣気を取り込む術を会得していることに軽い驚きを示す。

「当たりまえだろ、一撃のダメージは大したことなくても聖火は確実に俺たちを消耗させるからな。これが使えなきゃ教会の弾圧を切り抜けられねえ」

義仲は深刻なダメージを受けてはいなくても、やはり人間が持つ自分たちへの対抗手段である教会のエクソシストたちの間では聖火

と呼ばれている剣気の警戒しているようで、蝕の具現化出来るか否かが教会からの迫害を乗り越えられるかどうかの条件になっていると苦笑を浮かべた。

「いくら剣気が俺に通用するからって自惚れるなよ、てめえの剣気の威力じゃ当たってもダメージはどうってことねえ。さっきはたまに逃げられたが、俺をダウンさせられるほどの手数を打ち込む前にてめえは俺の拳でお陀仏さ」

「ふん、蝕で剣気を捌けてもお前の戦い方はウツセミのスバ抜けた身体能力に頼っているだけだ。いくら速く動いて重い一撃が打てるからって、お前の単純な攻め方を見切るのはそんなに難しいことじゃないやねえよ」

「抜かせ、人間の小僧が！」

来栖と義仲は互いに啖呵を切って自分の実力を誇張し合うと、再び臨戦態勢を取る。しばし互いの隙を覗いながら視線を交錯させた後、次こそは紙一重で逃げ回る来栖を拳で捕らえようと義仲が先手を打ってきた。

「江戸の頃からこの街を守ってきたウワバミを舐めんなよ、余所者にこの街の礼儀を教えてやるぜ！」

来栖は数世紀にわたり御門の人々の暮らしを陰から守ってきた一族の矜持を口にする、全身を淡く発光させる。そして突進してくる義仲を迎撃するために来栖が剣気を放つと、周囲が雷光に包まれたようにぱつと明るくなった。

* * *

「獸同然に本能だけで動くナレノハテよりは知性がある分ウツセミは手強いみたいね。使徒と衛兵合わせて30人近くの死傷者を出し、ハライソの追跡を振り切って御門までやってこられた吸血鬼の面目躍如といったところかしら？」

真理亜は寢室の隅にあるデスクトップ型のパソコンのモニターに映し出された、来栖と義仲の戦闘の様子を楽しげな顔で眺めてその感想を述べる。

東京にある組織の本部から派遣されてきた使徒と呼ばれる腕利きのエクソシストの少年、聖きよしをもてなした後、真理亜は湯浴みをして1日の疲れを流してきた。バスローブを羽織っただけの姿でベッドに寝転び、湯上りの安らぎの一時と過ごしていた真理亜に、パソコンが発信音でモニターを見るように合図をしてくる。

真理亜は合図が聞こえてくると共に即座にベッドから飛び起きてパソコンの前に駆け寄ると、彼女の家が出資した観測衛星へのアクセスを開始する。真理亜が観測衛星の捉えた映像を確認すると、彼女が吸血鬼の駆除を依頼した来栖が意外なほどの早さで標的に接触し交戦を始めていたのだった。

来栖が現在使用している携帯電話は、彼が御門市の北部に聳える鞍田山の祖父の元から街に出てきた際、真理亜が当時携帯電話を保有していなかった彼に贈答したもので、常に携帯電話のGPS情報の常時配信と、来栖が吸血鬼との戦闘に突入したと推定される急激な体の振動を感知したら真理亜のパソコンに情報を伝えるような細工がされていた。

来栖の携帯電話から送られてきた情報を元に真理亜が観測衛星を

使つて来栖の現状を確認すると、予想通り来栖は吸血鬼と戦闘を始めていた。

「衛星軌道上からの撮影では素早い攻防を繰り広げる来栖さんと吸血鬼の動きを捉えきることは出来ないわね…この荒い映像じゃはっきりしたことは分からないけれど、来栖さんの聖火はあまり吸血鬼に利いていないようね」

モニターに表示されている衛星からの映像の画面は粗く、更に来栖と義仲が高速で動き回っているため時折その姿がぶれてしまい真理亜には詳しい状況は分からない。だが不十分な映像からでも来栖が義仲の超人的な身体能力に圧倒されて、劣勢であることは覗えた。

「来栖さんのことを買い被るつもりはないけれど、この吸血鬼は厄介な奴みたいね。仮に来栖さんが敗れた場合、聖さんだけで仕留めるのは難しいかもしれないわ」

幾度か来栖の仕事振りを見ていたので、真理亜は来栖の戦闘力がある程度理解しているつもりだった。そしてその情報に基づいて考えると来栖が義仲に負けた場合、義仲を討伐するのは現在彼女の屋敷に逗留している使徒の聖だけでは心許ないというのが真理亜の抱いた感想だった。

「負けるにしても手傷を負わせるくらいの貢献はしてほしいところですよ……」

真理亜は義仲の扱いに関して今後の対応を思案しながら、来栖と義仲の決闘の行く末を見届けようとする。吸血鬼の義仲も吸血鬼の存在を黙認し続けてきた一族の末裔である来栖も、彼女としては神の教えに反するものとしていずれ抹殺しなければならない存在であ

った。

しかし通常兵器だけでなく剣気にさえ耐性を持つ強力な吸血鬼の義仲に生き残られるよりは、銃で撃たれれば傷を負い毒を盛れば悶える人間の来栖の方が始末をつけやすいと考えて、真理亜はできるならば来栖の勝利を願った。

* * *

真理亜が自分たちの戦いを観察しているとは露知らず、来栖と義仲は互いに一步も引かない気迫を発して戦いを続けていた。

風を切って繰り出してくる義仲の拳骨の雨を前後左右、小刻みに体を揺らして来栖は避け続けていたが、一瞬も気を抜けない状況に神経をすり減らして的確に体捌きをしなければならない状態が延々と続いていると、次第に息があがり始めてきた。

一方吸血鬼の義仲は精気を自分の体内で発生させられずに他者から摂取しなければならぬ精気の渴きがあるものの、人間の肉体のように疲労の蓄積や息切れは起きないので鋭いパンチをいつまでも打つことが出来る。無尽蔵のスタミナを持つ義仲が、人間である以上避けられない心身の消耗を抱える来栖を押し始めていた。

「喝！」

「無駄だ！」

来栖は少しでも息をつく余裕を作ろうと剣気を発して義仲を牽制し、義仲と間合いを取ろうとする。だが来栖の動きを見越して蝕を具現化する準備をしていた義仲は、来栖が剣気を放つタイミングに

合わせて掌に円盤状の蝕を展開すると、威嚇のために打たれた剣気を自分の蝕に吸収させて来栖の攻撃を打ち消した。

「ラアアッ！」

「くっ！」

義仲は蝕を具現化させた左腕を引き戻し、その反動で右の拳を来栖の顔面に突き出してくる。来栖は咄嗟に身を反らして砲弾のような拳を回避するが、完全には避けきれず頬に掠った義仲の拳の衝撃に顔をしかめる。

だが来栖も一方的に打ち込まれる状況を打開しようと、伸ばされた義仲の右腕に両肘を絡めて挟み込んで彼の腕の関節を極めようとする。来栖が全身の体重と腕の筋肉を振り絞って義仲の突き出されたままの右腕を下方に引き付けると、強固な骨格と柔軟な関節をしている吸血鬼の義仲の腕が軋んだ音を立てた。

「小賢しい！」

義仲は力任せに関節を極められかけた右腕を振り上げ、その勢いで腕にしがみついていた来栖の180cmを越える屈強な体躯を宙に舞わせる。絶対的な筋力の差になす術もなく振り払われた来栖の体は放物線を描き、背中から地表へ落下していった。

「目障りなんだよ、今すぐ踏み潰してやる！」

義仲が先の尖った革靴を履いた足を持ち上げて、地面に転がった来栖の顔を踏みつけようとしてくる。着地の受身は取ったものの全身を強かに地面に打ちつけられた衝撃をまだ引き摺って、身動きが

満足にできない来栖は迫り来る義仲の足を避けられそうにない。

「あああつ！」

来栖はやけくそ気味に絶叫をあげて剣気を放出した。頭に血が上っていた義仲はまともに来栖から撃ち出された剣気を喰らってしまい、その衝撃に押されて体のバランスを崩し尻餅をつく。

「だああつ！」

来栖は自分の眼前に転倒した義仲にもう一撃剣気を撃ち込むと、地面を転がりながら義仲との距離をとって体を起こす。続けざまに剣気を叩き込まれたダメージは軽くなかったようで、地面に転んだ義仲が立ち上がるのに少し時間がかかった。

「この野郎、よくも俺様を土につけやがったな……」

剣気あるいは聖火という異名を持つ対抗手段を持っているとはいえ、高い身体能力と鋭敏化された感覚機能により自分の優位は不動のものであるはずなのに、ただの人間でしかない来栖に意外なほどでこずってしまっていることに義仲は齒茎を剥き出しにして齒軋りをする。

「どうした、絶対的な捕食者である吸血鬼が餌の人間に随分苦戦してるじゃねえか？」

「黙れ、人間ごときが吸血鬼に齒向かうなんて生意気なんだよ！」

来栖は弾んだ息を整えながら虚勢を張って義仲を挑発すると、義仲は精悍な顔のこめかみに青筋を立てて怒りを露にする。食物連鎖

のピラミッドで自分たちの下位にあるはずの人間に侮蔑されたことが吸血鬼としてのプライドを逆撫でし、義仲は真正面から来栖に飛び掛っていく。

「はぁあっ!」

来栖も腹の底から気合を響かせて、右の拳を振り被りながら義仲に突進していく。

「そんなもの打ち消してやる!」

来栖の突き出してきた右の拳が剣気の青白い光に包まれていることに気付いて、義仲は来栖が放つ剣気を相殺するために左の掌に蝕を具現化させる。来栖の剣気の光に輝く右の拳を義仲の伸ばした左の掌に展開された円形の蝕が包み込んだ。

「喝!」

来栖の拳と義仲の蝕が衝突した瞬間、来栖は拳を相手の掌に押し込むように雄叫びをあげる。だがいくらか来栖が意気込んでも掌にある蝕が彼の剣気を吸収してしまい、ダメージを与えられないまま来栖は自分のカウンターパンチを食らうのだと義仲は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ぐっ?!」

しかし来栖の叫びと共に拳が振り抜かれその周囲が爆発的に輝くと、義仲は蝕を展開している左の掌に猛烈な痛みを覚えた。まるで掌の中で爆弾が破裂したような衝撃を感じると、義仲の左腕が頭上に跳ね上げられる。来栖の拳の一撃を喰らった衝撃はそれだけに留

まらず、義仲は左腕どころか体ごと後方に跳ね飛ばされた。

「てめえ、一体何をしやがった？ うっ……」

来栖の剣気に包まれた拳を受けた義仲は全身を痙攣させながら、幽鬼のように地面から起き上がって来栖に怨嗟の視線を向ける。左腕にまた激痛を覚えて義仲は反射的に右手を添えるが、左腕が指先から崩れ始めていることに気付き驚愕で目を見開く。

「マジかよ、^{れん}劔を叩き込んだのにまだ生きてやがる……」

義仲はさっき受けた攻撃で自分の体が崩壊しだしていることに驚いていたが、来栖もこれまで相手にしてきたナレノハテは全で一撃で葬ってきた、剣気を一箇所に凝縮させて一極集中的にエネルギーを相手に叩き込む劔を使ってもまだ義仲を仕留められないことに衝撃を受けているようだった。

「なんだその目は…人間の攻撃に吸血鬼が耐えられるのがそんなに不思議か？」

義仲の肉体の瓦解は進んでおり、左腕だけでなく肩から胸にかけても彼の体は失われつつあった。瀕死の状況にありながら、義仲は自分がまだ消滅しないことを不思議そうに思っている来栖への恨みを述べて、怨念の炎を燃え滾らせた目を彼に向ける。

「餌の分際で、俺たちよりもずっと弱っちい生き物の分際で、吸血鬼を見下したような目をするんじゃないやねえっ！」

「喝！」

義仲は左の上半身は完全に崩れ去り、右腕も肘から先は欠損した状態にも関わらず牙を剥き出しにして来栖に飛び掛ってくる。来栖は義仲がしぶとく姿を保ち続けていることを見て、念のため右の拳に凝縮し劔が発動できるようにしておいた劔気を放ち、頭上に飛び上がった義仲の鳩尾を射抜く。

「こんな聖火を使える奴がいるなんて聞いてないぞ、平輔ええっ！」

来栖の右の拳から伸びる光の槍に貫かれた義仲は、この場にいない第三者を叱責しながら断末魔をあげてその身を粉々に爆発させる。外殻となっている肉体が消滅し、義仲の蝕が来栖の目に曝された。義仲の蝕は彼の体内に納まっていたとは思えないほど巨大な黒い球体あったが、これまで来栖が倒してきたナレノハテの蝕と同じようにその場に留まることなく煙のように消えてしまった。

来栖は劔気の連打に耐え切れず義仲の肉体が消し飛び、注入されたエネルギーが許容量を越えたせいでパンクした蝕も消失したことを見届けると、全身を弛緩させて重々しく緊張から開放されたことを安堵する息を吐き出した。

「撥でダウンを奪えない上に、源司さんみたく蝕で劔気を相殺されるとはな…正直しんどい相手だったぜ」

来栖は上半身を屈めて荒い呼吸をしながら、額に滲んだ汗を腕で拭う。こめかみを擦った時にやけにぬるつとした感覚がしたのを怪訝に感じて来栖が自分の腕に視線を向けると、手の甲に血が広がっていた。

「そうか、あいつに放り出されて地面に叩きつけられた時に……」

来栖は義仲の腕を極めようとして、逆に振り飛ばされて地面に叩きつけられた時に受身を上手く取りきれずこめかみを切ったのだと判断する。ウツセミと戦ったのは初めてとはいえ、攻め方だけでなく守り方にも課題が残る辛勝だったと来栖は苦々しい顔をした。

こめかみの出血はそれほど酷くなかったが、来栖はズボンのポケットからハンカチを取り出すと傷口に押し当てて血止めする。こめかみを覆った薄手のハンカチは滲む血を吸って赤く染まっていた。

「これまでも他所からウツセミが来たことってあったのかな？ 後で先代か源司さんに訊いてみよう」

浅いとはいえ顔の傍で流血が続くのは気がかりであり手当をしたことや、義仲との死闘を制したものの心身ともに重い疲労感を覚えていたので、来栖は義仲が御門市にやってきた理由の考察をひとまず棚上げて帰路に就くことにした。

初めて経験するウツセミとの戦闘だったことに加え、剣気の効き目が普段相手にしているナレノハテよりも軽く、剣気を多用しなければ義仲を倒せなかったことによって来栖はかつてないほど気力も体力も消耗していた。義仲の出現に關しての考察をする余力は残っておらず、来栖は踵を返して下宿へと戻るために暗い路地裏の奥からネオンの灯りが眩しい表通りへと足を踏み出していく。

「クーくん大丈夫?!」

来栖が表通りの手前までやってくると、彼の安否を訊ねてくる甲高い声が聞こえてきた。薄暗いビルの谷間にいたせいで表通りに煌く電飾や路上を走行する自動車のヘッドライトの光で目が眩み、はつきりと相手の顔を見ることはできなかったが来栖はこちらに駆け

寄ってくる人影が誰なのかを即座に察する。

「ああ、心配ねえよ」

来栖は見栄を張って背筋を伸ばして自分が健在なことを、息を弾ませてこちらにやってきた下宿先の次女葵にアピールした。

「クーくん頭から血を流れてるよ、あいつにやられたの？」

「まあな、でもやられた分は倍返しにして追い払ってやった」

葵は来栖がこめかみに当てているハンカチに血が滲んでいるのを見てあつと声をあげるが、来栖は彼女に余計な心配をさせないように気丈な笑みを見せる。頭を負傷しても来栖がまともに受け答えをしてきた安心から、葵は来栖をトラブルに巻き込んでしまった罪悪感で強張らせていた表情を少し和らげた。

「お前、来栖じゃないか。今度は誰とやらかしたんだ？」

互いの無事を確かめ合った来栖と葵の間に和んだ雰囲気は漂い出すと、葵の後ろに控えていた男が来栖の顔に見覚えがあるらしく、彼が今晚誰と乱闘になったのかを問い質してきた。

「あんたは少年指導委員の…どうしてこいつと一緒に？」

「こんな遅くに街を出歩いていたこの子に注意しようとしたら、喧嘩を止めてほしいと強引にここまで連れてこられたんだ」

ナレノハテを捜して深夜の繁華街を歩いている時に何度か補導させたことがある少年指導委員の中年男性がどうして葵と一緒にいる

のか来栖が疑問に思うと、指導委員の男性は補導しようとした葵に
来栖と義仲の戦いを止めるように頼まれたと理由を明かした。

「なるほど、そういうことっすか」

「なあ来栖、すぐかつとなつて喧嘩をするのはいい加減に止めたら
どうだ。こんなことを繰り返したつてお前自身にも何の得もないし、
妹さんも心配するだろう？」

「妹?!」

葵と指導委員の男性が一緒にいる理由に合点がいった来栖に、指
導委員の男性は来栖自身のためだけでなく葵を彼の妹と誤解して家
族のことを考えて喧嘩を控えるように呼びかけた。来栖と葵は同時
に指導委員の男性の誤解に対して素っ頓狂な叫びをあげる。

「派手な格好をしてこんな時間まで遊びまわっているのは関心しな
いが、兄さん思いのいい子じゃないか。怪我もしているんだし、今
夜は早く家に帰れ」

「ちよつとオジサン?!」

「それじゃあな来栖と可愛い妹さん、仲良く帰るんだぞ」

葵の反論に耳を貸さず、指導委員の男性は最後まで彼女と来栖を
兄妹と誤解したまま夜回りの続きに戻っていつてしまった。

「冗談じゃないわよ、なんでアタシがアンタの妹に見られなきゃい
けないのよ?!」

「いくら化粧したって背伸びしてる中坊にしか見えないんだから仕方ねえだろ、それとも彼女に見られる方がよかったか？」

「それはもつとイヤ！」

葵が指導委員の男性に来栖の妹扱いされたことに憤慨するが、来栖の冷やかしに対して彼の恋人に見られるよりはマシだと言いつ返す。あからさまに恋人と見られることを葵に否定されて、少し来栖は渋い顔を浮かべた。

「下手に関係を勘繰られるよりは兄妹に見られた方がマシかもな、さてと傷の手当もしなきゃねらねえし丹も心配しているだろうからさっさと帰ろっぜ」

現在居候している葵の自宅に戻ろうと来栖は促してくるが、葵はその場に立ち尽くしたまま動こうとしない。葵の血を吸おうとした義仲に路地裏に連れ込まれ、危うい所を来栖に逃してもらったが、助けられっぱなしでは寝覚めが悪いとちょうど自分を注意しようとしてきた指導委員を連れてこの場に戻ってきたが、事態に收拾がつくと自分を子ども扱いして隠し事をしている姉に反抗して家を飛び出してきたことを思い出した。

全身埃まみれで頭から出血している来栖ほどではなかったが、葵自身も先日買ったばかりのベロアジャケットはその下に来ている力ツトソーごと引き裂かれて肩からずり落ちそうになっている無残な姿をしている。こんなみつともない格好で出歩き続けるのは気が引けたし、義仲に自分の体を蹂躪されかけた恐怖が今になって沸き起こってきて姉や父親に縋りつきたいくらい心細い気持ちになっていた。

だが姉の丹や父親の齋^{いじ}を愛おしく思うと同時に、10年近くの失踪後に姿を現した母親に関して隠し事をされていることを思うと彼女たちに対しての不信感も込み上げてきた。家族の下に戻って心の安らぎを得たいという思いと自分を除け者に行っている家族に対する不満がせめぎあつて、葵は葛藤するあまり頭を抱え込んでその場にしゃがみ込みたい衝動を覚える。

「どうした切島妹？」

「ダメ、アタシ家に帰れない……」

「はあ、何言つてんだよ。自分の家に帰るのがいけない理由なんてあるのか？」

「だって姉さんも父さんもアタシのことを信用していないみたいだし……だから母さんが今どうしているのかを詳しく教えてくれないんだ。自分のことを信じてくれない家族のトコになんか帰りたくないよ」

家に帰れないという葵の発言に来栖は首を傾げるが、彼女が10年ぶりに自分たちの前に姿を見せた母親の件で姉や父親が詳細を語ってくれないことを理由に帰宅を拒んでいるのだと知ると来栖は少し困惑した顔になる。

「ウチに帰るならクーくん独りで帰れば？ 姉さんたちが大人だつて認めて隠していることを全部話す気になつてくれるまで、アタシは帰らないから」

葵は項垂れていた顔を上げると、来栖に対して独りよがりで子どもっぽい理屈を言い放ち、姉や父親が自分に対する態度を改めるま

では家に戻る意思はないと宣言する。

来栖は自分の視線から30cmほど低い位置にある葵の顔を見つけていたが、やがて目を閉じると呆れたような溜息を吐き出した。

「な、何よその溜息は？」

「そういう屁理屈ばっか並べてるから斎さんも丹もいつまで経ってもお前のことをガキ扱いするんだよ」

「指導委員のオジサンに顔を覚えられるような不良のアンタがアタシにお説教するつもり？」

「説教する気なんかねえよ、俺は事実を言っているだけだ」

素行の悪さが街中に広まっているような問題児の来栖に、成績優秀で数え切れないほどの賞状をもらっている優等生の自分が説教されることが気に食わず、葵は彼のことを睨み返すが、来栖は葵の剣幕など意に返さず、完全に目下の人間を扱うように憐れみの籠もった眼差しを向けながら彼女に歩み寄っていった。

「こないで、それ以上近寄ったら悲鳴をあげるわよ？」

「つべこべうるせえガキだな、いいから家に帰るぞ」

葵は来栖が目前に迫ってくると人を呼んで彼を困らせると脅しかけるが、来栖は葵の脅迫を聞き流すと左手で葵の右手を掴み、強引に自分の隣に引き寄せた。

「離しなさいよ！」

「指導委員のおっさんにさっき言われたろう、いつまでも遊んでないでさっさと家に帰れってな」

葵は喚きながら激しく右手を振るって来栖の手を振り解こうとするが、彼女の手首を来栖の手は万力のような力で掴んで離さない。葵は眉間に皺を寄せて不服そうな顔で来栖のことを見上げてくるが、来栖は彼女の棘のある視線を受け流しつつ幼い妹を宥める兄のように優しい目を向けた。

「…分かったわよ、今日は大人しく家に帰ってあげる。どうせアンタの馬鹿力には敵いそうにないし、それに服も酷いことになっているから着替えないと」

「そうそう、子どもは聞き分けがいい方が可愛げがあるぜ？」

「アンタまで子ども扱いしないでよ、お情けで居候させてやっている不良のくせに！」

来栖が初めて見せた優しい眼差しを受けて葵は従順な態度を示すが、来栖に再び子ども扱いされると、葵は細い脚を振り上げて彼の尻に強烈なキックをお見舞いした。

「葵てめえ、人が下手にでりや付け上がりやがって！」

「アタシのこと呼び捨てにしないでよ、クーくん！」

葵の脚が来栖の尻を蹴りつけると小気味いい音が鳴り響く。来栖はいきなり暴行を受けたことを非難するが、葵はその際に馴れ馴れしく名前を呼び捨てにされたことに抗議してきた。

「クーくんじゃねえ、来栖さんだ！」

来栖も葵に呼ばれたくない渾名を使われたことに感じた不満を露にして言い返してくる。その後、来栖は相手が2歳年下の中学生であるにも関わらず、情けや遠慮は無用で葵と罵倒しあった。両者とも感情を包み隠さないまま言い合う姿を見かけた人の多くが、彼らを兄妹と思ったのは言うまでもなかった。

* * *

義仲と一戦を繰り広げた翌日、来栖はこめかみにガーゼを貼って登校した。来栖のこめかみに貼られたガーゼは多くのクラスメイトの目を引いていたが、しょっちゅう他校の生徒と殴り合いをしては生傷をこさえたり包帯を巻いたりして彼が登校してくること珍しくなかった。特に関心する者はいなかった。

「見てよ丹、あの人もまた喧嘩したみたいだよ？」

「そんなこと言うのはよくないよカンナちゃん……」

声を潜めて喋りかけながら友人の天満カンナが来栖の横顔を指差すと、丹はカンナの振る舞いに遺憾の意を示す。

「いつも不思議なんだけどさ、丹はどうしてあの人の弁護をしたりたまにお弁当を渡したりしてあげるの？ 絶対あんな人と付き合わないほうがいいよ」

「みんなクーくんのことを誤解してるよ。ちょっと見かけは怖いかもしれないし、たまに喧嘩をしているけれど、本当のクーくんは責

任感が強くて思いやりのある、真っ直ぐない人なんだから」

毎日のように生徒指導の教員に注意をされている来栖と付き合わない方がいいというカンナの発言は自分に対する善意によるものだとは分かっていても、丹は悪し様に来栖が悪く言われるのが我慢できなかった。少し眦を吊り上げた厳しい顔で丹は一言多い友人の顔を見つめる。

「ごめん丹：自分でもちよつと言い過ぎたと反省している」

温厚な性格をしている丹の怒った顔を初めて目の当たりにした驚きと共に、自分の軽率な発言が彼女の気を損ねてしまったとカンナは反省の念を示した。

「わたしに謝る必要はないよ。でももう少しクーくんのことをちゃんと見てあげて、カンナちゃん」

「：分かった。丹がそう言うんなら、少しあの人の見方を変えてみるように努力する」

親友がここまで熱心に肩入れすることを受けて、カンナは来栖に対する見解を改めてみるように努力することを丹に約束する。

「ありがとう、きっとカンナちゃんもクーくんのことを見直すようになるよ！」

「丹がそんなに嬉しそうな顔をするなんて：よっぽど来栖くんのこと大事なんだね」

「うん、だってクーくんはわたしの恩人だから」

カンナが来栖への態度を改善することを約束してくると、丹は満面の笑みを浮かべて喜びを表現しながら彼女の手を掴む。穏やかな気質はしているものの、丹がここまで明確に感情表現をすることが少ないので理由は定かではないが、丹にとって来栖はかけがえのない存在なのだとカンナが察すると、丹は首を大きく縦に振って頷き返す。

「おい丹：あんまり人前でその名前を使わないでくれ」

「う、ごめん：あれ、どこか行くの？」

「保健室、頭の傷がまた開いちまったみたいだから消毒してもらってくる」

視界に陰が差したと感じると、丹にあまり口外して欲しくない渾名を連呼されて気恥ずかしそうな顔をした来栖が彼女たちの席の前に立っていた。丹が謝罪をしつつ、休憩時間は日頃の睡眠不足を補うために眠っている来栖が珍しく席を離れていることを気にかけると、彼はこめかみのガーゼを指差して保健室に治療を受けにいくのだと答えた。

来栖のこめかみにある傷口を覆っているガーゼに意識が向くと、丹はかすかに塞がっていない傷口から漂う血臭を嗅ぎ取った。血の臭いを感じると丹は急に血の味を思い返してしまい、精気を欲して彼女の体が疼き始める。

「丹、妙にそわそわしているけどトイレにでも行きたいの？」

「う、うん：ごめん、ちょっと席外すね」

「いいよ、我慢してちゃ体に悪いし」

カンナが落ち着きのなくなった丹の態度に違和感を覚えると、丹は適当な相槌を打って席を立つ。結果的に丹は来栖と連れ立って教室を出て行く格好になった。

「渴きを感じたんだな、丹？」

来栖が小声で問いかけると丹は恥らうように小さく首肯する。昨晚自分が手につけた義仲と同じく、丹は自我と人間であった時の姿を留めている吸血鬼の一員であった。人間を凌駕する吸血鬼として能力の大半を喪失する代わりに、鈍化した感覚神経のおかげで日光の影響も受けにくくなったため日中の活動も可能になった丹だったが、精気を自給出来ずに他人から摂取する必要があることは変わらなかった。

丹は夏休みに吸血鬼に転化して以降、来栖から血液を提供されて精気の枯渴を癒していた。来栖の精力に満ちた健康な血を美味しいと思いつつ、他人の血を啜って命を繋いでいる自分に丹は嫌悪感を抱かずにはいらなかった。

そういつた事情から丹は積極的に血を求めようとせずぎりぎりの状態まで血の渴きを我慢して、来栖が彼女の異変を感じ取ってようやく摂取するということが毎回のシチュエーションであった。

「天満の言った通りあんまり我慢すんなよ、無理した拳句に暴走される方がよっぽど迷惑なんだからな？」

「うん、いつもごめんねクーくん……」

「まったくだ、毎度毎度こっちから訊くまで飲もうとしないのにもうんざりだぜ。すまないと思うなら、自分から言い出してきてくれよ」

来栖がカンナ言葉の言葉を復唱すると丹はすまなそうな顔で足元を俯く。だが来栖が丹から血の催促をするように言うのを聞いて、丹は意外そうな顔で彼の顔を覗き込んだ。

「そんな顔してどうした、俺なんか変なこと言ったか？」

「うっん、でも本当にいいの？」

「なあ丹、あんたは俺に気を使ってるつもりなんだろうけどさ、あんまり遠慮し過ぎると逆に鬱陶しくて失礼に思われるぞ？ 欲しいものならはつきりとそう言った方が、相手もすっきりするぜ」

来栖の発言を丹は嬉しく思うものの、本当に彼の言葉を信用していいのかと念入りに聞き返す。しかし来栖は何度も同じ質問を繰り返すのは時間を浪費することになってしまつので相手を苛立たせかねないし、中途半端に遠慮をして結論を引き延ばすよりは意思表示をはっきりした方が、双方気持ちがいいと丹に言い聞かせた。

来栖の言葉は丹の胸に響いたものの、彼の血が欲しいと要求することと自分の作り上げてきた人間性が崩壊してしまうような恐れを抱かずにはいられなかった。生き血への渴望は次第に強まっていく一方で丹が話を切り出せないまま歩いているうちに、彼女たちは保健室の前へとやってくる。

「赤城センサー、頭の傷が開いちゃったんで消毒してほしいんすけ

ど」

保健室の扉をノックすると、校医にするものにしてはぞんざいな口調で来栖は入室していく。もつとも来栖が生意気な口を利くのは校医の赤城に限ったことではなく、担任の盛田だろつが学年主任の教諭だろつが関係のない話だつた。

「あれセンサーいないみたいだな。仕方ない、道具だけ借りて自分でやるか」

来栖が保健室の内部を見渡しても校医の姿は見当たらず、来栖は自分で傷の担当を行うことにする。サージカルテープで貼り付けたガーゼを傷口から剥がすと、来栖は校医の執務用の机の脇にあるゴミ箱にガーゼを投げ捨てた。来栖の右のこめかみは若干腫れあがつていて、膨らみの頂点に開いた傷口から血が滴っていた。

かさぶた
瘡蓋でところどころ塞がれている傷口は見ていて気色のいいものではないのに、丹は黒ずんで凝固した箇所と薄紅色の肉が覗き血が滲んでいる箇所が入り混じつた来栖のこめかみの傷を見て、自分の口腔に唾液が分泌されて食欲をそそられていることを自覚した。

「クーくん……」

「なんだ？　ぼうつと突つ立ってるならお前も一緒に消毒液を探してくれよ」

「わたし……クーくんの血が欲しい」

傷口に塗布する消毒液を探して壁際の棚を漁っていた来栖は、入り口の傍で立ち尽くしている丹に自分の手伝いをするように呼びか

ける。丹は来栖が物色している棚の方に進んでいったが、その理由は彼の助力をするためではなくて自分の渴きを癒すためだった。

丹は爪先立ちをして来栖の右肩に手を添えて伸び上がると、来栖のこめかみに開いた傷口に向かって舌を伸ばしていく。丹の舌が傷口をなぞると、来栖は内皮に触れられた痛みと同時にこそばゆい快感を覚える。丹の舌は何度も来栖の傷口の上を往復していき、その度に来栖は痛覚が敏感になった剥き出しになった肉を弄ばれる痛みと快感で体の力が抜けていきそうになるのをどうにか堪えていた。

来栖のこめかみの傷から零れる血の量は微々たるものであり、丹の渴きを満たせるだけの量を摂取するのには結構な時間を要した。だが来栖は時間の流れを忘れて、丹の舌に傷口を舐められる快感に身を委ね続ける。

「あなたたち、こんな所で何をやっているの?！」

丹の血の渴きがようやく納まりかけた頃、保健室に戻ってきた校医の赤城が来栖と丹が倒錯的な行いをしている場面を目撃して驚きの声をあげる。

「赤城先生?! これは、その……」

来栖の血を堪能した余韻に浸っていた丹は、赤城の声を聞くなり我に返ると慌てて来栖の体から飛び退く。丹の舌の愛撫で惚けていた来栖は、表情を引き締め直して素知らぬ顔でその場に佇んでいた。

「切島さん、動物じゃないんだし傷口を舐めちゃ駄目よ。空気中の細菌だけじゃなくてあなたの唾液に含まれている細菌からも感染症を起こすかもしれないんだから」

「す、すみません……」

「こつちにいらつしやい来栖くん、すぐに消毒をしてあげるから」

赤城は来栖と丹の背徳的な交感について深く詮索せずに、目の前にいる来栖の手当てを優先することにする。丹と来栖は赤城が他人の交際関係に対してドライな性格でかつ仕事熱心なおかげで、彼女が不在中に自分たちが保健室でしていたことに言及されなかったことに内心胸を撫で下ろした。

* * *

来栖が保健室で丹に傷口から血を舐め取られた日の夜、真理亜は自室の肘掛椅子に腰掛けながら、高校の校医を勤めている親戚の女性から久々にかかってきた電話に應對していた。

母方の親類に当たるその女性とは幼い頃から妙にウマがあつて会話も弾みやすかつたので真理亜は彼女のことを慕っていたし、彼女もまた真理亜を可愛がってくれていたので、真理亜は打算抜きにその電話を楽しんでいた。

『そういえば真理亜、今の高校生つて好きな人に噛み付いたり傷を舐めたりするのが流行の愛情表現なの？』

「紗英子さん、ご冗談はよしてください。今も昔もそんな凶暴な愛情表現が主流になるはずございませんわ」

『そうよねえ、じゃあやっぱりあの子たちのスキンシップは変わっているんだわ』

「くいな橋高校には紗英子さんがさつきおっしやられたようなことをしていた生徒さんがいらっしやるの？」

『ええ、しかもそのカップルっていうのが構内でも指折りの問題児と大人しい感じの優等生で通っている女の子なのよ』

「まあ、性質の悪い不良に誑かされた上、変質的な仕打ちまでされているなんてその女子生徒には同情致しますわ」

『違うのよ、大人しそうな性格の彼女が不良の彼氏の腕に噛み付いたり今日は喧嘩で作ったらしい傷を舐めたりしているの』

「その女子生徒は何か精神的な疾患でも抱えられていらっしやるのかしらね？」

『どうやらその子は小さい時に母親が蒸発しちゃって、それ以来ずっといなくなった母親の変わりに妹の面倒や炊事洗濯を引き受けさせられていたらしいのよ。しかも夏休み中に10日くらい行方不明になっていたらしくて、学校でもちよつとした騒ぎになっていたわ』

「…紗英子さん、そのおかしなことをしているカップルについて詳しい話をお聞かせいただけないかしら？」

真理亜は紗英子の話を始めは面白半分で聞いていたが、徐々に紗英子の話に出てきたカップルの奇行やその素性を聞いているうちに気がかりな点を感じ始める。紗英子は何度か保健室で過激なスキャンシップを繰り返しているそのカップルの扱いに少々悩んでいたらしく、愚痴を聞いてもらう感覚で真理亜に詳細を打ち明け始めた。

真理亜は奇行をするカップルの名前や家庭事情、最近の学校生活の様子をこと細かく伺っていき、紗英子は胸の裡に抱えていた悩みを真理亜に洗いざらい吐き出したことで互いに充実したやり取りをすることができた。真理亜は激務に追われている紗英子に養生するように労いの言葉をかけると電話を切った。

「やっぱり私の予想通り、そのおかしな振る舞いをされているカップルとは来栖さんと丹さんのことでしたのね。しかも夏休みに失踪されてからの丹さんの行動は、まるで吸血鬼のようじゃない？」

真理亜はくいな橋高校の校医を勤めている親類の赤城紗英子から聞き及んだ情報を統合して、丹が日光を避けるように厚着をしたり極力ひなたに出ないようにしていることや、彼女が何度も来栖の血を啜っているような行為をしたりしていることで、丹が吸血鬼なのではないかという疑惑を抱き始める。

「あの化け物どもの中には稀に人間並みの身体能力しか持たない代わりに、日中でも外を歩ける個体が存在するらしいですし、裏で奴らと結託している来栖さんと行動を共にして居候までさせていることも怪しいですわ。丹さんの身边にも探りを入れてみる必要がありますね」

真理亜は縦ロールの髪を指に絡めながら、面識のある少女の正体が吸血鬼ではないかという証拠を掴むための手立てに思考を巡らせ始める。ウワバミとしての自分を知られないために極力人付き合いを避けている来栖が、他人の丹の家に下宿するようになった時点で何かおかしいと思うべきだったと真理亜は自分の迂闊さを齒痒く思う。

「来栖さんも丹さんも一緒に化けの皮を剥いでやりますわ」

真理亜は自分が犯してしまったかもしれない失態を取り返すためにも、確実に来栖と丹が隠している事実の手懸かりを掴もうと自分を鼓舞して、その秀麗な顔に不敵な笑みを浮かべた。

第4回、暗闘の大儀 了

第5回、馴れ合いの黄昏

夕陽が沈むこともなければ朝を迎えることもない黄昏の空が永続している紫水小路は、ウツセミを自称する吸血鬼たちの居住地である。

現世とは別の時空に存在している紫水小路においてウツセミを迫害する者は存在せず、絶対的な街の支配者として彼らは君臨しており吸血鬼の視点で見れば平和な社会が作られていたが、数人の人物が集められた代^{よみが}永氏族族長の屋敷の一室には、表の穏やかな空気とは対照的なきな臭さが蔓延していた。

「御門^{みかど}いや紫水小路の以外の場所からやってきたウツセミか……」

「元々私たちの始祖はヨーロッパから日本に逃れてきたのでしょう。だつたらここ以外の場所に吸血鬼がいてもおかしくはないじゃないの？」

上等なスーツを粹に着崩し基本的に飄々とした態度をしている代永氏族族長の源司^{げんじ}が柄にもなく深刻な顔を見ると、代永と対をなす富士見氏族の族長の席にある人形のように整った顔立ちをしている千歳^{ちとせ}は彼が何に思い悩んでいるのかと不思議そうに鶴のように細くて優美な首を傾げた。

「千歳、他の地域にも吸血鬼がいること自体は不思議じゃないよ。問題なのは他所からやってきたそのウツセミがオレたちの存在知っていた上で、御門市内で人間を襲ったということさ」

「ウツセミ同士なら相手が傍にいらなくてもその存在を感じ取れるだ

ろう、先客がいるのならその街で狩りをしないのはウツセミとして当然のエチケットじゃないか」

千歳の質問に対し源司が返答すると、彼に続いて同じく代永氏族に属し紫水小路に迷い込んだ人間を相手にした歓楽街『花街』の経営を任されている忠将が同胞に対する不文律の礼儀を説いた。

「それは紫水小路の中での常識でしょう、他所の吸血鬼がそこまで
 慎重深いという証拠はないわ」

「あのね富士見のお嬢様、理性を無くしたナレノハテだつて自分の餌場である御門の外には出ないくらいのことくらいの縄張り意識は持っているんだよ。ましてウツセミなら同胞の気配を感じれば大人しく御門を離れるに決まっているさ」

千歳は源司たちの主張が必ずしも吸血鬼全体にとって普遍的な道徳ではないと力説するが、彼らと同じく代永氏族の一員でウツセミの餌となる人間を含めた紫水小路で行われる商取引全般を取り仕切る『置屋』の女主人の茜は千歳の意見を鼻で笑って一蹴する。

「だからそれが外の吸血鬼にも通用する考えとは限らないでしょう？」

「畜生と変わらないナレノハテでさえ守れるんだから、他人の縄張りに入り込まないってことは私たちの先達が定めた掟によるものじゃないくて、ウツセミもナレノハテも関係なく本能的に従う種族としてのルールなんだよ。箱入り娘が知ったような口を利くんじやないよ」

千歳は族長の自分に対する茜の不遜な態度に癪癪を起こし、陶磁

器のように滑らかで白い頬を紅潮させて茜を睨みつけるが、茜は涼しい顔でその剣幕をやり過ごしつつ理詰めで千歳を黙らせた。茜に自分の主張をあっけなく論破されてしまい、千歳の玲瓏とした美貌に羞恥の色が濃く浮かび上がる。

「…既に片付いた問題を蒸し返すなんて非生産的なことに付き合っていないわ、私はこれで失礼するわよ」

「待つてくれ千歳さん。また同じようなことがあるかもしれないし、今後の対応を協議するのに富士見の族長をしているあんたの意見も取り入れなくちゃいけないだろう？」

「退屈な議論や有力者による投票をしてものを決めるなんてもううんざりよ。人間の真似事はしたいひとだけでしてればいいわ、私は抜けさせてもらっわよ」

会議に参加し続けることに嫌気が差した千歳が早退する旨を一同に告げて席を離れようとするのを、忠将が紫水小路の支配階級の一端を担っている氏族の代表である彼女の意見を蔑ろにする訳にもいかないのです。その場に残るように懇願した。しかし千歳は人間のように議論を重ねることを煩わしく思っているようで、頑なに忠将の申し出を拒むと会議の開かれている応接室から出て行ってしまった。

「染物屋、あんたのトコのお嬢様の我儘をどうにかしてくれないかしら？」

「今更言っても仕方がないだろうし、仮に注意した所で今はあれが私たちの族長なんだから配下のものの意見を素直に聞き入れるはずがないだろう？」

「先代の族長が手塩にかけて育てたからって、あんな世間知らずの小娘を族長にするなんてあなたたちはどうかしているわよ。少しは迷惑をかけられる私たちのことを考えてくれないんじゃない？」

「それは無茶な注文だな、富士見のウツセミたちは同胞全体の利益よりも、自分の創作活動に没頭することを優先するからね。だからこそ君たちが大枚を叩いて欲しがる作品を生み出せるんだ」

「…置屋はあなたたちの作ったものが売れりゃ儲かるからいいけれど、ウツセミ全体としては2つある氏族のうちの1つが機能不全になっているんだから大迷惑さ」

茜は同席していた富士見氏族のウツセミで現在最長老の染色家をしている恒わたるに千歳の族長としての自覚のなさを諫言するように訴えるが、恒は富士見氏族の性癖を口実にして彼女の願いを却下する。族長だけでなく富士見氏族は全体としてウツセミの社会を円滑に回す政治的な興味の薄いことを茜は嘆かわしそうな顔で天を仰いだ。

「茜さんの言う通りつすよ、あのひとがちゃんと富士見氏族を纏めてくれなきゃ俺だって余計な仕事が増えるかもしれないんすから」

会合の出席者が囲うテーブルの末席に座っていた、ウツセミの天敵にして守護者であるウワバミの役目を務めている人間の来栖が茜の発言に同意を示した。先日件の他所からやってきた吸血鬼と交戦し、彼は剣気という生体エネルギーを武器にする能力を用いてその吸血鬼を退治していた。

「ところで託人たくと、君が滅ぼしたウツセミは名前や出身地について何か言っていたかな？」

「いえ、遭遇してすぐに戦いになっちまったからそんな悠長な話を
してる暇はなかったすよ。ただ死に際にヘースケとかいう奴への
恨み言を口にしてましたけど」

「へいすけ
平輔だつて?!」

源司は先日始末した吸血鬼の出身などについての情報がないかと
来栖に訊ねるが、襲われていた下宿先の娘である葵を助けるのに気
がいつてしまっていて、自分の倒した吸血鬼が義仲という名前であ
ることも来栖は知らなかった。

自分が退治した吸血鬼に関して言えることは、吸血鬼が臨終の際
に呪詛を叫んだ相手の名前くらいだと来栖が答えると、その名を大
声で復唱した源司だけでなく周りにいた他のウツセミたちの顔にも
戦慄が走る。

「どうしたんすか源司さん、その平輔つて奴を知ってるんすか？」

「源司、左腕を斬り飛ばされた状態であいつが生きていると思うか
？」

来栖は義仲の断末魔に名前の出てきた人物に源司が心当たりがあ
るのかと訊ねると、彼が来栖の問いに応じるよりも先に忠将が他の
質問をしてくる。質問をした忠将もそれを受けた源司も、その端正
な顔に恐怖の色が浮かんでいることを来栖の目にも察しられた。

「普通に考えればありえない。銀の刃である魔剣で斬られた傷口か
らは絶えず妖気が漏出し続けるんだ、いくらあのひとが莫大な妖気
を持っていても無事でいられるはずがない」

「いくらあいつが俺たちは元より、族長を務めるお前も凌ぐ妖気を持つていたからって、10年も生き延びられるはずがない。その前に妖気が底をついて存在を維持できなくなるか、精気の餓えで悶え死ぬかのどちらかだろう」

「そのヘースケって奴、もしかして10年前に紫水小路から追放されて外で紅子さんを襲ったウツセミじゃないっすか？」

来栖は源司と忠将の会話を聞いているうちにその平輔というウツセミは、以前祖父である先代のウバミから話を聞かされた反逆者として紫水小路を追われたものではないかと思ひ始めて、その真偽を確かめることにする。

「その通りさ。しかし何故そのことを知っている、もりみち護通から聞いたのかい？」

「はい。丹がウツセミになった直後、あいつがウツセミとの因縁を持つようになった紅子さんの転化の件で何か知っているかを聞きに行った時に教えられました」

源司は平輔がかつて反乱を起こしたことを何故来栖が知っているのかと意外そうな顔で聞き返すと、来栖は下宿先の娘とその母親にまつわる件で祖父の下を訊ねた時に関連する事情として伝えられたことを明かす。

「源司さん、平輔って奴は敵に回すとそんなにやばいんですか？」

来栖が平輔の実力が族長の源司にとっても脅威になるものかと訊ねると、源司は無言でその問いに首肯する。

「でもウワバミの俺と源司さんや忠将さんたちが協力すれば問題ないっすよね？」

「そうとは言い切れないくらいあのひとの力は底知れない…少なくとも10年前は中堅のウツセミでは東になっても敵わなかったし、オレがあの一とに手傷を負わせられたのも不意打ちが上手くいったからだ。正面から挑めば多分オレも返り討ちにされていた」

「源司さんが……？」

この場に同席している忠将や茜、それに先日葬った義仲の蝕もウツセミの中でもかなり大きかったが、源司は彼らの比ではないくらい巨大な蝕をしていた。それは源司のウツセミとしての能力が忠将たちと比べても抜きん出ていることの証である。その源司が太刀打ちできないほど強力なウツセミがいると、来栖はにわかには信じられなかった。

「託人、地震や洪水をどうにもできないのと同じであのひとを打ち負かそうなんて考えが馬鹿げているんだ。オレたちに来るのは、あの人が紫水小路に復讐しに来ないように祈ることだけだよ……」

平輔が全盛期の能力を保っているのなら、それを前にしては天災と同じようになす術もなく通り過ぎるのを待つしかないのだと源司は来栖に言い聞かせる。来栖は源司の弱気な発言を聞くのは初めてであつたし、彼が酷く怯えた様子など想像したこともなかった。

来栖は源司の話を聞いて、中堅のウツセミ相手にも劣勢を強いられた自分が族長すら凌駕する力を持つ平輔と戦うことになった場合、平輔を仕留められる自信が持てなかった。しかし仮に平輔が紫水小路に住むウツセミと御門市に住む人間に牙を剥いたならば、来栖は

ウワバミとしての責務でその暴拳を鎮圧しなければならなかった。

祖父からウワバミの任を継承して多くの苦難を乗り越えてきたつもりだったが、平輔と戦うことを思えばそれらが兎戯に等しいように来栖は感じる。じつとりと汗の滲んだ掌を握り締めた来栖の拳は、未知の脅威に対する恐れで震えていた。

* * *

来栖や源司たちが過去に討伐して紫水小路から放逐したはずの強力なウツセミ平輔が襲来してくる懸念を募らせていた頃、丹は彼らが談合をしている源司の屋敷の前にやってきていた。

義仲が御門市内で人間を襲った事件に関しての協議に丹が所属している紫水小路全体の庶務を執行している部署政所の責任者である朱美も出席するはずだったが、日頃職務に不精な朱美の行いが災いして溜まった仕事を処理しなくなればなくなり、会議に参加する余裕は全くなかった。

そこで丹は会議の内容を出席者に教えてもらい、朱美に報告する役割を申し付けられ、会議の議場となつている源司の屋敷を訪れたのだった。丹が屋敷の門を開こうとすると、内側から門が開放されて屋敷から出てくるものがいた。

「こんにちは千歳さん」

「あなた、丹という名前だったわね。こんな辛気臭い場所に何の用？」

丹は従者が開けて支えている門から出てきた麗人、富士見氏族の

族長千歳に敬意を表して会釈をする。以前ウツセミたちが愛飲している嗜好品のチンタを醸造する酒蔵の前で出会った丹のことを思い出しながら、千歳は彼女が会合の議場を訪ねた理由を問う。

「政所様の使いとして会議で話された内容の確認に来ました。あの、千歳さんがお帰りになられるということは会議はもう終わっているんですよね？」

「さあ知らないわ、つまらないから途中で抜けてきちゃった」

丹の問いに対して、千歳は会議に飽きたので途中退席したからその後のことは分からないと素っ気無い返事をする。丹は重要な話し合いを気乗りしないから退席したという千歳の奔放に絶句した。

「お嬢様、このひとが例の烙印を刻んで現世で暮らしている子ですか？」

「ええそうよ、この子が現世でどんな暮らしをしているか興味がありそうね悠久^{はるひさ}？」

「はい、不老不死になる代わりに太陽の下にいらなくなるはずのウツセミが、人間と同じように昼間も生活できるなんてとても興味深いです」

千歳が門の外に出ると、開かれた扉を支えていた悠久と呼ばれた少年が閉門しつつ丹に目を向けてくる。成長途上の中性的な繊細な容姿をした悠久と丹の目が合うと、彼は利発そうな顔に愛嬌のある笑みを浮かべた。絶世の美女と言っても強ち誇張ではない千歳の従者に相応しい美少年の悠久に微笑みかけられて不覚にも丹の胸はときめいてしまう。

「私は独りで帰っても構わないから、その子に直接話を聞かせてもらったらどう?」

「それじゃお言葉に甘えさせてもらいますお嬢様、お気遣いありがとうございます」

「あなたは普段よく働いてくれるからね、そのご褒美よ」

千歳は従者の悠久に寛容な姿勢を見せると、彼も遠慮なく主の好意に甘えることにする。千歳は氷の彫像のような美貌に優しげな笑みを浮かべると、悠久を残して独りで富士見氏族の領地に向かって歩き出していった。

「初めまして僕は悠久、千歳お嬢様にお仕えしているウツセミだよ」

「切島丹です、よろしくお願いします」

酒蔵で出会った時に千歳が連れていた永遠とわという少女は召人めいじんと呼ばれる人間の奴隷だったが、悠久は千歳や丹と同じくウツセミであった。ウツセミの年齢を推測するのに見かけの年齢はあまりあてにならないことを丹も分かっているので、一応丹は年下に見える悠久にも丁寧な言葉遣いで接する。

「そんな風に身構えなくてもいいよ、友達同士みたいに気楽に話そう?」

「分かった、悠久くんがそれでいいなら」

「ねえ、できれば君のことを丹って呼び捨てにしてもいいかな?」

「別に、構わないけど……」

本当は初対面の相手から名前呼び捨てにされることに抵抗感があつたが、悠久の屈託のない笑顔にほだされて丹はついそれを承認してしまう。

「丹はさ、どうして烙印を背中に刻んでまで現世に戻ろうとしたの？」

「どうしてって…友達や家族と離れ離れになるのが嫌だったからに決まってるじゃない。悠久くんもウツセミになった時、仲のよかった人と別れなきゃならなかったのは辛かったでしょう？」

「いいや、僕は辛くなかった」

悠久は本来重罪を犯したウツセミへの刑罰として科される、背中に吸血鬼の体に有害な銀の刃で十字の傷を刻む烙印を何故丹が受け、ウツセミとしての能力を減衰させる代わりに日光への耐性を身につけて人間だった時の暮らしを取り戻そうとしたのか訊ねる。

丹は悠久も自分と同じような気持ちになつたはずだと労わりの目を彼に向けるが、悠久は丹の問いかけに対して首を横に振る。

「なんで、紫水小路にいる限り現世にいる大切だった人と二度と会えないんだよ？」

「だって人間だった時、そんな風に思える奴なんか1人もいなかったもの。むしろ居心地の悪い人間の世界から離れられてせいせいいしたさ」

「そんな……」

丹は悠久が本心からそんなことを言っているのではないと信じたかったが、悠久は変わらず爽やかな表情をしており、嘘を言っているようには思えない。ウツセミになって人間だった時のつながりを断てたことを喜ぶ悠久の姿を見ると、丹は余計に悲しい気持ちになった。

「現世へのこだわりなんかよりもさ、どうやって烙印を刻まれたのに君が普通に生活できているのかを教えてよ？」

「詳しいことは分からないけど、傷口を剣気でクーくんに塞いでもらって妖気の流失を止めてもらったからだよ」

「クーくんってもしかしてウワバミのこと、あんな大物とよく知り合いになれたね？」

「特別なことはしてないよ、クーくんとは学校のクラスメイトだからそれで」

「先にウツセミになった産みの母親に転化させられただけでも珍しいのに、僕らの天敵にして守護者のウワバミとクラスメイトで、しかもその縁で烙印の傷を塞いでもらい現世で生活している。丹、君は随分面白い偶然が重なる人だね」

悠久は彼が人間だった時のことを訊かれるのが面白くない様子で、ウツセミにとって致命的な銀の刃で刻まれた傷を負いながら丹が平然としている理由を訊ねてきた。丹が質問に答えると、悠久はしたり顔で何度も細い顎を縦に揺らして頷く。

「ねえ丹、こうして知り合ったのも何かの巡り合わせだと思っし、花街でチンタでも飲みながら親睦を深めない？」

「悠久くん、誘ってくれて悪いんだけどわたしは政所の仕事でここに来たの。途中でサボる訳にはいかないわ」

悠久は丹を人間だけでなくウツセミの遊び場もある花街に繰り出そうと誘うが、丹は生真面目に仕事を抜け出すわけにはいかないとそれを断った。

「ただくだらない話し合いの内容を聞くだけのことだろう、そんなの後回しにしたって大丈夫じゃないか？」

「あんまり紫水小路に長居していると妹が心配するから早目に仕事を終わらせて家に帰らなくちゃいけないの、ごめんね」

悠久は丹の手を取って急がなくても済ませられる用事だと彼女に言い聞かせる。だが丹は帰宅が遅くなると現世で同居している人間の妹が騒ぎ出してしまうと言って、彼の手をやさしく振り払った。

「君は基本的には現世で生活していることをすっかり忘れていたよ。人間に紛れて生活しているんだから、取り繕わなければならない体面もいろいろあるよね」

「ごめんね悠久くん、一緒に食事をするのはまた今度ね」

「うん、それじゃ」

丹がすまなそうな顔で侘びてくると、悠久は愛想笑いを彼女に返

す。丹も悠久に微笑み返すと源司の屋敷の門を潜って敷地の中へと入っていく。

「また今度って言うからには嫌われた訳ではないみたいだね。切島丹、実に面白い子だよ」

悠久は独り言を呟いて丹が消えていった門を見上げる。悠久は中性的で愛らしい顔にいたずらっこのような笑みを浮かべると、身を翻して源司の屋敷を後にした。

* * *

夜明け前、鉄道の高架橋と並行して敷かれている生活道路を来栖と丹は並んで歩いている。

来栖はウツセミの有力者に義仲と交戦した件の報告を終えた後、その話し合いの内容を聞きに来た丹に付き添って政所に立ち寄ると、彼女と一緒に紫水小路を出た。現在来栖が丹の自宅に居候していることは政所に勤める彼女の母親の紅子も政所の長である朱美も知っていたので、丹を待っている来栖に特別気を止めなかった。

「クーくん、やっぱりわたしはウツセミとして変わっているのかな？」

「ああ、世界中捜しても早起きして家事を済ませてから学校に通っているウツセミなんてお前くらいいいないだろうな」

「そうだよ、普通吸血鬼のライフスタイルは人間と昼夜逆転しているし」

「いきなりそんなこと聞いてくるなんてどうした？」

突然丹が彼女のウツセミとしての在り方をどう思っているか訊ねてくると、来栖は彼女が特異な存在であると即答する。丹自身も人間と同じような生活スタイルをしている自分が変わり者だと自覚しているようだったが、来栖は彼女が何故そのような質問をしてきたのかと理由を問う。

「源司さんの屋敷の前でね、富士見氏族のウツセミと会って話をしたの」

「富士見のウツセミって、あのきまぐれで自己中心なお嬢様のことか？」

「ううん、千歳さんに付き添っていた悠久っていう中学生くらいの外見をしたひと」

「ハルヒサ？ 聞いたことねえ名前だな、それでそいつと何を話したんだよ」

代永と富士見の両氏族の有力者とはほぼ全員面識が来栖はあったので、名前に聞き覚えのない悠久は若手のウツセミだろうと推測する。丹が会話をした相手が注意すべきものではないと知ると、来栖はあまり関心がなさそうに会話の内容を問う。

「わたしが現世でどんな生活をしているのかとか、烙印を刻まれたのにどうして平気な顔をしていられるのかとか、あと人間じゃなくなつて悲しくないのかつてことを話したよ」

「お前は人間だった時の生活に未練があつたから烙印を負つてまで

現世に戻ったけど、そのハルヒサつてのもお前と同じように現世に未練があつたのか？」

「悠久くんは全然未練なんか持っていないって、むしろウツセミになつていい気分だつて言つてた」

丹は悠久が人間でなくなったことに喪失感を覚えるどころか、柵からの解放感を覚えていると言つたことを思い出して顔を曇らせる。ウツセミになつて現世に戻れないと知つた時、他のウツセミがどう思つたのかをあまり聞いたことはなかったが、少なくとも丹や彼女の母親紅子はその事でかなり傷心した。悠久の気持ちが理解できないというのが正直な丹の感想だつた。

「紅子さんが急にいなくなった悲しみは大きかつたろうけど、基本的前にお前はおつかないけど娘を大事にする親父さんと生意気だけど正直な妹に囲まれた幸せな家庭で暮らしていたから現世のことを恋しく思つたんだろうな。でもウツセミの中には人間だつた時はそれこそ生きているのが嫌になるような辛い目に遭つてきた奴だつて少なくないんだぜ？」

「そうなんだ、でも人間じゃなくなつてせいせいしたつて言うのは……」

ウツセミの誰もが丹のように人間だつた時に幸せな日々を過ごしていた訳ではないと聞かされ、仮に悠久が人間だつた時に酷い目に遭つていたとしても、それでも頭ごなしに人間だつた時間を否定するような悠久の発言を丹は認められなかった。

「そのハルヒサつて奴がウツセミとしての自分を受け入れられてる

んならそれでいいじゃねえか、必要以上にお前が気に病むことはねえよ」

忸怩としない思いを胸に抱えていた丹に過剰に思いつめるなと諭すように来栖が大きな手で軽く丹の肩を叩くと、彼の些細な気遣いで丹は気が晴れたような気がした。

「悠久くんはウツセミの自分をちゃんと認めて暮らしているみたいだし、わたしが自分の意見を押し付けるのはよくないよね」

「…ところで丹、そのハルヒサってのはどんな奴なんだ？」

「見た目はさつきも話した通り、わたしたちよりも一つか二つ下かな。ほっそりとした体つきをした女の子みたいに優しい顔をしたひとだよ」

人間でなくなったことを嘆いた自分の感覚を強要することが必ずしも正しいことではないと丹が考えを改め直すと、来栖は視線を脇に泳がせて関心がなさそうに振舞いながら悠久の風体を丹に訊ねる。

丹は急に来栖が悠久に関心を示したことを疑問に感じつつ、長身で頑健な体躯に彫りの深い強面をした来栖とは対照的な、悠久の繊細で優美な容貌の説明をした。

「随分そいつのことを気にかけていたけど、もしかして丹はそういうなよなよした男が好みなのか？」

「…好みって訳じゃないけど、すごく綺麗な顔をして男の子だと思うよ。女の子の服を着せればわたしよりも可愛いかもしれない」

来栖は丹から顔を背けたまま悠久が彼女の異性の好みのタイプなのかと訊ねると、恋愛関係の話題に免疫の薄い丹は恥ずかしそうに俯く。丹は小声で悠久の容姿が特別好みではないが、彼の美しさを賞賛する。

「そんなことあるか！」

来栖はまだ夢うつつの周囲の住民たちの目を覚ますような大声で、女装した悠久が丹よりも女性らしいという丹の発言を否定する。

「どうしたのクーくん、そんなに大きな声を出して？」

「別に：ハルヒサつてのがどんなに女みてえな顔をしてても、女にあんたよりも可愛いってことはないだろうと思っただけだ」

「そういつてもらうのは悪い気しないけどあんな声で言わなくてもいいのに。それにねクーくん、悠久くんは本当に男の子にしては勿体ないくらい可愛い顔をしているんだよ。わたしもあんな風に柔らかな顔付きだったらよかったのになあ……」

「あ、あんたは今のままで充分可愛いし魅力的だ！」

丹は女の自分よりも可愛らしい振る舞いの出来る悠久を羨ましがると、来栖は再び大声を出して丹の容姿を褒め称える。来栖からそんなことを言われるのは初めてだったし、他人から自分の容姿を褒められたことはほとんどないので、丹はびっくりした顔で彼に目を向けるが、すぐに赤面して顔を逸らす。

「お世辞はいいよ。自分でもお洒落に気を使っていないのは分かっているし、性格だって愛想がなくて鈍臭いし」

「どうしていつもそうやって自分を卑下する、自分のことを見くびるのは斎さんや紅子さんにも失礼だぞ？」

「クーくん……」

丹は自分の容貌や性格に負い目を感じて卑屈な態度をするが、来栖は彼女が自分のことを貶すことで産みの親を侮辱していることにもなるのだと諭す。珍しく来栖が励ましてくるのを聞くと、丹は潤んだ瞳で彼のことを見上げた。来栖は口をへの字に曲げている仏頂面を和らげて、丹に優しい視線を向けた。

「ちよつと2人とも、朝帰りだけじゃなくて家の前でもノ口けるなんて少しは人目を憚りなさいよ！」

「葵?!」

いつの間にか丹の家の前までやってきた来栖と丹は、家の門の内側で仁王立ちをした人物の甲高い声に仰天する。丹に名前を呼ばれた彼女の妹で中学生の葵は、目の下に隈を浮かばせて異様な雰囲気漂わせながら姉と来栖に目を向けてきた。

「よう葵、今朝はやけに早起きじゃねえか？」

「姉さんを朝まで連れ回したのが都合が悪いからって、言い逃れをしようとするのは男らしくないんじゃないかしらクーくん？」

「言い逃れなんてしねえよ、ちゃんと斎さんの許可をもらって出かけてんだから」

葵は狡猾そうに口の端を吊り上げるが、来栖は鬱陶しそうな顔で彼女を一瞥すると、門の前に立つ葵を押し退けて家の中に入ろうとする。

「あの堅物の父さんが姉さんが男と一晩中遊び回るのを認めるなんて絶対おかしいわ、あんた父さんの弱味でも握っているの？」

「お前らの親父さんは高校生に弱味を握られるような脇の甘い人じゃねえだろ？ 朝っぱらからつまらねえ言いがかりつけてくるんじゃないよ」

「葵、わたしとクーくんはずっと一緒に遊んでいた訳じゃないよ。たまたま帰りが一緒になっただけで、それまでは別々だったんだから」

「じゃあ昨日の夜どこで何をしてたか答えなさいよ。納得出来る理由を教えてくれないんだから、アタシが邪推するのは無理もないじゃない？」

「それは……」

厳格で実直な父親が、娘が男と夜通し遊ぶことを認めるはずがないと葵は主張するものの、来栖と丹は彼女の訴えを聞き流して昨晩の出来事に関してお茶を濁そうとする。しかし葵は何度もその質問をはぐらかされていることで鬱積を募らせており、年上の2人にも強気で接して簡単に引き下らない。強健的な妹の姿勢に丹は気圧されてしまう。

「答えられないってことはまともな理由で夜歩きしていた訳じゃないってことでしょう。大方母さんが急に家に戻ってきたことに何か

関係していることが理由なんでしょうけど、姉さんと父さんをどうやって誑かしている白状しなさい来栖託人！」

丹を言い負かした勢いに乗って、今度は来栖を葵は問責する。自分の聡明さに感服したかと得意気な顔で葵は来栖を見つめていたが、その横っ面に平手打ちが飛んできて小気味いい音が暁の街にこだました。

「クーくんがわたしたちを脅迫するような人じゃないことは葵にも分かっているでしょう、それなのにどうしてクーくんを悪者扱いするの？　クーくんに謝りなさい」

丹に頬を打たれたことを信じられなそうな顔を葵は浮かべて姉に視線を向けるが、丹は厳しい顔で来栖を侮辱したことを謝罪するよう姉に言い渡す。

「……ろくでもない男を家に連れ込んだと思ったらそいつにべったり依存しちゃってさ。おまけに家族の心配をした妹のことをはたかような人が、家族はいつも仲良くななんていうなんて笑わせないでよ！」

葵は打たれた頬に手を当てて、理不尽に思える仕打ちを受けたことに激昂する。頬に平手打ちを見舞われた痛みよりも、これまでどれだけ生意気な口を聞いたり我儘を言ったりしても手をあげることのなかった姉が自分を叩いたことのショックが大きく、丹に裏切られたような気がして葵の目に涙が込み上げてきた。

「葵、何も知らないくせに分かったようなことを言わないで」

「……そっちが隠しているんだからアタシに分かる訳ないでしょう。姉さんのことを見損なったわ、心も体もあいつに弄ばれてボロボロ

になっちゃえばいいよ!」

葵が八つ当たりしてくると丹は低い声音で毅然とした態度で、怒りで見境をなくしている妹に接するが、葵は澄ました姉の態度を見て余計に腹が立ち、その苛立ちを姉の体を突き飛ばすことで発散する。

不意を突かれた丹は体の均衡を失って大きくよろけて背中から転倒する。運の悪いことに丹は葵に突き飛ばされた先は道路と家の敷地の段差になっていて、丹はバランスを崩したまま勢いよく地面に倒れこむ。

「姉さん?!」

丹が満足に受身も取れずに路上に転び頭を強打したのを見て葵は我に返ると、路上に倒れ伏している姉の所に駆け寄る。

「大丈夫、なんともないわ」

「でも姉さん、ほっぺすりむいている、よ……?!」

葵が心配そうな声を発して駆け寄ってくると、丹はすぐに状態を起こして無事なことを訴える。頭を打ったものの丹の意識がはつきりしていることに葵は安心するが、姉の滑らかな頬に擦り傷が出来ているのを見ると今度は罪悪感を覚える。

しかし丹の頬の傷が急速に薄れていき、しばらくするとそれが幻のように消え失せてしまったことを目の当たりにして、葵はその異様な光景にあつと息を呑む。

「そんなに心配しないで葵、もう大丈夫だから」

「触らないで！」

幽霊でも見たように顔を真っ青にしている妹を落ち着かせようと丹は手を伸ばすが、葵は自分に伸びてきた姉の手を払い除けると後ろに飛び退いて距離を取る。

「葵……？！」

「アンタ、本当にアタシの姉さん？」

「何を言っているの、正真正銘わたしは葵の……」

「ウソよ、アンタが姉さんなら顔の傷がそんなに早く治るはずないじゃない！」

葵が自分を化け物を見るような顔でそう叫んだのを聞いて、丹は知られたくない事実気付かれてしまった動揺を露にし、反射的に傷が瞬く間に治癒した頬に手を伸ばす。

「葵、落ち着いて話を聞いて」

「イヤッ、姉さんのフリした化け物のくせに馴れ馴れしい口を利かないで！」

「葵、わたしは本物の切島丹だよ。確かに体は人間じゃなくて吸血鬼になっちゃっているけれど、心は人間だった時と変わらないままだよ」

葵はおぞましいものを見るような目でじりじりと後退していく。
妹に忌避感を露にされて丹は非常に取り乱してしまい、つい自分が
吸血鬼になってしまったことを彼女に明かしてしまう。

丹が吸血鬼になってしまったと聞いた葵も、隠し通してきた事実
を口走ってしまった丹自身も内心に大きな衝撃を受けたようで、互
いに皿のように目を丸くして視線を交錯させたまま二の句が継げな
い状態になってしまった。

「そんなことがある訳ないわ、だって姉さんは昼間普通に学校に通
っているじゃない？」

「わたしは陽の光にもある程度耐えられる体質なの、だから人間だ
った時と同じように暮らせたんだけど……」

「吸血鬼に成り下がったくせに家に戻ってきた理由は何、アタシや
父さんも怪物にするつもりだったの？」

「違うよ、わたしはただ今まで通りみんなと一緒に暮らしたかった
だけ。それに自分が吸血鬼になったからこそ、葵や父さんには吸血
鬼になってほしくない」

常識で考えれば姉が吸血鬼になったという自白など冗談にしか思
えないだろうが、人間離れた回復力を見せ付けられてはその話に
丹は信憑性を感じてしまう。吸血鬼と化した姉が家族の前に戻っ
てきた理由を自分たちも仲間に引き込むつもりだと葵は推測するが、
丹は首を横に振ってその考えを否定する。そして自分が吸血鬼にな
って人間でなくなった喪失感を抱えているからこそ、家族には人間
のままでいてほしいと訴えた。

「じゃあクーくんは何なのよ、まさかあいつが姉さんを吸血鬼に……」

「それは違うぜ葵、むしろ俺が丹の餌みたいなもんだ」

切島姉妹の会話に来栖は割り込んで、葵が思い違いをしている自分と丹の関係を訂正した。

「なんでよりもよってアンタみたいな奴を姉さんは餌にしたのよ？　こんな粗暴な奴じゃなくてもっと優しくそうなイケメンなんていくらでもいるじゃない」

「クーくんに出会わなかったら、わたしはこうして葵たちの所に戻ってこれなかった。他の人から血をもらうことなんて考えられないわ」

「何もクーくんに拘る必要はないでしょう、血を飲ませてくれる人間がいればいいんだろうから。何で姉さんはそんなにこいつに入れ込む訳？」

「さっき言った通りだよ。クーくんがいなければ、クーくんに妖気が漏れ出す傷口を塞いでもらわなかったらわたしはこの家に帰れなかった。だからクーくんはわたしにとって恩人なの」

丹は地面から起き上がると真っ直ぐに葵の顔を見つめる。吸血鬼になってしまったと判明した姉が、人間だった時と全く同じ曇りのない瞳で自分を見据えてくるのを見て、姉の内面はその身が魔性の存在になっても変わっていないと葵は感じる。

「……つまりクーくんが余計なことをしたせいで、化け物になった姉

さんが家に戻ってきちゃった訳ね」

「おい葵、丹に向かってそんな言い方はないだろう？」

「うるさいわね、身内が吸血鬼になったのを聞かされて喜ぶ奴なんかないわよ！ アンタがお節介を焼かなきゃ、アタシはこんなことを知らずに済んだのに！」

丹が人間だった時と変わらぬ人格を保って自宅に帰ってきたと分かったのに、葵の口からこぼれてきたのは本心とは逆の言葉だった。どうしてそんな暴言を吐いてしまったのだろうと葵は自分の失言を悔やむが、部外者のくせに来栖が身内のような口を利いたのを受けて、彼と自分に秘密を明かしてくれなかった姉への逆恨みの気持ちが強まってしまう。

葵が来栖と丹に言い放ったことの全ては嘘ではなかったが、本当に彼らに伝えたい気持ちはそんなものではなかった。だが自分の軽率な一言が来栖と姉の心を傷つけ、彼らとの間に埋められない軋轢が生じてしまったと葵は感じると、身を翻して罪の意識から逃れるように走り出す。

「葵待つて！」

脱兎の如く駆け出した妹を丹は呼び止めて、彼女を追いかけるようにとするが数歩走ったところで足がもつれてしまい再び転びそうになる。頬の負傷を直したことで多くの妖気を使ってしまった、丹の体に激しい運動ができるだけの妖気が残っていないためだった。

「大丈夫か丹」

家の敷地から表に駆け出してきた来栖は大きく傾いだ丹の体を抱き留めて支える。

「クーくん、わたしよりも葵のことをお願い」

「…わかった、丹は家で待機してろ」

できれば喪失した精気を彼の血液を摂取することで補充したかったが、それよりも受け容れがたい事実を知らされて狼狽している妹の身を案じて、丹は来栖に妹の搜索を頼む。来栖は丹に真正面から見つめられると力強く頷き返し、通りの角を左折した葵の背中を追って走り出した。

「…やっぱりわたしの感情をみんなに押し付けてただけなのかな、吸血鬼になったわたしなんか家にいないほうが葵のためだったのかもしれない」

丹は自宅の敷地の周囲を囲むフェンスにもたれかかりながら、悠久に対してそうだったように、吸血鬼になってしまった自分でも同居していた方が妹のためと思い込んで、自分のエゴを押し通そうとしただけかもしれないと自嘲する。

「ウツセミはウワバミとの間で決められたルール通り、おとなしく紫水小路に閉じこもっているべきだったんだよね。それなのに我儘を言って人間の中に溶け込もうとしたから、こんなことになったやつなんだ……」

項垂れた丹の頬に堰を切って溢れ出た涙が一筋伝っていく。転んだ拍子についた傷は一瞬で消えたのに、乾いた涙の跡はくつきりと残っているのが丹にとって残酷なほど皮肉なことだった。

第5回、馴れ合いの黄昏了

第6回、樂園からの使者

東の空が白み始め、御門市の四方を取り囲む山並みの稜線がはっきりと浮かび上がってくる。切島葵は暁の街を闇雲に走り続けた。朝日が昇り始め次第に視界は明るくなりだしていたのに、葵は真っ暗で出口の見えないトンネルの中をひた走っているような気がしていた。

通常ならこの時期、葵は陽が昇る前に外出するどころか起床すらしていない。だが今朝はほぼ徹夜で姉と居候の帰りを待ち続け、夜明け前に帰宅していた2人を家の前でこれまで何をしてきたのかを詰問した。

葵の姉と居候の少年が関係を持っていることはこの二ヶ月の共同生活の中で葵の目にも明らかだったが、躰に厳しく融通の利かない彼女たちの父親は何故か姉と居候が夜遊びをしていることを黙認していた。そして葵は姉と父それに居候の少年が自分に何かを隠していることに薄々勘付いていた。

葵は姉たちが不可解な行動をする理由を究明しようとしたが、彼女たちは葵のことを軽んじてまともに話を聞こうとせず、その態度に立腹した葵が姉について当り散らしてしまった時にその出来事は起きた。

葵に突き飛ばされて転倒し彼女の姉は頬を擦り剥いたが、その傷は瞬く間に治癒してしまつて痕跡がなくなつてしまったのだ。葵がその怪奇現象を目の当たりにすると、彼女の姉は自分が吸血鬼になつてしまったことを暴露した。

表面的にはおざなりに扱っていても実際は姉を誰よりも信頼していた葵は、姉が人の生き血を啜って命を繋ぐ化け物に変貌してしまったという証拠を目撃してしまったショックで家を飛び出してきたのだった。

吸血鬼の姉や彼女に血液を供給している居候が追ってこられないように、葵は住宅地の路地をジグザグに駆け抜けていく。睡眠不足の上に自宅から延々と全力疾走をしてきた疲れがピークに達して、葵は鉄道の線路を跨ぐ幹線道路の陸橋の橋桁の陰に身を潜めて足を止めた。

「なんで姉さんが吸血鬼にならなきゃいけないのよ……トロくて垢抜けなくて、でもお人よしで一緒にいると安心できる姉さんがどうして……？」

葵は息を弾ませながら、本当は深い愛情を感じていた姉が吸血鬼になってしまったことを不条理に感じる。母親代わりに自分の世話を焼いてくれて、不甲斐ない面も多々あっても父親も自分もなんだかんだ言いつつ頼りにしていた姉が人間でなくなってしまったことの悲しみに耐えられず、葵はその場に膝を抱えて蹲り声を殺して泣く。

「……これからどうしよう？　姉さんいいえ、姉さんの姿をしたあの化け物がいる家に父さんを置き去りにはできないし、アレは母さんの所にも出入りしているらしいし」

葵は愛する姉を失ってしまった悲嘆にくれてしばらく涙に打ち震えていたが、姉の姿をした魔物の下から両親が未だに逃げられていないことを思い両親の身を案じる。涙を拭って顔を上げた葵は、淡々とした口調で今後の身の振り様を考え始めた。

部屋着のまま逃げ出してしまった上、財布を置いてきてしまい無一文であることに加えて、連絡手段である携帯電話も持っていない。友人の下に匿ってもらうことも考えたが、それではすぐに姉の姿をした吸血鬼に見つかってしまうだろうし、最悪の場合友人を吸血鬼の毒牙に曝しかねない。

しかし警察に駆け込んだところで、自宅に姉の姿をした吸血鬼が住み着いているから退治して欲しいといっても真面目に取り合ってもらえないだろう。間違いなく警官たちは葵の精神状態を憂慮するだろうし、下手をすれば身柄を拘束されて吸血鬼のいる自宅に連れ戻されかねない。そうすれば秘密を知ってしまった自分を姉の姿をした吸血鬼は生かしてはおかないだろう。

「家に乗っ取った吸血鬼をやっつけてほしいなんてお願い、誰にすればいいのよ？」

「馬鹿ね、そういう時こそ教会に助けを求めるべきでしょう？」

葵が荒唐無稽な自分の悩みを聞いてくれるものなどこの世界に存在するのかと途方に暮れていると、鈴の音がなるような美しい声が聞こえてくる。葵が声のした方を反射的に振り向くと、朝日を後光のように背にして1人の人物が佇んでいた。

「あなたは…安倍先輩?!」

眩しい朝日に目を細めながら葵がその人物の顔を見つめると、それが彼女の通っている芳志社女学院^{ほうししゃ}の高等部に在籍している有名人であることに気付いた。

葵は芳志社女学院の生徒の多くから憧憬と羨望の眼差しを向けられている安倍真理亜が自分の前に姿を現したことに驚きつつ、真理亜が縦ロールの髪に縁取られた美貌に優しげな微笑を浮かべるのを地上に光臨した女神を見るような目で見つめていた。

「朝早くからこんな所で泣いているなんてよほど辛い事があったのね、よかったらお話を聞かせてもらえないかしら？」

真理亜は子どもをあやすような優しい声で語りかけながら、葵の傍らに屈んでくる。真理亜の利発そうな大きな目を向けられると、葵は自分の抱えている問題の全てを彼女に打ち明けなければならぬというような気になった。

「安倍先輩、今からアタシが話すこと笑わないで聞いてくれますか？」

「もちろんよ、私に悩みを話すことで貴女の苦しみが癒されるのなら幾らでもお聞きしますわ」

葵が不安げな顔で訊ねると真理亜はにっこりと微笑み返す。真理亜の美しい微笑みにすっかり魅了されてしまった葵は、夏休み明けから起こっている家族の不審な言動と先ほど彼女が目撃した姉の身に起こった怪異、そして姉が吸血鬼になってしまったことを包み隠さず真理亜に打ち明けた。

「それは大変でしたわね葵さん…でももう大丈夫ですわ、貴女のこととは私が責任を持ってお守りいたしますから」

「いえ、安倍先輩にご迷惑をおかけする訳にはいきません。話を聞いてくれたことだけでも充分感謝しています」

真理亜は同情するような眼差しで苦難を体験した葵のことを労わるが、葵は相談に乗ってくれただけでも充分なのに、これ以上天上の存在である真理亜の手を煩わせる訳には行かないと恐縮する。

「遠慮なさらなくてよろしくてよ葵さん、だって私は貴女を保護するためにここに参ったのですから」

「えっ、どういうことですか？」

「葵さん、実をいうとね私たちはしばらく前から貴女のご自宅を監視させていたいてましたの。貴女のお宅に吸血鬼が潜伏しているんじゃないかと目星をつけてね」

「アタシたちの家を監視していた…安倍先輩がどうしてそんなことを？」

「私はね、人を仇なす吸血鬼を殲滅し、平和な世の中を作るために活動している組織に所属しているの。そして組織の情報網が貴女のお宅に吸血鬼が出入りしているかもしれないという情報を察知し、その真偽を確かめるために監視をつけていた。なかなか吸血鬼は尻尾を出してくれなかったけれど、今朝貴女の目撃したことをお聞きしたお陰で誰が吸血鬼なのかを特定できましたわ」

真理亜が自分を保護するために接触してきたと聞いて葵がその理由を問うと、真理亜は高尚な使命のために自分と所属している組織は、葵が気付くよりも先に吸血鬼の存在を察知していてその監視をしていたことを明かす。

「安倍先輩たちが捜していた吸血鬼が、私の姉…だった人ですか」

「葵さん、残念だけど今ご自宅にいるのは貴女のお姉様の丹さん^{まい}ではないわ。丹さんのものだったものの抜け殻、人を襲って生き血を奪う化け物よ」

「化け物…そうですね、血を吸うために人を襲うなんて、人間のことじゃないですね……」

何度も自分の脳裏に思い浮かんでいたことだったのに、尊敬している真理亜だとしても他人に自分の姉だったものを化け物呼ばわりされるのを葵は不快に感じる。しかし真理亜の言っていることは事実であり、葵もそれに首肯する。だが悩みを真理亜に打ち明けて軽くなっただけの胸が再び重くなりだしていた。

「ええ、吸血鬼は1匹残らず始末しなければならぬ。放っておいてはあの化け物の餌食になる犠牲者が増えるばかりですわ。葵さん、この街に住む人たちの平穏な日々のため、そして貴女のお姉様だった丹さんの魂を解放するために私たちに協力してくださいませんか？」

「安倍先輩やめてください、みんなが懂れている先輩がアタシに頭を下げるなんて……」

「ものを頼むのに礼儀を尽くすのは人として当然のことですわ」

真理亜は両膝を地面につけてしゃがんでいる葵よりも更に低い位置に頭を下げる。葵は通学している学園中の生徒の憧れの的が、年齢だけでなく品格も遥かに劣っている自分に頭を下げてくることに戸惑うが、真理亜は自分の些細なプライドへの執着などまるで感じていないように、組織の任務遂行のために葵の助力を請う。

「…分かりました、この街の人の安全と姉の冥福のために喜んで先輩の組織に協力させてもらいます」

しばしの逡巡の後、葵は真理亜の所蔵する組織への協力を承諾する。姉の姿をしたあの怪物をこれ以上野放しにする気にはなれなかったのは、もちろん吸血鬼による被害者を増やしたくないという思いもあったが、それ以上にあの吸血鬼が姉の姿で暴れ回れることが我慢ならなかったからだ。

「ご協力感謝いたしますわ、葵さん。世のため人のために、一刻も早く丹さんの姿をしたあの化け物とその同胞どもを共に駆逐しましょう」

「…はい」

上体を起こした真理亜は葵に握手を求めて手を差し出してくる。

葵は真理亜の透き通るように白く、労働を知らないもののように繊細な手を恐る恐る握り返した。葵が握り締めた真理亜の手の感触は同じ人間の肌とは思えないくらい滑らかで、少し冷たく汚れをしない新雪に触れたようだった。

* * *

葵が脱走した彼女の自宅前、道の両側から戻ってきた父親の斎いつぎと居候の来栖を自宅で待機していた葵の姉でウツセミと称する吸血鬼の丹が出迎える。

「お父さん、クーくん、葵は見つかった？」

「いや、こつちでは見つからなかった。来栖お前の方は？」

「すみません、あいつが最初に逃げ出した方なのに見つけられませんでした」

「葵はすばしつこい上に子どもの頃からずっとこの辺で暮らしているからな、土地勘のないお前を出し抜くことなんて造作もないだろう」

葵のことを発見できたかと丹に訊ねられるが、斎からも来栖からも芳しい返事はなかった。来栖は彼女を見つけられる確率は自分の方が高いのに失敗したことを謝罪するが、斎は彼のことを責めなかった。

「丹がウツセミになって約2ヶ月、そろそろ葵も俺たちの行動を不審に感じ始める頃だとは思っていたが、まさかこんな形でばれてしまうとはな……」

斎は自分たちが隠し通してきた事実を意外な形で葵に知られてしまった失態に渋面を浮かべる。

「わたし、もう1回この辺り捜してくる！」

「止めとけよ、お前でも朝日が燦々と照りつけている中を歩き回るのは危険すぎる」

「でも葵に何かあったら……」

「落ち着け、夜中ならともかく朝方に悪さをする奴はそういないだろう。人的なトラブルよりは交通事故に巻き込まれる方が気がかり

だ。俺と来栖でもう1回近所を捜してくるから、丹は何か連絡があった時のために家に残っていてくれ」

「…わかった」

葵のことを心配していてもたってもいられなくなった丹は、妹のことを捜しに出かけようとする。しかし通常の吸血鬼よりはかなり日光への耐性があるとはいえ、吸血鬼の丹が日中出歩くことの負担は軽視できず、葵よりも先に丹が参ってしまうことを案じて、来栖は丹の腕を掴んで引き留める。

来栖と斎の2人に説得されると、丹は渋々葵の搜索に自分が出ることを諦めた。

「…たくあのガキは懲りずにまた家出しやがって…自分がいなくなってみんながどれだけ心配するのかまだ分からないのか？」

「わたしは葵の気持ち、なんとなく分かるな。だってお母さんがウツセミになったと知った時、わたしも気が動転しそうだったから」

「俺もそうだった、愛する妻と娘が吸血鬼になったなんて信じたくなかった」

来栖は葵の足取りが掴めないことへの苛立ちと不安を紛らわせるように悪態をつくが、それを聞いた丹と斎が口々に葵が現実を受け容れられず失踪したくなった気持ちに理解を示す発言をする。

「…俺だって自分の家族が人間じゃなくなったと聞いたらびっくりしますよ。でもだからって頭ごなしに存在を否定した挙句、自分から逃げ出したってのは納得いかないっす。家族がウツセミになって

も、理解しあえることは斎さんも丹もよく分かってるでしょう?」

「ああ、ウツセミ相手ならちよつと変わった問題を抱えるひととして接するくらいの気持ちで充分だ」

「そうつすよ、理性の吹っ飛んで姿形も人から離れたナレノハテならともかく、自我と姿を維持したウツセミなら分かり合えますよ。なあ丹?」

「本当にそうかな、わたしたちウツセミと人間の間にはどうしても埋められない隔たりがあるんじゃない?」

来栖も丹や斎の発言に同意を示した上で、意思疎通が可能な人とウツセミなら相互理解して共生も可能だと訴える。斎は来栖の言葉に頷き返したが、丹は同意を求められても首を縦に振るうとしなかった。

「何言つてんだよ丹、お前が人とウツセミが共存できるいい例じゃないか?」

「今はそんなに問題もなく過ごせているけれど、これからもずっとそうだとは思えない。だってクーくんやカンナちゃんは今から大人になって、結婚したり子どもが生まれたりしていくけれど、わたしはずっとこのまま変わらない。ううん、これから成長することも年老いることもなく延々と誰かの血を嚼って生き永らえていくの。他人を犠牲にする前提で長生きして、昔友だちだった人はみんな自分よりも先にいなくなってしまう、結局現世に何も残すこともできない苦しみが人間のクーくんたちには分かる?」

来栖は丹こそ人間とウツセミの世界をバランスよく行き来してい

る存在ではないかと示唆するが、丹は当面は問題の表面化が防げて
もいずれ周囲の人間が成長していくにつれて自分が異形の存在であ
ることが顕在化してしまうことを述べる。

更に人間よりも遥かに長い時を永久に変わらない姿で過ごすため
に、人として生きることでも死ぬこともできず、子孫はおろか墓標さ
え現世に残せないまま人知れず消えていくのはとても寂しいことだ
と主張した。吸血鬼と関係は持っているものの、自分は人間の肉体
のままである来栖と斎は丹の悲壮な訴えに口を閉ざしてしまう。

「…どれだけ深い仲になっても人間とウツセミは別の存在だから、
どうしても違ってしまう所はあるだろう。その違いに互いが苦しむ
こともきつとある。でもな、今はそんな先の心配をするよりも先に
いなくなつた葵のことを見つけるのが何よりも大切じゃないのか？」

斎は長女の意見を聞きいれた上で、現状の最優先事項は将来訪れ
るかもしれない人間とウツセミの擦れ違いを杞憂することではなく、
失踪した次女の保護だと訴えた。斎の一言で沈んだ顔をしていた来
栖と丹の表情に覇気が戻ってくる。

「そうっすね、先のことはその時になつて考えりゃいい。将来の不
安に怯えて今を無駄にすることはできないっすよ」

「ごめんなさい、余計なことでお父さんとクーくんの気を悪くしち
やつて。今はそんな心配よりも葵のことが一番大事なんだから」

「そうだ、あのお転婆娘をとつちめてやるのが何よりも先決だ」

斎の呼びかけに来栖と丹が応じると、斎は家長の威厳をもってそ
の場を締めた。家族とその同居人が彼女の心を心から心配してい

ることを、親兄弟のことを案じて家を飛び出した葵は知らない。吸血鬼と人間の隔たりほど顕著なものではなくても、お互いに相手のことを想っているために発生した擦れ違いだった。

しかし吸血鬼と化した姉を拒絶した葵とは違い、切島家に残っている3人は例え相手が別の種族であつても理解できる可能性を信じていた。

* * *

葵は姉の姿をした吸血鬼の始末のために真理亜に助力することを申し出た後、真理亜の呼び寄せたリムジンに乗せられた彼女の邸宅に招かれた。切島家は裕福とは言い難いもののそれなりの生活水準にあるつもりだったが、真理亜の自宅である豪邸を見せ付けられると、いくつもの企業を経営する一族である安倍家との財力の違いは天地ほど隔たつていると思い知らされる。

「客間を用意させたからゆっくりされるといいわ」

「は、はい……」

真理亜は客分として自分をもてなしてくれるようだったが、葵は屋敷の中を埋め尽くす高価な調度品に囲まれている環境に萎縮してしまっていた。案内役の使用人の後に続いて緊張した足取りで用意してもらつて部屋に向かう葵の背中を、真理亜は同じ組織に属する少年と共に見送る。

「真理亜さん、あんな普通の女の子が吸血鬼の討伐の役に立つんですか？」

「勿論よ、今回標的にしている吸血鬼だけでなく奴らと手を結んでいる男を呼び寄せる格好の餌になりますわ」

真理亜たちが所属している吸血鬼を駆逐することを活動目的としている組織ハライソの東京にある本部から御門に派遣されてきた少年、天野聖が訝しげな顔でしてきた問いかけに対し、真理亜は冷笑を浮かべて無力な少女でしかない葵の利用価値を彼に告げる。

「あなたは本当に恐ろしい人ですよ、味方であることにほっとしています」

「吸血鬼を一蹴する使徒の貴方にそうおっしゃっていただけるなんて光栄ですわ」

聖は真理亜の狡猾さに舌を巻くが、彼女は澄ました顔で彼の皮肉に応えた。

「それで真理亜さん、吸血鬼と聖火を使う協力者の人間をどうやって誘き出すんですか？」

「あの子の肉親だった吸血鬼の女を先に呼び出しましょう。聖火を使うあの男と一緒に来られると面倒なことになりそうだから、妹の命が惜しければ独りで来るようにあの女には指示しますわ」

「いくら聖火を使える奴とは言え仲間は吸血鬼1匹ですよ、わざわざそこまでしなくてもいいんじゃないですか？」

「聖さん、ことを仕損じる訳にはいきませんのよ。おまけにあの男は衛兵と使徒を合わせて30人を死傷させた吸血鬼に苦戦したとは言え倒している、いくら貴方が使途の中でも上位に位置する実力者

でもまともにやりあうのは危険ですわ。だからこそ戦いを有利に進めるために、あの男が愛着を示している吸血鬼の女を先に片付けておくことで、彼を精神的に痛めつけておく必要がありますわ」

「そこまでお考えでしたか。まあ僕は闘いに愉悦を覚えるタイプじゃありませんし、楽な仕事になるならそれは歓迎しますよ」

聖が葵の利用法を訊ねると、真理亜は念入りに1人ずつ、しかも戦闘力が低いと思われる丹を先に呼び寄せて始末することで、来栖に精神的な揺さぶりをかけておいてコンディションを悪くさせた上で聖と戦闘させることを告げる。

壁にかけられたレリーフに彫られた女神のように美しい容姿をしておりながら、その奥に悪魔的な姦計を張り巡らせている真理亜の周到さに聖は脱帽した。

「ところで聖さん、御門に巢食う吸血鬼どもを掃討するために近々援軍が寄越されるとお聞きしておりますけど、その人選について何かご存知ないかしら？」

「増援のメンバーが誰なのか詳しいことは僕にも分かりませんが、作戦を指揮するために天連^{てんれん}さんが来てくれるらしいですよ」

「まあ、当代随一の聖火の使い手と名高いあの方にお越しいただけるなんて、本部も掃討作戦に本腰を入れていらっしやるのね」

丹と来栖を始末するための作戦案を説明し終わると、真理亜は聖に別の話題を訊ねる。聖の口から語られた作戦指揮官として派遣されてくる男の名前を聞いて、真理亜は嬉しい驚きを顔に浮かべた。

「吸血鬼と癒着している聖火の使い手、来栖って言いましたっけ？
そいつの一族が江戸時代から吸血鬼の始末を請け負っているって
いう触れ込みのおかげでハライソも御門には大々的な作戦を展開で
きませんでしたけど、真理亜さんの調査報告のおかげでようやく重
い腰を上げて御門への介入が決まりましたからね。この街から吸血
鬼を一掃するために、本部のお偉方も手抜きはしませんよ」

「聖火の一撃で10匹の吸血鬼を消し飛ばすと噂されるあの方に作
戦に参加していただければ、まさに百人力ですわ」

「真理亜さん、天連さんの聖火の威力で消滅する吸血鬼の数は10
匹どころじゃないですよ。下等な吸血鬼ならその倍の数は一撃で吹
き飛ばします」

「伴^{ばん}天連、お名前からして使徒に相応しい方ね」

「はい、僕も含めて使徒はみんな天連さんのことを目標にしています
から」

御門の街と接点を持つ異空間、紫水小路に隠匿しているウツセミ
を掃討するために東京から遣わされる鬼神の如き力の持ち主の到来
を、真理亜と聖は心待ちにする。

来栖と丹、それに紫水小路のウツセミたちを打倒するために敷か
れた包囲網は徐々に狭められており、襲撃のための足掛かりとして
葵の身柄を抑えたハライソの尖兵が彼らに襲いかかるうとしていた。

* * *

来栖と斎が付近の搜索に当たり、丹が自宅に残されていた葵の携

携帯電話のアドレスを元に妹の所在を確かめる電話を続けたものの、葵の行方は杳として知れない。次第に深まりつつある秋の夕暮れは早く、来栖と斎が何の手懸かりも掴めずに自宅に戻ってきた時には太陽が西に沈みかけていた。

「丹、警察から連絡は？」

既に搜索願を出しておいた警察から何か連絡があったかという父親の問いに対し、丹は何の音沙汰もなかったと首を横に振った。

「くそ…本当に警察は真面目に捜査しているのか？」

「オマワリさんの数も限られてますし、全員が人助けをするっていう使命感が強い訳じゃないですよ。しょっちゅう濡れ衣を着せられてますから俺はそれをよく知ってます」

「お前の場合は自業自得だろう、くだらない冗談を言っている暇があるならもう一遍葵のことを探しに……」

「静かにして！」

警察の怠慢を疑っている斎の気を落ち着かせようと来栖は軽口を利くが、それは火に油を注ぐ結果になってしまった。しかし斎が来栖に罵声を浴びせようとすると、電話が着信音を鳴らすのを聞いて丹が遮る。来栖と斎は丹のいっになく鋭い叱責に吞まれて黙り込んでしまった。

「もしもし？」

『お前は切島丹か？』

「そうだけど…葵は、妹は無事なの？」

『心配するな、お前の妹のことは丁重に扱っている』

丹が受けた電話の相手は機械的に音声を変換していることが明らかな耳障りな声で話しかけてくる。ノイズが酷く電話をかけてきた相手の性別さえも特定できなかったが、丹が葵の安否を訊ねると、相手は彼女を不当に扱っていないことを伝えてくる。

「それで要求は何、身代金はいくら用意すればいいの？」

『金など要らない、欲しいのは人間の中に紛れている吸血鬼のお前の命だ』

「…それは何の冗談かしら？」

葵の身柄を拘束している相手は身代金には本当に興味がなさそうな様子で、彼女を救いたければ丹の命で贖うことを要求してくる。丹は何故自分が吸血鬼であることをこの誘拐犯は知っているのかと驚愕するが、自制心を發揮してどうにか平静を保つとしらを切り通そうとする。

『惚けるな、お前が吸血鬼である証拠を我々は既に入手している。妹を騙し続けていたことへのせめてもの罪滅ぼしに、自分の命を差し出すことで我々に捕らえられた妹を救ってみてはどうだ？』

「あなたは何者、何のために妹を捕まえたの？」

『闇に隠れて人の生き血を啜る、穢れた存在の貴様たちを滅ぼすた

めだ。いいか、化け物の貴様に少しでも妹だった娘へ人間的な情愛が残っているのなら、明日の午前6時に北平川の福音協会に独りで来い』

「待つて、わたしはまだ葵が無事なことを確かめて……」

『いいな、必ず独りで来るんだぞ。約束を違えたら貴様だけでなく妹の命もないと思え』

相手は葵の引渡し場所と時刻を告げると一方的に電話を切った。丹は葵の安否を確かめられなかったことを悔やみつ、受話器を本体に戻す。

「丹、誘拐犯はなんて言つてた？」

「……葵のことは預かっているけど酷い目には遭わせていないみたい。葵を引き渡すのに身代金の代わりに吸血鬼のわたしの命で払えって言つてた」

「なんだつて?!」

斎が電話の内容を硬い表情で訊ねると、丹はやりとりしたことを包み隠さずに父親と来栖に告げた。葵を助ける代わりに丹の命を奪うという相手の狂的な要求だけでなく、丹が吸血鬼である事を知っていることに来栖と斎は仰天する。

「冗談じゃない、娘を助ける代わりに別の娘の命を差し出すことなど認められるはずないだろう!」

「丹、電話をかけてきた奴は女か？」

「機械で声を変えていたし、雑音が酷くて話がすごく聞き取りづらかったから男の人だったのか女の人だったのかも分からない。でもわたしがウツセミってことを知っているだけじゃなくて、吸血鬼の存在を許さないみたいな話し方をしていた」

斎は1人の娘と引き換えに別の娘を救うことなど承知できず、理不尽な要求をしてきた誘拐犯に憤慨する。来栖は斎とは対照的に落ち着いた声で電話をかけてきた相手の性別を訊ねて来ると、丹は相手の性別すら判別できなかったことを謝罪するような顔で質問に答えた。

「もしかして葵の引き渡し場所に指定してきたのはどっかの教会か？」

「うん、明日の午前6時に北平川の福音協会にわたし独りで来るように言ってきた。でもどうして引き渡しの場所が教会だと分かったの？」

「この街にはウツセミやナレノハテがゴロゴロしてるけど、その存在を知っていても強い嫌悪感を持つている奴なんてごく限られている。この茶番にどの程度関わっているかは分からないけど、安倍さんが一枚咬んでいることは間違いないと思うぜ」

来栖がどうして電話の内容を聞いてもいないのに引き渡し場所に教会を指定してきたことを言い当てたのか丹が疑問に思う。来栖は丹が電話の主と交わした会話の内容から、彼女が初めてナレノハテに襲われた時の現場に居合わせた、吸血鬼を殲滅し人間が住みよい世界を作り出す理念を掲げている組織ハライソに所属する真理亜の影を仄めかした。

「安倍さんって、葵の通っている芳志社女学院のマドンナの……？」

「そうだ、狂信的な教えを盾にウツセミとナレノハテの区別なしに吸血鬼を弾圧しているハライソとかいう組織にいるあのお嬢様だよ」

丹が葵も懂れている学校の先輩である真理亜が妹の誘拐に関与しているとは信じられなかったが、来栖は真理亜がその立場を利用して葵の身柄を確保するのに貢献したことを疑っていない様子だった。

「その安倍とかいう子は確か御門でも指折りの名家の令嬢だろう、どうしてそんな子がわざわざ吸血鬼退治なんて危ない橋を渡っているんだ？」

「さあ、それは安倍さん本人に聞いてみないと分からないっすよ。とにかく教会を母体になっている組織が咬んでいる以上、警察の協力は期待できそうにないっすね」

「俺たち庶民は金持ちの慰み者じゃないんだぞ、こうなったらその安倍という子の家に直接直談判して……」

「俺たちが屋敷に詰め掛けたってまともに取り合ってもらえず、ゴツイ警備員に門前払いされるのが関の山っすよ」

「それじゃどうすればいいんだ、俺は葵を助け出すために丹が殺されるのを見過ごすしかないのか？」

社会的な後ろ盾があるからといってこんな暴挙が許されていいのかとやるせない思いに駆られた斎は、怒りで固めた拳を壁に叩きつける。

「そんなことないっすよ斎さん、葵も丹も助けられる方法はありません」

「相手は地元の名士の令嬢で警察の協力も得られないのにどうやって？」

自分の無力さにうちひしがれている斎に来栖は希望の光は未だ残っていると言い聞かせる。斎は半信半疑といった面持ちで来栖に視線を向けた。

「安倍さんは割のいい仕事を斡旋してくれるんでできるなら関係を悪くしたくない人ですけど、ウツセミ絡みのことに無関係な葵を巻き込んだ今回のやり方には俺も納得いきません。人間とウツセミの均衡を先祖代々数百年見守ってきたウワバミとして、人の縄張りに土足で踏み込むような真似をしたハライソの連中にはしっかりとケジメをつけてもらいます」

「まさかクーくん独りで安倍さんの所に殴りこみに行くの？」

「それじゃ俺たちウワバミが紫水小路のウツセミたちと親密に関わっている意味がないだろう？ 朱美さんや紅子さんはお前がいなくなったらきつと悲しむし、他のウツセミだって同胞がなぶり殺しにされるのを黙っていられるはずがねえ。だからお前の命を守るついでに葵の救出にも協力してもらうのさ」

丹が不安げな表情で来栖が独りで真理亜の所属する組織ハライソと一戦構えるのかと問うと、来栖は不敵な笑みを浮かべて首を横に振る。そして単なる吸血鬼の始末人としてではなく、人間の社会と彼らの社会の橋渡しをしてその秩序を保つ、ウツセミの天敵にして

守護者であるウワバミの権限を利用し、同胞とその家族の命を守るためにウツセミの助力を請うのだと述べた。

「他のウツセミの人に協力してもらえればすごく心強いけどどうやって連絡するの、わたしもクーくんも朱印符を持ってないから迎えに来てもらわない限り紫水小路には入れないんだよ？」

「大丈夫だ、俺たちが自由に出入りできなくても斎さんならできる」

ウツセミに加勢してもらえれば非常に心強かったが、来栖も丹も異空間にある紫水小路への出入りに必要な通行証である割り札、朱印符を携行しておらず、紫水小路に電話やメールが通じる訳でもなかった。なので協力を要請する連絡手段がなかった。

しかし丹が妙案があっても実現が叶いそうにないことに落胆しても、来栖は余裕のある態度を崩さなかった。来栖はその自信を裏打ちしてくれる斎のことを横目で一瞥する。

「なるほど紫水小路にいる紅子と契りを結んでいる俺なら、朱印符とかいうものがなくても自由にあそこに出入りできるな」

「そういうこと。ウツセミの紅子さんと契りを結んでいる斎さんたちなら互いの存在に惹かれあつて朱印符を使わなくても紫水小路に入れる。斎さん、紅子さんを通してでも源司さんに俺からの頼みを伝えてもらえますか？」

「任せておけ。可愛い娘たちの命がかかっているんだ、何としてでも援軍を寄越すように取り付けてやる」

「お願いします」

紫水小路にいるウツセミの族長に自分の協力要請を伝える役割を齋に来栖は頼むと、齋は二つ返事でその役割を了承した。来栖は下宿先の主で自分の親世代の齋が若輩者の自分の頼みを聞き入れてくれたことに感謝の意を込めて頭を下げる。

「さてと、じゃじゃ馬娘の救出作戦のアイディアが固まったから、齋さんには早速紫水小路に行ってもらって、俺はあの腹黒お嬢様の屋敷に探りを入れてこよう」

「クーくん、わたしは…わたしに何かできることはある？」

「お前は指定された通りに引き渡し場所の教会に行けばいいから、時間に遅れないように注意してここで待機している」

葵を救い出す手立てが決まったので、来栖と齋はそれぞれの役割を果たそうと家を出発しようとする。丹は自分にもできることがないかと訊ねると、来栖は指定された通りの行動をするだけでよいと言ってまた自宅待機を命じた。

「わたしも真理亜さんの家の偵察に行っちゃ駄目？」

「ああ駄目だ」

「どうして、やっぱりわたしはクーくんの足手まといになっちゃう？」

「違えよ、むしろお前が作戦の要だ。お前が相手の指示通りに動いてもらわなきゃ俺たちの目論見は破綻してしまう、だから俺たちが何事も企んでいないように見せかけるには、お前が家に残ってもら

わなきゃならねんだよ」

真理亜の屋敷の様子を覗いに行くことへの同行を拒まれて丹は軽く落ち込んだが、丹の行動次第で葵の救出の成否が左右されてしまふと来栖はその理由を説明した。

「そんな不安そうな顔すんなよ。ウワバミとして人間とウツセミの間に保たれている調和を取り戻してやるさ」

「…うん」

来栖が基本的に仏頂面をしている顔をかすかに緩めて笑いかけると、妙に安心した気持ちに丹はなつた。丹は来栖の言葉を信じ、妹に世話を焼かされたり喧嘩をしたりしても、穏やかで楽しい日々を取り戻せるのだと自分に言い聞かせて彼に頷き返した。

* * *

葵が家を飛び出して一晩空けた明朝、丹は誘拐犯からの指示通り、洛北区らくほくの北平川にある福音教会を訪れていた。昨晚家を出て行ったきり父親の斎も居候の来栖も家に戻ってこず、丹は独りで不安な夜を過ごしたが、何としても攫われた妹を取り戻すのだと気持ちを強く持つて朝が来るのをじつと待った。

教会の門は開場されていて、丹は自宅からここまで来るのに使用した自転車をその脇に留めると教会の建物に向かつていく。明治期に建立されたという西洋建築の教会の扉もやはり鍵が開いており、丹はその中へと足を踏み入れた。

教壇の上方にあるステンドクラスや開け放たれた両側の壁にある

窓ガラスから朝日が差し込んで、照明が点けられていなくても教会の屋内は十分な明るさだった。丹は吸血鬼に深刻な影響を与えるはずの陽光を気にせずに奥へと進んでいく。

「約束通り来たわよ、妹を返して頂戴！」

丹は妹を誘拐した人物に自分の来訪を大声で知らせる。丹の聲が天井の高い屋内に反響すると、奥の扉が開いて覆面を被った人物が2人、葵を従えて丹の前に姿を現した。

「こちらが指定した通り独りで来たようだな、化け物にしては感心だ」

「ちゃんとこつちはあなたたちの言ったことを守ったんだから、早く妹を返して！」

覆面を被った人物はどちらも背丈は170cmくらいで丹と同じくらいの高さであり、小柄な葵よりも頭1つ分大きい。それほど肉付きの良い体格をしてはいなかったが、覆面を被っているだけでなく、警察の強行突入部隊や自衛官が身に着けるような厚手のゆつたりとしたつくりの黒尽くめの衣装を着ているので性別ははっきりとは分からない。しかし少なくとも会話に応じてきた葵の前に立つ人物は男であるようだった。

「残念だがそれに応じることはできない」

「どうして、約束を破るつもり?!」

「何故なら彼女が生き血を啜る化け物である貴様の下に帰ることを望んでいないからだ、エイメン！」

葵の前方に立っていた人物は長椅子の並べられた床の中央に立つ丹の方に歩み取ってくると、葵の身柄の引き渡しに応じられない旨を告げてくる。誘拐犯が提示してきた条件を自分で反故にしようとする身勝手さに丹は抗議するが、近づいてきた黒尽くめの男は葵自身が帰宅を望んでいないことを告げると怒号をあげた。

黒尽くめの男の周囲が青白い光に包まれたと感じた次の瞬間、丹は視界が真っ白に染まり爆風を叩きつけられたような感覚を覚え、背中から床に転倒する。全身に電気が走ったように体の感覚が麻痺して床から起き上がることも出来なかったが、丹は黒尽くめの男が何をしたのかを察することは出来た。

「今のは剣気…どうしてあなたが？」

「剣気？ ああ、この街に昔からいるウワバミとかいう連中は聖火のことをそう呼んでるんだったね。直接聖火を身に受けた気分はどう、その身に刻まれた罪業を悔い改める気にもなった？」

「人の血を飲まなきゃ生きられない自分に罪がないとは思っていない…それよりも葵がわたしの所に戻りたくないっていうのはどういうこと？」

「言った通りの意味さ、化け物が住んでいる家に戻りたいなんて思う人間がいる訳ないだろう？ エイメン！」

「きゃああ！」

黒尽くめの男、ハライソが擁する凄腕のエクソシストである使徒に若くして列席している聖は無様に足元に転がっている吸血鬼に向

かつて再度聖火を打ち込んだ。聖なる青い光が瞬き、その光で身を痛めつけられた吸血鬼は苦しさのあまり床の上をのたうち回る。

「姉さん！」

「葵さん、あれはあなたのお姉様ではなくてその姿をしているだけの怪物よ」

姉の姿をした吸血鬼が悶え苦しんでいる姿を見ていたたまれず吸血鬼に駆け寄ろうとする葵のことを、覆面を被り男物の衣装を纏って正体を隠している真理亜が後ろから羽交い絞めにして聖の狩りの邪魔をされないようにする。

「違う、やっぱりあれはアタシの姉さんよ。例えば体が吸血鬼だったとしても、本物の姉さんじゃなかったらこんな馬鹿正直に相手のいうことを鵜呑みにしたりしない！」

「葵……」

妹の悲痛な叫びを聞いて、魔性の身になった自分のことを姉と認めてくれたことを丹は嬉しく思う。全身を駆け巡る聖火の痛みがその瞬間だけ和らいだような気がした。

「聖さん、この子は私が取り押さえておきますから貴方は早くその吸血鬼に止めを！」

「分かってますよ真理亜さん。人間であればどんな罪人でも懺悔を聞いてやる義理はあるが、化け物の貴様にはそんな情けは必要ない。今すぐ引導を渡してやる」

「止めてえ、姉さん逃げて！」

真理亜の腕を振り解こうと葵は華奢な体を蠢かせるが、真理亜は長い手足を彼女の体に絡めて離そうとしない。葵の懇願も空しく聖の体は聖火の青白い光に包まれていき、丹は指一本動かせず呆然と聖の聖火で処断されるのを待つしか出来なかった。

「喝！」

丹は覚悟を決めて固く目を閉ざしたが、その瞬間聖の立っている方向の向かいから威勢のいい気合と共に剣気が押し寄せてくるのを肌で感じる。反対方向から飛んできた剣気は丹の体をあまり打ち付けずに彼女の真上を素通りしていった。

「うつ？！」

聖が苦悶の声をあげたのに続いて、誰かが自分の方に駆け寄ってくる足音が丹の耳に聞こえてきた。近づいてきた足音が床を力強く踏み切った音がした直後、拳が肉を叩く重くて鈍い打撃音が教会のホールにこだました。

「どうもてめえらハライソの教義つてのは、みみっちくていけすかねえ。神様の名を借りてやりたい放題暴れているようにしか思えねえよ」

鉄拳を横つ面にまともに打ち込まれ、整然と並べられた長椅子の列に突っ込んでいった聖を来栖は唾棄するような眼差しで見下す。不意を突かれて殴打された聖は頬を腫らし、殴られた拍子に切れた口から溢れた血を吐き捨てて闖入してきた来栖を睨みつける。

「貴様はもしや……？」

「俺はこいつとそっちにいるお転婆娘の家の厄介になっているもんだよ。こいつにいなくなれると、まともな飯にありつけなくなつて困るんだ」

ようやく乱れた椅子の中から這い出してきた聖の動きに警戒しつつ、来栖は聖の聖火に打ち据えられて憔悴している丹のことを背に庇う。

「遅いよクーくん……」

「悪い、ちよつとここに入るまでに手間取つてな」

来栖がようやく駆けつけてくれたことに安堵すると共に、丹は彼の到着が遅れたせいで自分が酷い目にあつた責任を言及する。来栖はもう少し遅れてしまえば丹の命が危うかつたことを詫びるが、彼の身に着けているナイロンジャケットやチノパンはあちこち破れ、建物の中に入るまでにひと悶着あつたことを示していた。

「安倍さんよ、あんたが捕まえているそのじゃじゃ馬をいい加減離してもらえないか？」

「教会の周囲に配置した衛兵の防衛網を突破してきたことは褒めてやるが、死に損ないの吸血鬼よりも先に貴様を断罪してやる！」

「人の縄張りに土足で入ってきたくせに偉そうな口を利くんじゃねえ！」

来栖は葵を捕らえている真理亜に視線を向けてその解放を呼びか

けるが、不意打ちで負傷させられた怒りに任せて聖が来栖に向かつて聖火を叩きつけてくる。来栖も余所者に自分の管理している街で横行されている不満を訴えながら、聖火と同質の能力である剣気を発して迎撃に出た。

第6回、楽園からの使者 了

第7回、対立する信念

御門市北部の北平川にある福音教会の屋根の頂に立つ十字架は、朝焼けに照らされて血に塗れたように赤く染まっている。

「おおおおっ！」

キリストの殉教を想起させるような十字架の聳える教会の屋内で吸血鬼の天敵にして守護者を務めるウワバミの任に就いている少年、来栖託人は黒尽くめの戦闘服に覆面を被った男に殴りかかろうとしていた。

「くっ?!」

だが相手の放ってきた生体エネルギーである精気を攻撃用に転換した聖火に、聖火を相殺するために来栖の放った聖火と同質のエネルギーである剣気が押されてしまい、来栖はその余波に煽られて足止めを食ってしまう。

一瞬動きを止めた来栖を狙って下方から黒尽くめの男が頑丈そうなブーツを蹴り上げてきたが、来栖は半身を捌いて難なくその蹴りをかわし、右脚が伸びきってがら空きになっている相手の懐に踏み込む。

来栖が間合いを詰めてきたのを見て黒尽くめの男は慌てて防御体制に入るが、既に来栖の振るった右の拳は彼の鳩尾に突き刺さる寸前だった。なす術もなく来栖の強打を腹腔に打ち込まれ上半身をくの字に折った黒尽くめの右の頬を、来栖は間髪置かず左の拳で殴り飛ばす。

「がつ?!」

頑強な体軀を誇る来栖の強烈なボディブローと左フックを喰らい、黒尽くめの男は後方に吹き飛ばされた。

「どうした、人間相手にてこずっているようじゃエクソシストの看板を降ろした方がいいんじゃないか?」

「…異端者め、なめるなよ。エイメン!」

来栖の鉄拳を叩き込まれたダメージは残っていたが、悪しきものを一掃し地上に楽園を創設するために神の戦士になる訓練を積んできた黒尽くめの衣装を纏った少年、聖きよしの闘志が萎えることはなかった。

至近距離での殴り合いでは体格の劣る自分に分が悪いと判断して、距離を置いて聖火の打ち合いで勝機を見出す戦法に出る。来栖に殴りつけられた腹部の痛みを堪えて、聖は裂帛の気合と共に聖火を放つ。

「ちっ!」

床に倒れた聖の対応を覗っていた来栖は自分に向けられてきた聖火を防ぐために剣気を発して相殺しようとする。だがやはり生体エネルギーの打ち合いになると来栖の剣気は聖の聖火に少々押されてしまい、完全に聖の聖火を打ち消せなかった。

「神に背いて吸血鬼どもに寝返った貴様の聖火が、神の意志を代行する使徒である僕の聖火に敵うはずがない。エイメン!」

「野郎！」

聖も格闘術の心得がない訳ではなかったが、肉弾戦では体格に勝り人間同士の喧嘩にも慣れている来栖に軍配が上がっていた。しかし殴り合いでは一方的に攻められても、聖も戦闘のエキスパートであり二度の聖火と剣気の打ち合いで、発散される生体エネルギーの出力では自分が勝っていることに気付いていた。

確実にダメージを与えてきた来栖の拳打とは異なり、聖の聖火は来栖の剣気を打ち消して足止めするくらいの効果しかなかったが、来栖は自分に有利な間合いで戦うことが出来ないせいで攻撃のリズムが崩れつつあった。

「はあぁっ！」

「無駄だ、聖火の打ち合いに勝てない限り貴様は僕に近づけない！」

来栖は自分の拳を届かせようと剣気を矢継ぎ早に発射して聖に切迫するが、拳が届く距離まであと一步の所で聖の放った聖火に牽制のために放った剣気が掻き消されて、残存した聖火に歩みが遮られてしまう。来栖の動きが止まると聖は後方に飛び退いて、自分に有利な間合いを保った。

「何でさっきからアイツを殴ろうとする直前にクーくんの動きが止まるの？」

「信仰を捨てて吸血鬼を守ろうなどという愚行を犯している来栖さんの拳が、神の使徒である聖さんにそう何度も届くはずがありませんわ」

来栖が拳の届くあと一步のところまで毎度踏み止まってしまい、その隙に聖が逃れてしまうことの繰り返しに葵が気を揉むと、彼女の身柄を拘束している真理亜が神の意志を遂行する立場にある自分たちに異端者の来栖が敵うはずがないと告げる。

「アタシをこんな風に捕まえて、姉さんを酷い目に遭わせているアナタたちが神の使いのはずないわ！」

「お黙りなさい。私たちの高尚な理念を貴女のように卑しい小娘が理解できるはずありませんが、余計な発言は身の破滅につながりましてよ？」

葵を捕らえた腕の力を真理亜は強め、冷やかな声音で彼女を黙らせようとする。葵は真理亜のドスの利いた一言に身が竦んでしまい、彼女の腕から逃れようとがくのを止めてしまった。

「葵さん、お姉様の姿をしたあの吸血鬼とそれを庇った馬鹿な男が始末されたのを黙っていれば、貴女のことを見逃してもよろしくてよ？ あんな連中のためにむざむざ命を棄てる意味はないでしょう？」

今度は態度を一転させて甘い声音で語りかけてくる真理亜と葵の視線の先で来栖と聖の戦闘は続いている。相変わらず来栖の放つ剣気は聖の聖火に押し負けており、来栖が聖に切迫しようとする聖の聖火がその行く手を遮り、再び距離を開かせるといって堂々巡りが繰り返されていた。

「逃げ回ってないでかかってこいよ！」

「逃げ、考えなしに猪突猛進するばかりが戦いじゃないだろう？
これも立派な戦術さ」

自分の剣気を聖火で相殺しひたすら拳の当たらない距離を保ち続ける消極的な聖の態度を来栖はなじるが、そのことを恥じらいもせず平然とした顔で聖は言い返す。

「何が立派な戦術だ、つくづくハライソのやり方には反吐が出るぜ
！」

「いいのかい、ここで聖火を使えば彼女が巻き添えになるよ？」

来栖は再度剣気を発散して数m先にいる聖の懷に飛び込もうとするが、聖はこの場で剣気を使うと近くの床に蹲まこっている丹にもその効果が及ぶことを告げる。

ウツセミと呼ばれる自我と人間だった時の姿を留めている吸血鬼の丹にとって、剣気と聖火は数少ない痛手を負うものであり、しかも彼女は聖に聖火を打ち込まれてかなり消耗していた。次に聖火もしくは剣気を受ければその身が消失しかねない。

「この……」

「エイメン！」

来栖が丹の身を慮って剣気を発散するのを思い留まると、吸血鬼である丹を殲滅するために戦いに身を投じている聖は丹への影響なと考えずに聖火を放つ。不意を突かれて来栖は聖火のカウンターをまともに食らってしまった。

聖火や剣気に物理的な影響力はないが、来栖は全身に聖の聖火を叩きつけられて何か大きなものに跳ね飛ばされたような錯覚を感じ、背中から床に倒れこむ。

「貴様は本当に救いがたい阿呆だな、吸血鬼のことなど心配して聖火の使用を躊躇するなんて愚の骨頂だ！」

「うるせえっ！」

聖は来栖が転倒したのを好機と見て、一気に勝負をつけようと聖火を放って畳み掛けてくる。だが来栖も罵倒と共に剣気を放出して聖の聖火を相殺する。

聖火による損害を抑えた来栖はその隙に床から起き上がろうとするが、来栖の起こした上体に目掛けて聖の蹴りが飛んでくる。聖のブーツの爪先が来栖の顎を捕らえようとして聖が口元に嘲笑を浮かべた瞬間、横から伸びてきた来栖の両手がぎりぎりの所で聖の足を掴んだ。

「うおおっ！」

聖の蹴りをすんでのところで食い止めただけでなく、来栖は力任せに掴んだ聖の足を頭上に持ち上げた。急激にバランスを崩されて聖の体は大きく後方に傾き、そのまま尻餅をついて床に倒れこむ。

「貴様、ぶっ……?!」

洗練させた決闘ではなくチンピラ同士の喧嘩のような粗野な方法で危難を乗り切った来栖に侮蔑するような目をして起こした聖の顔面にまたしても鉄拳が叩き込まれる。聖よりも一足早く起き上がった

た来栖は、馬乗りになって二度、三度と聖火を放つ暇も与えずに聖のことを殴り続けた。

「ぐう……」

来栖に押し掛かれてから5発目のパンチとなる右ストレートを左の頬に受けると、聖はくぐもった吐息を漏らして遂に失神した。来栖の重い打撃でしこたま殴られ続けたダメージで覆面の隙間から聖が白目を剥き、完全に気を失っていることが覗える。

聖が戦闘不能になったことを確かめると、来栖は彼の体の上から降りて葵を捕らえている真理亜の方に向き直った。聖の攻撃で被弾したのは聖火一発だけだったが、彼を追い詰めるのに相当の体力と気力を消耗したようで来栖は荒く息を弾ませている。

だが死闘を経て来栖の神経は昂ったままであり、興奮で充血した目には並々ならぬ覇気が漲っていた。市井の女性であれば今の来栖の目を見た途端、裸足で逃げ出さだろうが、真理亜は物怖じせずに来栖と対峙する。

「見ての通りこいつは殴られ過ぎて伸びている。残ったあんたと俺じゃ勝負にならないのは充分承知しているだろう、諦めて葵をこっちに返せ」

「それはどうかしら？」

来栖は真理亜に歩み寄りながら、彼女の捕まえている葵を解放するように左腕を差し出してくる。だが真理亜は覆面から覗く口元に不敵な笑みを浮かべると、腰に手を伸ばしてホルスターから拳銃を抜き放った。

「形勢逆転ね、来栖さん？」

真理亜は右手に握った小型の拳銃デリンジャーを葵のこめかみに突き当てて来栖に脅しをかける。体術による戦闘でも聖火と剣気の打ち合いになっても真理亜相手なら問題ない打算を踏んでいた来栖は、彼女が人質になった葵に手を出す暴挙に出るとは予測しておらず、自分の短絡さに舌打ちをする。

「冗談ですよ、安倍先輩……？」

「…悪あがきはよせ、これ以上無関係な奴を巻き込んで恥ずかしくないのか？」

「吸血鬼の姉を持ち、吸血鬼と手を結んでいる貴方の同居人である以上、葵さんもシロとは言い切れませんわ。ハライソの活動の妨げになるようなら、この場で排除させていただきます」

真理亜は自分の組織の取り組みの正当性を信じて疑わず、状況によつては葵を殺害することになっても良心の呵責を全く感じていないようだった。真理亜の親指がデリンジャーの撃鉄を引き下ろした音を聞いて、葵は死の恐怖で顔面を蒼白にし大きく見開かれた目には涙が込み上げ始める。

「いい加減にしろ、あんたのやってることはもう犯罪でしかねえ！」

「吸血鬼に協力するような異端者を弾圧することが犯罪のはずないでしょう。それから断っておきますけど私も多少なら聖火を使えますから、貴方が剣気を撃つてきても多少は威力を緩和することが出来ますわ。下手に剣気を使えば誤って引き金を引いてしまい、次の

瞬間には葵さんの頭が弾け飛んでいるかもしれせんわね？」

「この悪党…上辺だけは綺麗だけどあんたの腹の中は真っ黒に違いねえ」

「負け惜しみなんて聞き苦しいだけですわ。ですが来栖さん、寛容な私は貴方に葵さんをお救いするチャンスを差し上げますわ」

来栖は真理亜に降伏を呼びかけるが、真理亜は指先一つで人質の命を奪える自分の優位を確信していた。右手のデリンジャーの銃口を更に強く葵のこめかみに押し付けて、来栖が絶対的に不利な状況にあることを強調すると、来栖は悪態をついて真理亜のことを悔しげに睨みつけた。だが真理亜は余裕のある態度を崩さず、来栖に葵を救うための条件を提示してくる。

「チャンスだと？」

「ええ、あなたがそこにいる化け物を聖さんの代わりに剣気で始末してくれば葵さんをお返しいたしますわ」

来栖が真理亜の提示してくる条件の詳細を訊ねると、真理亜は来栖の背後で床にへたり込んでいる丹のことを顎でしゃくって指し示し、来栖が昏倒させた聖の代わりに彼女を剣気で処刑するように訴えた。

「それってクーくんが姉さんを殺すってこと？ そんなの絶対おかしいよ！」

「いいえ、遠い昔に教会から吸血鬼を討つように命じられたエクソシストを先祖に持つ来栖さんの出自を考えれば正しい選択ですわ」

丹の殺害を命じられて動揺する来栖よりも先に、居候の少年が懇意にしている自分の姉を手にかける状況の異常さを葵が主張する。しかし真理亜は葵の無知に同情するように溜息を吐きながら、エクソシストの末裔である来栖が吸血鬼の丹を討つのがあるべき姿だと彼女に告げた。

「お互いに好き同士なんだからクーくんが姉さんを殺せるはずない、そうでしょ！」

しかし葵は真理亜の言葉に対して激しく首を横に振ると、相思相愛の関係にある丹を来栖が討てるはずないと断言する。丹と葵の命を天秤にかけていた来栖は葵の一言ではつとした表情になった。

「その通りさ、大好きな丹ちゃんを託人^{たくと}が殺せるはずがない」

来栖を脅迫する人質のくせにあれこれと口出ししてくる葵のことを鬱陶しく感じてきた真理亜の耳に甘く囁く男の声音が聞こえてくると、真理亜は銃を握った右手を万力のような力で引き上げられた。

「いきなり何ですの?!」

「へえ、物騒なことをしているとは思えないくらい綺麗なお嬢さんだ」

銃を掴んだ右手を捻り上げられただけでなく、真理亜を背後から捕らえた人物は彼女が被った覆面を剥ぎ取って彼女の体を自分の正面に向かせる。真理亜は自分の体を拘束してきた人物の顔に不覚にも怒りすら忘れて一瞬見惚れてしまうが、それほど眼前の男の容貌は美しかった。

涼しげな目元に鼻筋の通った顔立ちをして長めの髪を動きのあるスタイルにセットしたスーツを粋に着崩した伊達男、ウツセミを自称する吸血鬼の一族が支配する紫水小路の有力者の一人にして代永氏族の現在の族長源司は意外そんな顔で真理亜のことを見返した。

「長く伸びた犬歯、貴方も吸血鬼ですね？」

「そうさ、オレも君がさつき化け物呼ばわりしたものの仲間だよ」

微笑みかけてきた源司の口元から覗く長い犬歯を見て、真理亜は自分を捕らえているものの正体に気付き憎々しげな目を向ける。しかし源司は微笑を絶やさずに真理亜の羞恥に染まる顔を見つめると、彼女の手首を握っている右手の指を強く握り締めた。

「あつ……?!」

源司の右手に手首を握られると真理亜は嬌声のような鼻にかかった吐息を漏らす。驚きで見開かれた真理亜の瞳から次第に光が失われて虚ろになっていき、しばらくすると彼女は瞼を閉じて全身をだらしなく弛緩させた。

「このお姉さんには眠ってもらったからね、もう大丈夫だよ丹ちゃん
の妹さん」

真理亜の手からデリンジャーが抜け落ちて床に転がると、源司は真理亜の左腕が絡み付けられたままの葵に危難は去ったと優しく語りかけた。

「あ、あの…助けてもらったのは感謝しますが、安倍先輩に何を

したんですか？」

「心配ないよ、ちよつと精気を抜いて気を失わせただけだから」

葵は窮地を救ってくれた源司に礼を言いつつ、彼が床に横たえた真理亜をどうやって気絶させたのかを訊ねる。

源司はその端正な顔に優しい笑みを浮かべると、真理亜の手首を掴んだ右の掌に自身の体内に内包している精気の真空地帯にして吸血鬼の靈魂に相当する蝕を局所的に具現化させて、そこから真理亜の精気を吸収し昏倒させたのだという事実の大枠を葵に答えた。

「源司さん遅いつすよ、たかだが2、30人の人間相手にウツセミの族長がなにてこずってるんすか？」

「殺してしまうと後々面倒そうだから手加減して倒すのに苦労してね。おまけに相手は街中で銀の銃弾を所構わずにばら撒いてくるから、周辺被害を抑えるのにも苦労したよ」

来栖が源司が救援に駆けつけるのが遅れたことを責めると、源司は自分を殺そうとしてくる相手に自分は相手を死なせない程度に手加減して戦わなければならないことの苦労に愚痴を言った。

「クーくん、この人と知り合いなの？」

「まあな、ちよつとした知り合いだ」

「何がちよつとした知り合いだよ、オレは君のお爺さんが若い頃から付き合いのある相手なんだからそんな浅い仲じゃないだろう？」

「先祖代々続く腐れ縁みたいなモンじゃないっすか」

葵が類稀なる美青年の源司を前に緊張した様子で訊ねてきた問いに対し、来栖は素っ気無い返事をする。だが源司が自分たちの関係はそんな浅薄なものではないと意味ありげに付け加えてくると、来栖は恥ずかしそうに顔を背けた。

「それよりも託人、丹ちゃんがだいぶ弱っているようだ。早く血をあげないと」

「そうっすね、丹があんな風になっているのに無駄話なんかしている暇はないっす」

丹が聖から受けた聖火のダメージのせいで未だに起き上がれずにいるのを憂慮した源司の一言を聞いて、来栖は彼女の下に駆け寄っていく。

「飲めよ丹、あいつの剣気のダメージで相当堪えているだろう？」

「うん、いつもごめんね……」

「謝るのは俺の方だ、すまなかったな俺が遅れたせいで危ない目に遭わせちゃって」

来栖は丹を抱き起こしてその背を自分の太腿に乗せると、ボロボロになったナイロンジャケットの裾を捲って素肌を曝した腕を彼女の顔の前に差し出す。丹は来栖から血を供給してもらうことに感謝するが、来栖は自分の過失で彼女に聖火のダメージを負わせてしまったことを謝罪する。

「いいよ…葵も無事に助けられたし、わたしもこうして生きているから」

丹は結果的には万事が上手くいったことを、弱々しいながらも気丈に来栖に微笑みかけて訴える。そして丹は口を大きく開くと、長く伸びた犬歯を来栖の剥き出しの肌に突き立てた。丹の犬歯に食い破られた傷口から血が溢れ始め、彼女は一口ずつ心から味わうように来栖の血を啜っていく。

「やっぱり姉さんが吸血鬼になっちゃったのは嘘じゃないんだ……」

姉が居候の少年の腕から血を飲んでいるのを見て、葵は嘘や冗談ではなく本当に丹が吸血鬼になってしまったのだと実感する。他人の腕に噛み付いてその血を吸っていることなど野蠻でおぞましいものであるはずなのに、丹は恍惚とした表情で血を啜り、彼女に血を吸われている来栖もある種の快感を覚えているような弛んだ顔をしているのを見て、葵は恋人同士が愛撫している場面を覗き見してしまったような後ろめたい気分になった。

「吸血鬼という呼び方は心外だな、できればウツセミと呼んでほしいね」

「ウツセミ……？」

「数百年前、託人の先祖と和睦を結び、御門市内にある堅気の人間が足を踏み入れられない場所を根城にしているオレたちの一族のことさ。そして君のお姉さんだけでなくお母さんもウツセミとして仲間たちと暮らしている」

「それじゃお母さんもウツセミってこと？ だからあんなに見た目

が若いんだ」

葵が吸血鬼という呼称を用いることに源司が苦言を呈して、ウツセミの概要と彼女の姉だけでなく母親もウツセミになっていることを教えた。約10年ぶりに再会した母親が不自然なほど若々しく、現在も家族と離れて暮らしている理由を源司に教えられて、葵は抱え込んでいた疑問を解消できたことで晴れやかな顔をする。

「父さんは姉さんと母さんがウツセミだってことを知っているの？」

「知っているから君の救出を手伝ってほしいとオレに頼みに来たんだ。同胞のために真面目に働いてくれている紅子の娘たちを見殺しにするつもりはなかったし、特に丹ちゃんはおれの先輩が目にかけているから何かあったら大目玉を食らってしまうからね、直々にオレが出向くことにしたって訳」

「…助けてもらったことは感謝してますけど、この後あなたも姉さんみたいにアタシの血を吸うんでしょう？」

父親が妻と娘がウツセミになったことを知っているのかと葵に問われると、源司は彼女の父親である斎いつきがそれを知っているからこそ同じウツセミの自分に救援を求めてきたのだと説明した。

質問に答えてもらった後、葵は自分を助けてくれたものが吸血鬼であることで見返りとして血を与えるように要求されるのではないかと警戒をして後退りする。

「いいや、オレたちが無関係な人間の血を吸える許可は居住区の中だけだから君の血を吸ったりはしないよ」

「そう、あなたが聞き分けのあるウツセミで助かったわ」

「それでもオレは同胞を先導する族長だからね、立場上無責任なこととは出来ないんだよ」

ここで部外者の葵の血を飲んでしまうと来栖の先祖と結んだ約定に抵触してしまい、ウツセミの族長である自分が禁を犯すわけにはいかないと源司は少し残念そうな顔で葵に手出しをしないことを約束する。葵は目の前の美しき魔物の毒牙にかけられないことに素直に安堵した。

「葵」

「姉さん……」

来栖から血を提供してもらい重態からある程度回復できた丹が近づいてくると、葵は硬い表情で姉と向き合う。来栖の血を吸った丹の唇の先には血がルージユを差したようにこびりついていて、今までにない妖艶な色気を葵は姉から感じさせられた。

「怖い思いをさせてごめんね、それからわたしとお母さんが人間じやなくなつたことを隠していてごめんなさい」

葵の1mほど手前で立ち止まると丹は日本人女性にしては比較的長身の体を折って、深々と頭を下げて妹に謝罪をした。自分の我儘や無茶な注文に応えられずに平謝りされたことは何度もあったが、このように謝られたのは初めてのことだと葵は思う。

「……10年ぶりに会った母さんが昔と全然変わっていないこととか、失踪していたのに今も別居していることとかおかしいことは色々あ

ったけれど、その理由が吸血鬼になったからだって言われても普通信じないわよ。アタシだってこんな目に遭わなかったら今も信じられなかった」

「うん、わたしも初めは吸血鬼なんかいる訳ないって思っていた。でもわたしたちが気付かなかっただけで、この世界にはずっと昔からいたんだよ」

「世の中分らないことだらけね。漫画や映画の中だけにしかないと思うていた吸血鬼が実在していて、しかも自分の家族のうち2人がその仲間になっちゃうんだから」

「…ねえ葵、やっぱり今もわたしたちのことを怖いと感じている、血に飢えた化け物だって思っている？」

吸血鬼がこの世界に実在していると葵が認めた上で、丹は顔を上げると真摯な眼差しを向けて改めて彼女が吸血鬼に恐れを抱いているかどうかを訊ねる。葵は姉の視線に真正面から応えたが、浴びせられた質問に即答はしなかった。しばし切島姉妹の間に沈黙が立ち込め、居候の来栖とウツセミの族長源司が固唾を飲んでそのやりとりの行く末を見守る。

「…そういえばこの間姉さんに貸した漫画、まだ返してもらってなかったわよね？」

「あ、そう言えば借りたままで読んでいなかった…ごめん、すぐに読んで返すから……」

「冗談じゃないわよ、人のモンをいつまでも借りっぱなしにしているのは泥棒と同じよ。今すぐ返してもらっわ！」

「あうち、そんなこと言われてもまだ家にも帰っていないし無理だよ……」

葵が突然以前貸し出した漫画をまだ返してもらっていないことを口にする、丹は学校の課題や家事それにウツセミの仕事に追われて手付かずのまま放置していたことを思い出す。葵がいつまでも貸したものが戻ってこない不満をぶつけてくると、丹は少し太めの眉をハの字にして情けない顔で言い訳をする。

姉の不甲斐ない反応を見て葵は笑いを堪えきれなくなり、声をあげて笑い出した。

「い、いきなり笑うなんて酷いよ葵……」

「だって吸血鬼になったのに、姉さんがいつも通りのリアクションをするのがおかしくてつい……」

「だから言っただじゃない。体がウツセミになった以外は何も変わっていないって」

「それってすごく大きな変化じゃん。でも本当に姉さんは変わらないな、吸血鬼の近寄りがたいミステリアスさんてからつきしじゃない？」

「あうち……凶星だからなんとも言えないけど、でも笑うのはあんまりだよ」

「吸血鬼いいえウツセミがみんな姉さんみたいなひとだったらいいのね」

葵は吸血鬼になった姉に魔性の存在の風格が微塵も見られないことをあげつらって笑い続けるが、どうにか笑いを収めると吸血鬼になった丹に対して好意的な意見を示す。

「じゃあ葵はわたしのことが怖くないんだね？」

「当たり前じゃない。血を吸って足りない栄養を補うなんて変な体質にはなっちゃったけど性格が変わっているのは元々だし、身代わりになってくれる奴がちゃんと家にいるからアタシが襲われる危険性もなさそうだしね。それに気の弱い姉さんを怖がるようになったら、アタシは人間としておしまいよ」

「あうち、なんか散々な言われ様：だけど葵に警戒されるよりはずつといいや」

「そういうことだから今まで通り、面倒な家の仕事は全部よろしくね姉さん」

葵は自ら吸血鬼になった姉の前に進み出ると少し意地の悪そうな、それでいて憎めない感じのする笑みを丹に向けてきた。

「ありがとう葵、これからよろしくね」

「ちょっと姉さん、子どもじゃないんだからこういうのはやめてよ！」

妹が吸血鬼になった自分を受け容れてくれたことの嬉しさで丹は葵の背中に手を回して抱き締める。葵は来栖と源司に見られている気恥ずかしさで顔を赤くしながら、手を離すように姉に抗議する。

「…ま、いいか。仲直りの証ってことで今日は許してあげるわよ」

しかし丹の腕に包まれることに安らぎを覚えて、葵は自分よりも頭1つ分背の高い姉の背に腕を回し優しく包み返した。丹が吸血鬼になったことに葵が気付いてしまったことを発端とする騒動がようやく収束を向かえた瞬間だった。

「さてと、禁断の姉妹愛に浸るのはそれまでにしてさっさとずらかるうぜ。徹夜の後、派手に乱闘してもうくたくただ」

「変なこと言うんじゃないわよ、アンタなんか姉さんに全部血を抜かれて干からびちゃえばいいのよ！」

「葵、クーくんの血を飲み干すのなんてわたし1人じゃ無理だよ…」

しばらく抱き合っていた切島姉妹に来栖が撤収を呼びかけると、葵は姉の体から飛び退いて来栖に罵声を飛ばす。丹は屈強な体格をしている来栖に目を向けて、彼の血液を空にする事の無謀さを訴えた。

「喧嘩はほどほどして早いトコここから出よう。ある程度持ち堪えられるけれど、出来れば陽の光にウツセミのオレも丹ちゃんも当たりたくはないんだ」

「言われなくてもこんなトコに長居するつもりはないわ。こんな酷い目に遭わされたんだからもう教会も聖書もうんざりよ！」

「葵、神様のことを悪く言ったら罰が当たるよ？」

「姉さんはひとが良過ぎるわよ、下手をすれば神の名の下に殺されてたのよ？」

源司に促されると葵は教会の奥にある祭壇に背を向けて、表の出口に向かつて大股で歩き始める。神を冒瀆するような発言をする妹を丹は態度を改めるように窘めるが、葵は大切な家族が信仰のお題目で殺されかけたことを腹に据えかねているらしい。

「悪いのは神様じゃねえよ、その名前を借りて好き勝手やってるハライソの連中だ」

「ハライソって前に安倍さんが言ってた吸血鬼を倒すことを目的にしている組織のこと？」

「そうみたいよ。安倍先輩の屋敷に監禁されている間、何度かその名前が出てきたし、クーくんがタコ殴りにしてたあの人はハライソの東京にある本部から来た人だって言ってたわ」

来栖も丹の意見に同感であるらしく、非難すべきは神ではなくその名前を濫用して傍若無人な振る舞いを繰り返すハライソの人間たちだと訴えた。ハライソの名称を初めて耳にする丹がそれが真理亜たちが所属する組織の名前かと確認してみると、真理亜の自宅に幽閉されていた時に組織の内容を小耳に挟んだ葵が姉の質問に応じた。

「東京じゃ宗教家の武装を許可されているのかなあ、いきなりマシンガン撃たれた時にはさすがに肝を冷やしたよ」

源司は軽口を利きながら足元を一瞥する。教会の建物から表通りへ伸びる通路の両脇に倒れている聖や真理亜と同じ戦闘服を身につ

けている者の中には、傍らにマシンガンやライフルを投げ出している者の姿もあった。神の庭である教会の敷地内に戦場のような光景が広がっていることに丹と葵は違和感を覚えながら、一同は忌まわしき思い出の残る教会を後にする。

「オレはこれから紫水小路に戻るけど君たちはどうする？ 出来れば丹ちゃんだけでなく妹さんも紫水小路に来た方がいいと思うけど」

「オレも賛成です。しばらくの間、奴らが入れないあそこにいる方が安全でしょう」

教会から少し離れた場所でタクシーを拾うと、源司は繁華街に車を走らせるように運転手に指示する。タクシーの車内で源司が同胞の丹だけでなく葵にもハライソの追っ手がかかることを懸念して、彼女たちをハライソの追及の手が及ばない紫水小路に身を潜めることを提案する。来栖も丹たちの身を案じて、源司の提案に賛同を示した。

「シスイコージ？」

「わたしたちが暮らしている街だよ、そこにお母さんは9年前の春からいる」

「お母さんが住んでいる街…それって御門の近くにあるの？」

「近いといえば近いし遠いといえば遠いかな」

「何それ、謎かけのつもり？」

「まあ行ってみれば意味は分かるよ」

葵が聞き覚えのない通りの名を反芻すると、そこが御門と隣接するウツセミたちの居住地であることを丹は彼女に説明する。しかし丹の発言の意図を葵が掴めずにいると、百聞は一見にしかずという言葉通り、見れば分かると言って丹は話を結んだ。

源司は鱧川にかかる橋の前でタクシーを止めさせて、一行は繁華街の中心で降車する。真夜中まで大勢の人で賑わっている歓楽街も全て店じまいをしており、通勤する社会人の姿がちらほら見られる他は人通りもなかった。

「源司さん、丹と葵のことをよろしくお願いします」

「クーくんは一緒に来ないの？」

「ああ、ちょっと鞍田山の先代の所に行ってくる」

来栖が紫水小路とのアクセスポイントがある方向とは別の川の上流に向かって足を踏み出していくのを見て丹が怪訝そうな顔で質問をする。来栖は御門市北部に聳える鞍田山に住んでいる実の祖父にしてウワバミの前任者の下を訪ねると返事をした。

「もりみち護通ならハライソのことを詳しく知っているかもしれないからだね？」

「ええ。俺たちウワバミ以外にも剣氣を使う奴がいるってことは知ってましたけど、今日戦った奴の撥はっの威力は俺のより強かった。剣氣の出力は俺と先代でもほぼ互角だったのになんであいつの剣氣はあんなに強いのかを確かめておかないと、ハライソと戦っていく上

で不利になりそうですからね」

来栖は肉弾戦では圧倒できても剣気と聖火の打ち合いでは力負けしてしまつた事実を重く受け止めて、先代にハライソの使徒の聖火の出力が何故あれほど強力なのかを訊ねて今後の対応を検討する必要性を源司に述べる。

「剣気のこととはよく分からないけれど、クーくんは自分よりも剣気が強い人にもちゃんと勝てたじゃない。それならきつとこれからだつて……」

「今日の奴は俺よりも体が小さかつたし、格闘のセンスもなかつたから剣気が通用しなくても殴り合いで叩きのめすことができた。でもこれから戦う奴がそうとは限らねえ、剣気の威力が強くて俺よりもガタイがよかつたり素手での戦いに慣れていたりする奴だっているかもしれないだ」

「そんな人に勝つのは難しくない？」

「厳しい戦いになるだろうな、けど俺はウワバミとして人間とウツセミの世界の調和を乱す奴に負ける訳にはいかないんだ。どんな手を使つてでもそいつらに勝たなくちゃいけねえ、だからそのためには敵のことをよく知つておく必要があるんだ」

丹は能力で勝っている相手にも勝てたのだからそれほど思いつめる必要はないと呼びかけるが、来栖は自分の背負っている責任を全うするためには敗北は許されないと厳しい態度で言い返す。

「ハライソの刺客のことを詳しく知ることはいいとして、あんまり独りで抱え込むなよ託人。君も人間とウツセミが手を取り合つて世

界のバランスを保つべきと分かっているから、オレに協力を求めてきたんだろっ？」

来栖がハライソとの戦いの責任を全て自分の肩に背負わせようとする峻烈な姿に丹は口を噤んでしまうが、遠ざかっていく来栖の背中に源司が来栖自身も全てを独りで抱え込む必要がなく、ウツセミにも協力を求めてもいいと分かっているから葵の救助への助力を求めてきたのだろっつと訴えかけた。

「…そうっすね源司さん、困った時はお互い様っすよね」

「勿論だよ。これはウワバミの君だけの問題じゃない、オレたちの存在に寛容なウワバミにこの街の守護者を続けてもらわないと、こっちも商売上がったりなんだ」

「まさに持ちっつ持たれっつの関係っすね、じゃあ丹たちのことを頼みます」

「女の子の相手をするのはオレの数少ない特技だよ、安心してお爺さんのところに行くといいさ」

来栖は年長者の言葉を聞き入れて考えを訂正する。ウツセミの族長を務める男とウツセミの天敵にして守護者の任にある少年は互いに信頼しあった眼差しを交し合う。来栖は改めて丹と葵の身の安全を源司に任せて、先代の住む山へと向かっていった。

「…このひとについていくとなんか別の危険があるような気がするのは気のせい？」

「大丈夫だよ、さすがに族長だけあってそういう分別はある人だ

から…多分」

ぶつきらばうだがその分過剰に馴れ馴れしくはしてこない居候の来栖のことを見送った葵は、来栖に自分たちのことを任された飄々とした美青年のことを信用していいのかと疑問に思う。葵よりは源司との付き合いの長い丹は、軽薄な見た目よりは紳士的な彼が自分たちに危害を加えることはないかと妹に言い聞かせようとする。しかし理由はともかく母親を家族から引き離れた人物が源司であることを思うと、どうしても彼を丹は信頼しきれない所があるのも事実だった。

「…クーくん、早く帰ってきてね」

丹は源司に対する蟠りによる理由だけでなく、更なる激戦が予想されるのでその戦支度に向いた来栖の無事な帰還を願った。

* * *

来栖に袋叩きにされて昏倒した聖と源司の蝕に精気を吸われて意識を失った真理亜が目を醒ましたのはほぼ同時だった。外傷を受けずに気絶させられた真理亜とは対照的に、来栖に何度も殴打されたせいで覆面を脱いだ聖の顔が腫れ上がり、あちこちに痣が出来ているのに真理亜は気付いた。しかし聖に向けられた真理亜の視線には負傷した仲間に対する痛ましさや気遣いはなく、神の威光を異端者に知らしめる使徒に名を連ねながら返り討ちにされたことへの侮蔑の念しか浮かんでいなかった。

「真理亜さん…奴らは？」

「さあ？ 貴方が来栖さんに打ち倒されてから私も彼の仲間に気絶

させられましたから、その後のことは存じませんわ」

聖は瞼や頬の腫れ上がった顔を向けて来栖たちの行方を真理亜に問うと、真理亜は見苦しくなった彼の顔を目にしたくないことと不覚にも吸血鬼に精気を吸われてしまったことを隠すために彼から顔を背けた。

「正面に配置した衛兵どころか使徒の聖まで眠っていたとはな、ここにいる全員が神の意志を遂行するハライソの戦士としての自覚が足りないようだな」

朝日が差し込んでくる開け放たれた教会の入り口の前に姿を現した男は、前庭に累々と積み重なった昏倒した衛兵たちと屋内に倒れていた聖と真理亜の低落を糾弾して、教会の中に入ってくる。

「すみません天連さん、相手を見くびった慢心に足を掬われました」

「弁解している暇があるなら修練に勤しんで自分の未熟さを克服しろ。しかし聖、ウワバミに手酷くやられたようだな？」

「聖火の打ち合いでは圧倒できましたが、体格差を利用して力任せに攻められました」

「体術を疎かにするなという理由がこれで分かったか、聖火の威力が強いだけで乗り切れるほど戦いは甘くない」

「…今回のことで深く反省しました」

朝日を背にして祭壇へと近寄ってくる男の顔は逆光ではっきりと見えなかったが、聖は長髪を靡かせてロングコートを羽織ったその

影を一瞥しただけで相手の正体を察し、平身低頭で許しを請う。

肩に届く長髪にロングコートを着た男は痣だらけの聖の顔を見ても眉一本動かさず、聖火の出力を高めて遠距離からの戦闘技術を磨くことばかり専心している聖の驕りを咎めて反省を促した。聖火と剣気の打ち合いでは押していたのに、体つきのハンデがあったといっても肉弾戦では一方的に来栖に打ち込まれたことの悔しさを滲ませて、聖は長髪の男に自分の誤りを思い知らされたと詫びる。

「お久し振りですわ天連さん、予定よりも早い到着じゃないかしら？」

「代替わりしたばかりとはいえ相手は江戸の世から御門の地に鎮座していたウワバミだ。聖火の威力なら使徒の中でも指折りとはいえ、実戦経験の乏しい聖と衛兵だけでは不安だったから出発を早めてみれば案の定このざまだ」

「結果は見ての通りですわ、やはり貴方の到着を待つて行動を起こすべきだったわね」

「他人事のように言っているが、今回の吸血鬼とウワバミの討伐が失敗した責任の一端は作戦を立案したあんたにもある」

真理亜は愛想よく長髪の男に話しかける。しかし長髪の男は相変わらずの無表情で数百年にわたって御門をウワバミの守ってきた相手に、実力はあっても使徒としての経験が不足している聖とただの戦闘訓練を積んだ人間でしかない衛兵では不十分だったことを指摘すると共に、真理亜自身の落ち度があったことを淡々とした口調で叱責した。

「まさか来栖さんが吸血鬼の増援を連れてくるとは思いませんでしたわ。人間であるにも関わらずあの化け物の手を借りるなどという冒瀆的な考えを持つなんて、良識と敬虔な信仰のある私には思いつかなくてよ」

「自身の策に溺れたな安倍真理亜、吸血鬼を狩ろうとしたのだから吸血鬼の仲間がいる可能性も考慮しておくべきだ。だが貴様の至らなさお陰でいくつか分かったことがある」

「それは何ですか？」

真理亜は自分の詰めのかたまりを責められて若干不服そうな顔をするが、天連と呼ぶ長髪の男が発見した事実の詳細を問う。

「ひとつはウワバミが我々の思っている以上に吸血鬼と親密な関係にあり、それも複数の吸血鬼と良好な関係を築いているということだ。そうでなければ吸血鬼の加勢を得られないだろうからな。ふたつめは待ち伏せをした時刻には陽が登り始めていたにも関わらず、教会に侵入してきた吸血鬼どもはそれに耐えられたということだ。これは奴らが人間社会に深く侵食している可能性が考えられるだろう。そしてこれらの事実から導き出されるのは、御門における吸血鬼の跳梁は本部の予測以上に深刻な状況にあり、早急に掃討作戦を遂行する必要があるということだ」

「使徒を総動員するような大掛かりな作戦をする必要があるってことですか？」

天連が提示した事実を整理して聖は、御門市は自分たちが考えている以上に吸血鬼の魔の手が及んでおりその状況を打開するために、ハライソは組織を挙げて御門の闇に跋扈する悪鬼を殲滅する必要がある

あるのだと察する。

「その通りだ。奴らのねぐらを見つけ次第、そこに強行突入し片っ端から化け物どもを駆逐する。吸血鬼だけではない、奴らに協力する人間もまとめて粛清だ」

聖の推測に天連は頷き帰すと、初めて能面のように無表情だった顔を変化させる。紫水小路に潜入する算段がつけば、ウツセミも人間も分け隔てなくそこに住むものはみな始末するという恐ろしい考えを口にした天連の口元にはかすかな笑みが浮かんでいた。

第7回、対立する信念 了

第8回、たゆたう ちのみこ

紫水小路に迷い込んだ人間およびその住民であるウツセミ相手に商売をしている飲食店が立ち並ぶ区画『花街』にある酒場『林檎の樹』の店内で黒服の男やキャストたちが開店準備を進めていた。

「族長の屋敷で開かれる会合に行くから今日は店には戻ってこない、俺がいないからって気をサボるんじゃないぞ」

「分かってますよお、いつてらっしゃーい忠将さん^{ただまさ}」

自分が不在でもしっかり仕事をするように従業員のウツセミたちに釘を刺して、この店だけでなく花街全体を統括するマネージャーの忠将は代永の族長源司の屋敷で開催される会合に参加するため店を出発する。売れっ子キャストの緋奈がいつも以上に弾んだ声で送り出されながら、忠将は出口のドアノブに手をかけた。

「ただまさ」

ぱたぱたという足音が聞こえてくると、店の裏に続いているカウンター^{カウンター}の奥から小さな陰が飛び出してくる。フロアに駆け込んできたその陰は入り口の扉の前にいる忠将に向かって突進してくると、彼の皺^{しわ}1つないスラックスを履いた脚に飛びついてきた。

「ただまさお出かけするの、だったらわたしも一緒に連れてって！」

「残念だけど遊びに行くんじゃないくて源司の所に難しい話をしに行くんだ。ついてきても面白くないからウチで留守番しろ蘇芳^{すおう}」

「やだゝわたしもたまには外に行きたい。ずっと家の中にいるのは飽きた！」

忠将は自分の脚にしがみついている幼女を店の上にある自室に戻そうとするが、幼女は彼の足をしっかりと掴んで離れそうとしない。

「蘇芳ちゃんも一緒につれていけばいいじゃないですか。子どもを部屋の中に閉じ込めておくのはよくないですよ」

「うん、よくないよ！」

蘇芳と呼んだ幼女の扱いに忠将が困惑している姿を楽しげに見つめながら、緋奈は忠将に蘇芳を外出させるべきだと訴える。緋奈の言葉に続いて蘇芳も自分を外に出すように主張した。

「子どもは外で遊ばせるべきだと俺も思うさ、でも他にこいつと同じくらいの子どもがいないんだから仕方ないだろう？」

「理屈は分かりますけどお、ぶつちゃけ蘇芳ちゃんに店の中うろちよろされると仕事しづらいんですよねえ。売り上げが伸びなくて周りのお偉方から文句を言われるのは忠将さんじゃないんですかあ？」

「ベビーシッターを捜している暇もないし、面倒を看させるほどキヤストや黒服にも余裕がある訳でもないし、かといって一度だだをこね始めたらなかなか大人しく引き下がる蘇芳でもないし…結局俺が連れて行くしかないみたいだな」

人間よりも長い寿命を持ち、転化した年齢からほとんど加齢しないウツセミが住民の大半を占める紫水小路には見た目が成人に達していないものはそう多くはない。更に成人の姿をしていないウツセ

ミでも丹や富士見氏族の悠久はるかのように中高生くらいにはなっている
ので、思春期も迎えていない幼児は紫水小路全体を見ても蘇芳しか
いなかった。

同じくらいの年齢の遊び相手がいない蘇芳はもっぱら『林檎の樹』
の2階にある自室で独り遊びをして過ごしていたが、時折暇を持て
余しては店のフロアに降りてきて店員たちを困らせている。蘇芳が
フロアに出てくると忠将が彼女を宥めて部屋に戻らせていたが、彼
が不在となると彼女をうまく手懐けられるものは他にいなかった。

店の売り上げを落ち込ませないためには蘇芳をフロアに出させる
訳にはいかず、かといって不在の自分に代わり面倒を看させる相手
を捜している暇もないので忠将は渋々彼女を同行させることにした。

「そうですよ。ヒトをあてにしてばかりいないでちゃんと娘の世話
をしてくださいね、お父さん」

「…ちやかすな、俺はこいつの親の代わりに面倒を看ているだけだ」

「それって親以外の何者でもないですよ。それじゃ蘇芳ちゃんもい
つてらっしゃーい」

「いつてきまーす」

緋奈に冷やかされて忠将は苦笑を浮かべるが、緋奈の見送りに蘇
芳は無垢な笑みを浮かべて手を振って応えた。

「いいか蘇芳、源司の家に着いたら大人しくしているんだぞ？」

「わかった、わたしいい子にしているよ」

「よしよしお前は賢い子だな、それじゃ行こうか」

「うん！」

忠将は扉を開いて蘇芳を先に外に出させると、続いて自分も店の外に出て行った。

「ね、緋奈、前から気になってるんだけどなんであの子の世話をマネージャーがしているの？　いくら力があってもマネージャーだってウツセミなんだから、子どもが作れるはずないわよね？」

「ん、詳しいことはあたしも知らないけれど、忠将さんにも色々あるみたいよ」

「わたしがこの店に来てからも大きくなっていくんだから、蘇芳ちゃんやウツセミじゃなくて普通の人間よね。どうして人間の子をマネージャーが預かっているのかしら？　まさかマネージャーって口リコン？」

「そーそーあたしも前からそう思ってたんだ。マネージャーは顔もいいし、仕事も出来て気遣いもできるんだからオンナの1人や2人簡単に落とせそうなのに、全然愛人を作ろうとしないんだもん。精気はいつも酒蔵からチンタを取り寄せて摂っているみたいだし、どうしてあの人が人間の愛人を持たないのか不思議だったんだ」

「え、もし口リコンがホントのことだったら、あたしマネージャーに幻滅」

「さ、お喋りはこのくらいにして店開けるわよ。みんな今日も気合

入れていこー！」

緋奈の同僚たちは店のマネージャーを勤める忠将が精気を提供してくれる愛人を何人もはべらしていてもおかしくないのに、全く女人の気配がないことを訝しげに思っつて噂話に花を咲かす。しかし緋奈は手を叩いて音を鳴らし、同僚たちの歓談に水を差すと開店させることを宣言した。

「緋奈どうしたの、今日は珍しく気合入ってんじゃん？」

「別にい、欲しいものがあるからそのために稼がなきゃいけないのよ。だからお客さんの指名をバンバン取らなきゃ！」

「これ以上緋奈に指名入れられたらあたしたちの仕事がなくなっちゃうよお」

稼ぎ頭の緋奈にこれ以上客が集中してしまうと自分たちの給料が右肩下がりになってしまうので、キャストの女性たちは気を引き締めて仕事に向かうことにした。

しばらくすると本日最初の客が店内に入ってくる。店の人ならざる遊女たちは、男心を鷲掴みにする魔性の笑みで自分たちに金と血を与えてくれる客を出迎えた。

* * *

紫水小路の支配に双壁をなす代永氏族の族長源司の屋敷の一室。最近頻繁に開かれる会合の会場に使われている屋敷の一室には、紫水小路の有力者と共に2人の若い娘が同席していた。有力者たちと同じくウツセミの姉丹とその妹で人間の葵の姉妹だ。

「ウツセミに続いて今度は教会の刺客か…このところ余所者が御門に流れ込んできては、騒ぎを起こすばかりだな」

代永と富士見の両氏族のウツセミで組織が構成される、生き血の代わりになるウツセミたちの嗜好品チンタの醸造を行っている『酒蔵』の長で森永屋という屋号を持つ潮が直近の出来事を憂慮して唸り声をあげる。優男の多いウツセミの男性にしては珍しく、潮は口髭を生やした厳つい顔をした親方の風格を漂わせる恰幅のいい男だった。

「もしかしたらそのハライソという組織と一戦交えることになるかもしれない、みんなも配下のものたちにも注意を呼びかけておいてくれ」

「おうさ。だが万が一のことがあってもウチの男たちが教会の連中を追い払ってやるぜ！」

「あんたんトコの若い衆はどいつもこいつも血気盛んだからね、普段街で暴れている分、荒事が起こった時にはしっかり働いてもらわないと」

源司が各組織の代表たちに教会からの迫害の可能性があることを部下たちに伝達するように呼びかけると、潮は丸太のような腕を掲げて威勢のいい返事をした。その荒っぽい気質から商売の妨げになることがある酒蔵のウツセミたちであったが、勇猛果敢で場慣れした連中が揃っており、商取引を管轄する『置屋』の女主人茜は片えくぼを浮かべつつそれを頼もしく思う。

「他人事ではないぞ茜、次世代を担う若者の盾になることもわしら

の務めじゃ」

「ウチら代永のモンと森永屋の親方は心配ないですけどね、富士見の連中は少々あてにならないかもしれないね」

紫水小路でウツセミたちが生活する上で必要な庶務を担当する部署『政所』の長で、代永の先代族長だった朱美が茜にひとの上に立つものの心構えを説くと、茜はテーブルの向かいに座っている富士見氏族の代表者たちに不審な目を向けた。

「私たち富士見氏族は野蛮な代永とは違って繊細な感性の持っているの。そんなに人間と喧嘩をしたければ勝手にすればいいわ」

茜の嫌味に対して富士見氏族の族長を務める艶やかな髪をした幽玄とした風情の美女千歳は僅かにその秀麗な眉を不快そうにひそめる。

「そうだねえ、私も自分の創作に使う道具よりも重いものを二百年くらい持つてないなあ」

「そっちのお嬢様はともかく染物屋、あんたは無駄に長生きしてるんだからやろうと思えば人間の10人や20人簡単に蹴散らせるだろう?」

「どうかなあ? 百年くらい前なら自信をもって頷けるけど、歳をとったからいきなり無理をしたら体が悲鳴をあげそうだ」

「まったく富士見のウツセミは本当に自分勝手な連中だよ」

富士見氏族のウツセミの中では最年長で染色家を生業として^{わたる}恒は、年少の茜の非難をのりくらりと掴みどころのない態度でか

わす。一族全体に影響する危機が迫っているかもしれないのに、それに対して無関心な協調性の乏しい富士見氏族に茜は呆れた。

「ウワバミと和議を交わして以降、数百年ぶりに人間と衝突するかもしれない状況になっている。この危機を乗り越えるためにウツセミ全体で一致団結しておく必要があることを肝に銘じておいてほしい。それじゃみんな忙しい中集まってくれてありがとう、お疲れ様」

源司は今一度仲間同士の結束を固めておく必然性を出席者たちに呼びかけると、会合を閉会させた。会議が終わると組織を統括する多忙な身である有力者たちは、残してきた仕事を片付けるために早々に立ち去っていった。

「葵、どうしたの？」

「みんな真面目な顔で難しい話をしているんだもん、なんか疲れた……」

丹はテーブルの上に突っ伏している妹に声をかけると、葵は疲れた声で自分の何倍も生きているものたちが繰り広げた議論の流れについていけず、翻弄されるばかりだったと感想を呟いた。

「葵も大変だったね。いきなりウツセミの偉いひとたちの会議に呼ばれて、ハライソについて知っていることをみんなに話さなきゃならなかったんだから」

「あれこれ質問攻めにさせてもうヘトヘトよ…アタシだってハライソのことを詳しい訳じゃないんだから、知りもしないことを訊くのはいい加減にしてほしかったわ……」

ハライソの組織の概要を説明し終わると、葵は源司と茜を中心に根掘り葉掘り詮索された。1日ほどハライソの構成員である安倍真理亜の邸宅に軟禁されていただけの葵がハライソの実態について明るはずがなかったが、一族の存亡に関わる事なので源司たちは些細な手懸かりでも掴もうと躍起になっていた。

特に口調も厳しい茜の質問攻めから解放された葵は、すっかり精魂使い果たした様子でぐったりとテーブルの上に身を投げ出している。

「私も疲れたわ。人間の世界とは別の空間にある紫水小路に教会の殺し屋が攻めてこられるはずなのに、よくそんな無駄な議論を延々と続けられる神経が理解できないわ」

「ち、千歳さん……」

丹は妹に労わりの眼差しを向けていると、千歳も自分と同じように葵のことを見つめていることに気付く。しかし千歳の目は慣れないことを経験した葵に対する気遣いは浮かんでおらず、獲物を狙う狩人のものであることを丹は察した。

「丹さんの妹の葵さんだったかしら？ 疲れているのなら私の所で休んでいけない、心を尽くしておもてなしさせてもらうわよ？」

「だ、駄目ですよ千歳さん、葵はわたしの大切な家族なんですからこの子には手を出さないで下さい！」

「あら、ここはウワバミに人間を狩ることを認められた場所よ。気に入った人間を捕まえて何が悪いの？」

「あんたには可愛い召人めしうどがいるだろう、精気の供給に困っていないんなら自重したほうがいいんじゃないか？」

丹は千歳の毒牙に妹をかけさせないように試みるが、千歳の硝子球のような目をした氷のような美貌を見ると、次第に彼女の凄みに圧倒され始めてしまう。力づくで葵を攫っていこうとする千歳の横暴に丹が屈しかけた時、彼女たちのやりとりに横から口を挟んでくるものが現れた。

「可愛いと思うものを積極的に捕らえようとする姿勢はウツセミとしては歓迎することじゃないかしら、女日照りの花街の支配人さん？」

「それでも理性的な存在である俺たちには一定の憤みを持つことが美徳だろう、特に優雅さを売りにしている富士見氏族の族長を務めるあんたにはな。丹、妹を部屋に連れて行って休ませてやれ」

「は、はい…起きて葵、行くよ」

外見だけでなく実際の年齢も忠将の方が千歳よりも遙かに上だったが、別の氏族のものとはいえ族長の自分に口答えしてきた彼に千歳は不愉快そうな目を向ける。

忠将は千歳の棘のある言葉を聞き流し、風流さゆえに争いの場に出る必要がないと訴えた彼女の言葉を貸してさりと切り替えた。千歳が忠将に反論できずに口を噤んでいるうちに、彼は丹に葵を別室に移動させるように指示を出す。

丹は妹を無理矢理椅子から立ち上がらせると、その背中を押しながら会議の開かれた応接室から退場していった。

「嫌味な置屋の守銭奴といい、水商売をしているくせに綺麗事ばかり並べるあなたといい、本当に代永のウツセミは気に食わないひとばかりだわ」

千歳は悔し紛れに鋭い剣幕を向けて忠将の顔を見上げると、身を翻して会議室から退出していった。年頃の娘のように苛立ちを包み隠さずにドアを荒っぽく開いて、千歳は叩きつけるように扉を閉めていくと部屋に残った源司と忠将は苦笑いをする。

「やれやれ…富士見のお嬢様はホントに気難しいひとだ」

「お前もひとのことをとやかく言えないと思うがな、公私混同しなだけで一日の長があるってもんだな源司」

「お褒めに預かって光栄だよ。ところで忠将、早く蘇芳ちゃんの迎えに行った方がいいんじゃないか。年下好みの千歳お嬢様の食指が彼女に動いたら、君としては面倒なんじゃないか？」

「…悪い、ちょっと外すぞ」

「いつてらっしゃい、保護者ならしっかり子どもの世話はしないとね」

「…他人事だと思って勝手な事を」

忠将は源司の冷やかしを聞いて眉間に皺を刻みながら、千歳の従者を務める悠久に預けた蘇芳の迎えにいった。

「良識的なようで忠将も随分変わり者だよねえ、ウツセミが人間の

子どもを育てるなんて話、彼の他には一度しか聞いたことがないよ」

源司は愉快そうに独り言を呟いたが、やがて育児に奮闘している自分の右腕の男の苦労を思つて苦々しい顔になる。

「そのもう一つの例の子が成長したのがあのお嬢様か…あの子を見ていると人間は人間が育てるべきなんじゃないかと思わずにはいられないよ」

源司は椅子の背凭れに身を預けると、長い時を生きてきてもどうにもならない問題はあるものだというような苦笑を浮かべて天上を仰いだ。

* * *

ハライソの追っ手から逃れるために紫水小路に逃げ込んだ丹たちは、当面源司の屋敷に逗留することになった。源司が貸してくれた部屋に行く途中、廊下の角から幼稚園児くらいの女の子が飛び出してくる。

「はるひさ、できるものならわたしを捕まえてみなさい！」

「蘇芳ちゃん、走っちゃ危ないよ！」

蘇芳に送れて廊下の角を曲がってきたのは富士見氏族の少年の姿をしたウツセミ悠久だった。悠久の不安は的中し、余所見をしていたせいで自分の進路を葵が塞いでいるのに蘇芳は気付かず回避行動が遅れてしまう。心身ともに疲弊していた葵の反応も遅れてしまつて、蘇芳と葵は正面からぶつかった。葵は後ろによろけるだけで済んだが、蘇芳は彼女に衝突した反動で床の上に転んでしまう。

「あなた大丈夫?!」

丹は板張りの廊下に転倒した蘇芳の前に跪き、彼女を抱き起こして安否を気遣う。蘇芳は背中を床にぶつけた痛みで泣き出しそうになっていたが、抱き起こされて丹の太腿の上に寝かされると幾分痛みが緩和したようで泣き喚くのを堪えた。

「うん、平気だよ」

「姉さんアタシの心配は、ぶつかって来たのはその子だよ?!」

「えっと…蘇は大丈夫そうね」

「なによそのテキトーな言い方は!」

蘇芳が自分の顔を見上げて微笑んでくると、丹も彼女の屈託のない笑顔につられて笑い返した。蘇芳が泣かなかった代わりに、丹の後ろで葵がおざなりに扱われた不平を喚いていた。

「やあ丹、教会の刺客に襲われたとは災難だったね」

「ちょっと痛い思いはしたけれど、クーちゃんと源司さんのおかげでみんな無事だったのは不幸中の幸いだった。ところで悠久くん、この子は誰?」

「忠将さんの所にいる子だよ。会議の間ベビーシッターを頼まれていたんだけど、元気がよくて振り回されっぱなしだった……」

蘇芳の素性を丹に教えると、悠久は中性的な美貌に疲労の色を浮

かばせて肩を竦める。

「どうして忠将さんの所にこんな小さい子がいるんだろう？ まさか『林檎の樹』で働いている訳ないし……」

「ねえ丹さん、その子もあなたの妹なのかしら？」

小学生になるかならないかくらいの幼女の蘇芳を何故酒場のマネージャーをしている忠将が預かっているのか丹は合点がいかずに首を傾げる。悠久や蘇芳本人からその理由を教えられるよりも先に、丹の背後から千歳が好奇の眼差しを蘇芳に注いでいた。

「違いますよお嬢様、この子は丹の妹じゃなくて忠将さんが世話している子です」

「へえ、あのひと堅物そうなくせに意外と変わった趣味をしているのね」

丹に代わり悠久が蘇芳の素性について千歳に伝えると、千歳は皮肉めいた一言を口にする。何故か千歳の顔には不快感が浮かんでいて、蘇芳を見つめる目には彼女への憐憫が含まれているように見えた。

「俺が蘇芳の面倒を看ているのは趣味や道楽ではないんだがね、富士見のお嬢様」

「ただまさ、お帰り！」

千歳の背後から忠将が姿を現して彼女の皮肉に言葉を返す。蘇芳は満面の笑みを浮かべて丹の太腿から飛び起き、丹の脇をすり抜け

て忠将の足元に駆け寄っていった。

「ただいま、いい子にしていたか？」

「うん、はるひさにいっぱい遊んでもらったよ！」

忠将は膝を屈めて蘇芳の視線に顔の位置を合わせると彼女の頭をなでてあやす。蘇芳は忠将に頭をなでられて嬉しそうな顔で悠久に遊んでもらったことを忠将に伝えた。

「それはよかったな。悠久、こいつの面倒を看てくれてありがとうな」

「いえ、お安い御用ですよ」

建前上は造作もないことと答えたものの、その強張った笑顔から内心悠久は二度と蘇芳の相手をしたくないと思っているのが丹や葵の目には明らかだった。

「保護者が引き取りに来たのならベビーシッターの役目はもう終わったでしょうし、帰るわよ悠久」

「はい、喜んで」

千歳が踵を返して玄関に向かい始めると、悠久はようやく蘇芳から解放される喜びに満ちた顔でその後続いた。

「…子どものうちから自分に従順な奴隷にするために手懐けておこうというその魂胆、浅ましくて汚らわしいわ」

千歳は擦れ違いざま、忠将の耳元に辛辣な一言を言い捨てていく。

「勘違いするな、俺はそのうちこいつを陽の当たる場所に返すつもりだ」

「その子のためにもそうであることを願うわよ」

忠将は横目で千歳に振り返り、蘇芳を自分の召人めしうどにするつもりはないことを言って彼女の無礼な発言に反論する。千歳は忠将の顔を見向きもせず、歩みも止めないまま彼の言葉が事実であることを祈る旨の発言をするが、その口調は微塵もそれが本音だとは思っていないようだった。

千歳の吐いた毒舌の余韻は忠将与切島姉妹の胸に残り、彼らの周囲は重い空気に包まれてしまった。

「ただまさしくわたしお腹ぺこぺこご飯まだ？」

辺りに立ち込めた沈黙を破ったものは蘇芳の大きな腹時計だった。蘇芳の胃袋が切なげに音を鳴らすと、葵の腹も連鎖的に鳴る。しかし素直に空腹を訴えてきた蘇芳とは対照的に葵は決まりの悪そうな顔を浮かべていた。

「丹の妹も蘇芳と一緒に飯を食うか？」

「べ、別にお腹なんか空いてないわよ……それよりも早くお風呂に入ってぐっすり眠りたいわ」

忠将は蘇芳に食事を与えるついでに葵も食事を摂らないかと誘うが、葵は施しを受けるのがプライドに障ったよう得意地を張ってそ

の申し出を拒む。しかし気持ちとは裏腹に体は正直なもので、葵の腹の虫がまた鳴り響いた。

「葵、我慢しないほうがいいよ?」

「…わかったわ、その子どもと一緒にご飯を食べてあげようじゃないの」

「ただまさがいいいんだから、来たくないのなら来なくていいよ」

「生意気なガキね、今のうちにちゃんと躡けておかないと大きくなつてからろくでもない奴になるわよ?」

葵が恥ずかしそうな顔で忠将たちに目を背けたまま食事につき合うことを申し出ると、蘇芳は嫌々来るのなら来なくてもいいと葵にあかんべえをする。年下の蘇芳に馬鹿にされたものの、怒鳴り散らすのは大人気ないと自重して葵は忠将に早期のうちに厳しく躡をしていく必要を説いた。

「何がおかしいのよ姉さん、アタシなんか間違ったことを言った?」

「うつん、別に……」

言うことを聞かない子どもをそのままにしておくとうなるかといういい例が自分だということに気付いていない葵の姿を滑稽に感じて、丹は思わず噴き出し笑いをしてしまう。葵は姉の態度に不服そうな顔を浮かべるが、丹は適当にお茶を濁した。

* * *

忠将は源司に蘇芳と葵に食事を与えるため外出する旨を伝え、花街にある食堂『ティダ・アパアパ』に彼女たちを連れて行く。ティダ・アパアパは置屋に商品として幽閉されている人間やウツセミに仕えている召人のための弁当も作っていた。

メニューはその日仕入れた食材によってまちまちではあったが、店の料理人は古今東西大抵のものを作れるウツセミだった。丹も家事が得意なことを買われて、何度か手伝いに駆り出されたことがあり店員たちとも顔見知りだった。

「おいしい……てつきり生肉とか硬くなったパンでも出されるのかと思っていた」

葵は吸血鬼が調理を担当する店のメニューなどともなものではないと思い込んでいたが、揚げたての唐揚げに副菜として千切りキャベツとポテトサラダが添えられている定食が出てくると感嘆の声を挙げる。

「血を分けてもらう人間には健康でいてもらわないとな。病気になる奴の血は誰も飲みたくはないさ」

「温かいご飯を出してくれるのは結局自分たちのためなんだ……まあいいや、動機はともかく作ってもらったご飯には何の問題もないんだし、ありがたくいただきますわよ」

葵はつまるところ吸血鬼が生き血を美味しくいただくために人間に与える食事に気を使っているという事情を知って幻滅したようだったが、提供される理由はともかく食事自体には問題はないと割り切って半日ぶりの食事を掻きこんで行く。

「蘇芳、唐揚げじゃなくて野菜も食べるよ」

「だってキャベツおいしくないんだもん……」

忠将は葵が遠慮なく食事を平らげているのを好意的に感じるが、彼女とは対照的に蘇芳の箸が進んでいないことに気を留める。蘇芳は唐揚げと白米ばかり手をつけて、野菜類は殆ど口にしていなかった。

「ちょっとアンタ、出されたものは全部食べなさいよ。残したらキャベツがアンタのことを恨んで顔が緑色になっちゃう呪いをかけちゃうし、ポテトサラダを食べなかったら体がポテトサラダみたいになっちゃうんだからね」

葵は口の中で唐揚げとキャベツを咀嚼しながら、蘇芳が避けているおかずを残すとそれらのおかずが彼女に呪いをかけてくると嘘をつく。蘇芳は葵の脅しを真に受けて、顔を青くさせた後、呪いをかけられないために手をつけなかったおかずにも箸を伸ばすようになった。

「嫌なものは別々で食べるよりも一緒に食べちゃったほうがいいでしょう?」

「う、うん…あれ、一緒に食べるとあんまり不味くない?」

「ほらね、やっぱりまとめて食べた方が楽じゃない」

「うん、これならキャベツもポテトサラダも食べられる。おねーちゃん、ありがとう!」

キャベツを口に運ぶようにはなったものの、蘇芳はその青臭さが苦手なようであり箸が進まない。葵はキャベツの青臭さをポテトサラダのマイルドさで中和すれば食べやすくなると蘇芳に教える。葵に教えられた食べ方を半信半疑で蘇芳は試してみると、ポテトサラダの味付けに使われたマヨネーズがキャベツの苦味を掻き消して蘇芳にも食べやすくなったようだった。

「お姉ちゃん…ふふん、このくらい大人のアタシにかかればどうってことないわ！」

葵は蘇芳から尊敬の眼差しを向けられると得意になって薄い胸を張る。

「うまいもんだな、俺はこいつの野菜嫌いを直そうと何度やっても駄目だったのに」

「子どもって単純だからね、適当な嘘を並べて濃い味付けでごまかせば大抵のものは食べられるようになるのよ」

「あんた、意外と子どもが好きなのか？」

「まさか、自分が子どもの時に姉さんに言われたことを思い出しただけよ」

忠将は葵が巧みに蘇芳に野菜を食べさせるように仕向けたことに感心する。忠将は葵が蘇芳のことを手玉に取れた理由を彼女が子ども好きだからかと訊ねたが、葵は肩を竦めて自分が幼少期に丹に教わった受け売りだと明かした。

「ねえ、子育てに悩んでいるのならウチの母さんにも相談すれば

？ 一応二児の母親でそれなりに育児の経験があるんだし」

「紅子にもいろいろ聞いてはいるんだがな、なかなか上手いかな
いものさ。それと紅子以上にあんたの親父さんに相談をしてみたい
ことがあるんだ」

忠将が蘇芳の養育に苦勞しているのだと察して、葵はウツセミにな
ってこの街で暮らしている自分の母親に相談することを提案する。
だが既に忠将は育児の先輩として葵の産みの親である紅子から何度
も助言をもらっているらしく、父親としての立場から彼女の父親で
ある斎の意見いっきを聞きたいようだった。

「父さんに何を、娘を抱えたやもめの親父同士で愚痴でも語り合
いたい訳？」

「お前の親父さんはやめじゃないだろう、同居していないとはい
え紅子はこの街で生きているんだから」

「そうだったわね、母さんはいなくなってからずっとここで暮ら
しているんだった」

少々皮肉めいた葵の発言に語弊があることを忠将が指摘すると、
葵は照れ笑いをして自分の頭を軽く小突いた。

店の入り口の扉が開いて客が入店してくる。空いている席を捜し
てその客は店内を見渡し始めると、葵たちの座っているテーブルに
目を留めた。

「葵じゃないか、こんな所にどうした？」

「父さんここに何の用よ？」

「何って腹が減ったから飯を食いに来たに決まっているだろう？」

入店してきたのは話に出たばかりの切島姉妹の父親齋だった。彼もハライソに狙われる可能性があったので、トラブルを避けるために紫水小路に身を寄せていた。お互いに相手のことに気付いた切島親子は何故この店にいるのかという理由を訊ねあう。

「切島齋、よかったら俺たちのテーブルに来ないか？」

「あんた、忠将さんと言ったな。花街の管理人がこんな所で油を売っていいのか？」

「はは、俺は源司みたいに上手く仕事をサボれるほど器用じゃないんでね。仕事半分でこの子とあんたの娘に飯を食わせに来たんだ」

「そいつはすまなかったな、このお転婆娘が何か迷惑をかけなかったか？」

「いいや、むしろこの子の偏食を矯正するのにいいアドバイスをもたらえて助けられたよ」

忠将に彼らのテーブルに招かれると、齋は忠将の向かいで葵の隣の空いている椅子に腰掛けた。齋は娘が迷惑をかけなかったかと問いかけると、忠将は葵に蘇芳の好き嫌いを克服させるのに助力してもらった感謝の意を表した。

「そうか、たまにはこいつも他人の役に立つことがあるんだな」

「たまにはつてのが余計よ、アタシはいつだって他人から必要とされているんだから！」

「ところで忠将さん、そっちの子は一体誰なんだ？」

斎は葵の発言を聞き流して、忠将の隣でポテトサラダの最後の一口を飲み込んだ蘇芳のことを一瞥する。

「この子は蘇芳ちゃんって言って、忠将さんが預かっている人間の子どもなんだって」

「人間の子どもをどうしてウツセミのあんたが？」

「…切島斎、この子のことであんたに相談したいことがある」

斎からの問いに忠将が答えられずにいると、彼らの会話に葵が割り込んできた。斎も蘇芳の素性を聞いたものが抱く疑問を感じてその理由を忠将に問うと、忠将は真面目な顔で斎のことを見返した。

「相談？ まあ俺が答えられる範囲でよければ聞かせてもらおうか」

「単刀直入に言う。切島斎、こいつをあんたの家の娘にしてくれないか？」

「ええっ、それどういうこと?!」

唐突に忠将が切り出してきた相談に斎がどう反応すべきか戸惑っている、斎に代わって葵が驚きの声を張り上げる。

「紅子が世話になっているとはいえ、俺はあんたとともに話すの

「これが初めてだ。初対面の人間にその子を養子に迎えるように頼もうと思った理由を教えてください」

「分かった。なぜウツセミの俺が人間の娘を預かっているか、そしてこの子をどうして普段現世で生活しているあなたの娘にして欲しいかという理由を話そう」

互いに面識はあっても忠将と斎がともに会話するのは今日が初めてだった。個人的な関係は皆無だったのに、どうして斎に蘇芳の養子縁組を頼んだのかという動機を忠将は説明することにする。斎と葵は固唾を吞んで忠将の話に耳を傾けた。

「当然のことだが蘇芳は生殖能力のないウツセミである俺の子どもじゃない。しかし蘇芳の母親だった女、真実まみと俺はかつて恋仲だった。どれほど純愛を貫こうともウツセミが人間の女と付き合う目的には必ず精気の供給源を獲得するという打算もあり、真実のことは真剣に愛してはいたが彼女をていよく利用していたことも確かだ。そして真実から精気を摂取していたことが、俺の蘇芳に対する負い目になっている」

「あなたが精気を吸い過ぎたせいで、その子の母親が早死にしたということか？」

「そうでもあり違うとも言える。真実の死期を早めたのは俺が彼女から精気を摂取していたことが原因だ。しかし単に精気を吸い過ぎたからという訳ではない。俺はいや真実自身も恋仲になった時点で、真実が蘇芳のことを妊娠しているとは気付いていなかった。俺が真実の腹の中に蘇芳がいることに気付かず、普通の女に接するように彼女から精気を吸ってしまったせいで子どもを身籠っている真実を憔悴させただけでなく、蘇芳の生育さえも大幅に遅らせてし

まっ たんだ……」

忠将が告白した彼の蘇芳に対する原罪を聞いて、斎も葵も残酷な事実に関心した。大人たちが話している内容を理解できない蘇芳だけが、暢気な顔でグラスに注がれた麦茶を飲んでいる。

「…あんたが恋人のお腹に子どもがいることに気付いたのはいつ頃なんだ？」

「真実が紫水小路に迷い込んだのは、源司が紅子をここに連れてきて間もない頃だった。道端で行き倒れていた真実の介抱を俺がしたことがきっかけで、そのまま崩壊的に俺たちは恋人関係になったよ。ちょうどその頃、俺は精気を提供してくれる新しい女を捜していたし、行き場のない真実は自分を置いてくれる家を探していたから、お互いの利害が一致したというのが関係の始まりだな。だが付き合っていくうちに、俺は真実に本気で惚れ込んでいった。あいつから精気を分けてもらう交感の一時に至福の幸せを感じていた。でもそんな幸せは長くは続かなかった。恋仲になって2年くらい経った時、妙に真実の腹が膨れてきたことであいつが蘇芳を身籠っていることに俺たちはようやく気付いた」

「結局その子は誰の子なんだ？」

「相手の男の詳しい素性は分からないが、蘇芳の父親は真実が俺と出会う以前に付き合っていた男らしい。真実はそいつと同棲していたらしいが、関係が拗れて家を追い出されて街を彷徨った末に紫水小路に流れ着いたそうだ。この街に来た時には既に蘇芳は真実の腹の中にいたはずだが、間抜けなウツセミが真実と蘇芳の2人分の精気を吸っていたせいで母胎内での蘇芳の成長が通常よりも遅れたせいでその事実に関心したのがだいぶ後になったって訳だ」

忠将は付き合っている女が妊娠しているということに気付かなかった自分の迂闊さを自嘲して、自分のせいで蘇芳と母親の真実に迷惑をかけたことを切島親子に告げる。

「…忠将さん、あんたは自分に全ての非があるように言っているが、あんたの恋人だって自分の体の変化に気付かなかったのも問題じゃないか？」

「ウツセミに精気を抜かれること自体、自然の法則に背いていることなんだ。そんな体験をしたら他の体調の変化に気が回らなくなってもおかしくはない、まして出会った頃の真実は心神喪失に近い状態だった。母体と自分の精気を抜かれて成長が抑制されていた蘇芳が真実の体調に大きく影響するようになるのに時間がかかって不思議ではない」

「…それでその子が母胎にいたことが分かった後、あんたたちはどうしたんだ？」

「真実の腹に蘇芳がいることに気付いてから、今更手遅れかもしれないと不安に思いながら俺は真実から精気を摂取するのを止めた。そこから出産までに1年近くかかったが、どうにか蘇芳は無事に生まれてきてこうして健康に育ってくれている。しかし母親の真実は蘇芳の命と引き換えに産後間もなく亡くなってしまった。たださえ妊婦の体調管理は難しいのに、俺が真美の体のことに気付かず考えなしに精気を吸ったせいで真実は死んだようなものだ。自分の過失で殺してしまった真実への償いに、俺はあいつに代わって蘇芳の世話をすることに決めたんだ」

蘇芳の出生とウツセミの忠将が人間の彼女を育てるようになった

経緯を語り終えると、忠将は重々しく溜息をついて頂垂れる。蘇芳の誕生にまつわる悲哀は一概に忠将が悪いと言い切れなかったが、彼の過失が真実と蘇芳の運命を狂わせてしまったことは否定できなかった。

「ただまさ元気ないよ、お腹空いてるの？」

「心配するな、ちょっと疲れているだけさ」

肩を落として頭を垂れている忠将に蘇芳が気遣い心配そうな顔を向けると、忠将は精一杯の作り笑いを作って彼女を安心させようとする。

「…その子はさっきの話を知っているのか？」

蘇芳が忠将を實の父親のように慕っている姿に斎は切なさを感じて、蘇芳が自分の出生の秘密を知っているのかと訊ねる。

「まだ小さいから全ての事情を理解できるはずがないが、俺がもう帰ってこない母親の代わりだということは伝えてある。しかし住民のほとんどが大人の紫水小路で生まれ育った蘇芳には家族や親子の概念すら理解できていないようで、自分が悲しい境遇にあることすら感じられないんだ。だがそれも無理もない、自分の置かれている環境との比較の対象になる家族や子どもが生まれた時からいないんだからな」

忠将は自分が蘇芳の親ではないことを彼女に教えていることを斎に明かした。だが紅子と丹という特異な例を除外すれば、蘇芳が生まれてからずっと過ごしている紫水小路は住民の間に親子関係が存在せず全員が独立した個人であるという状況である。更に周りに自

分の境遇と比べられる子どもは1人もいないので、蘇芳が実の親ではなく赤の他人である忠将に育てられているということの異質さに気付けるはずもなかった。

「人間の常識とは異なるウツセミの社会しか知らないまま、この子が大人になるのはあんたとしても由々しき事態なんじゃないか？」

無邪気な顔で床に届かない自分の足を椅子の上からぶらつかせている蘇芳の置かれている環境が人間の常識で考えれば異常なものである感じ、斎は彼女の将来の人格形成において一抹の不安を抱かずにはいられなかった。

「ああ、だからこそ俺は蘇芳をあんたの養女にしてもらいたい。蘇芳が育ってきた世界とその住民の異質さが分かっている上で、ウツセミの妻と娘を受け容れられたあんたならこの子をちゃんと理解してくれると信じられる。そして蘇芳を人間として育ててやってほしい」

忠将は斎の問いかけに首肯する。そして紫水小路とそこに住むウツセミの存在を肯定的に捉えている斎だからこそ、蘇芳の生まれ育った状況を理解してもらえするという期待を込めた眼差しを忠将は斎に向けた。

「忠将さん、あんたの言い分はもつともだし、その子を大事に思っているからこそ俺に預けて人の世に戻そうとしている気持ちも理解できる。だがな、譲られた犬や猫だって育てるのは難しいのに、まして人間を育てるなんて二つ返事で答えられるものではないことはウツセミのあんたも分かるだろう？」

「今すぐ結論を出してもらわなくても構わない、だが時間がかかっ

ても俺はあんたからいい返事をもらえることを望んでいる」

斎はペットをもらうことでさえ容易ではないのに、まして養子を取るとなると大変な苦労があることを述べて忠将の申し出に難色を示す。しかし忠将も責任を途中で放棄するのではなく、斎の人物を見込んだからこそ蘇芳の養育を託したいのだと引き下がらない。

斎と忠将が互いに真剣な顔で視線を交錯させていると、横から何かが軽快なリズムで打ち鳴らされる音が聞こえてくる。

「ちよつとアンタ、お皿で遊ぶんじゃないよ！」

「だって退屈なんだもん〜じゃあおねーちゃん遊んでよ」

蘇芳が空になった皿を箸で叩いているのを葵が注意すると、蘇芳は頬を膨らませてそれに抗議した。食事は終わったのに忠将が店を出ようとしないことで覚えた退屈を紛らわそうとして皿を叩き出したのだから、それを止めさせたいのなら自分と遊ぶように蘇芳は葵に要求する。

「ハア、なんでアタシがアンタみたいな子どもと遊ばなくちゃいけないのよ？」

「え〜おねーちゃん遊ぼうよ〜」

「葵、どうせ紫水小路にいてもやることないんだろっ、それならその子のベビーシッターでもしたらどうだ？」

葵はこれ以上蘇芳に付きまとわれることを嫌がるが、斎はハライソの一件が沈静化するまでの間、紫水小路にいるのだから暇を持て

余すくらいなら蘇芳の面倒を看ることを提案する。

「冗談じゃないわよ、そんなの姉さんにしてもらえばいいじゃない！」

「残念だが紫水小路にいる間、丹には政所の仕事をしてもらうから手が埋まっている。この店についてこなかったのも朱美姐さんに政所の仕事で呼び出されたからだ」

「じゃあいつも通り忠将さんがこの子の世話をすればいいじゃない？」

「生憎と俺は源司とハライソの対策を詰めなきゃならん。同胞たちのために万全の態勢を整えなければならぬから蘇芳に構っている余裕はない。バイト代は払うから、ここに居る間蘇芳と一緒にいてやってくれないか？」

「そうやってウチにこの子押し付けやすくするつもりね？」

忠将も手の空いている葵に蘇芳の世話を任せようとするが、葵は断固としてその意見に反発する。

「おねーちゃん遊ぼ！」

「いきなり危ないじゃない、分かったからそんなに強く手を引っ張らないでよ！」

葵が蘇芳のベビーシッターを引き受けるのを渋っていると、とうとうじつとしていられなくなった蘇芳が強引に葵を外に連れ出そうとして彼女の腕を力任せに引っ張る。危うく椅子から転げ落ちそう

になった葵は、半ば自棄になって蘇芳のいうことに従う旨を彼女に告げた。

「ほんとう?! それじゃ外に先に行ってるね!」

「こつちから頼むまでもなく蘇芳が懐いちまったみたいだな?」

「ホント子どもは我儘でイヤになるわ。バイト代は弾んでもらうからね、忠将さん」

蘇芳が葵に外で待っていることを伝えて店の外に駆け出していくと、忠将は薄ら笑いを浮かべて葵に目を向けた。葵は何故か蘇芳に懷かれてしまったことに苦々しい顔をしながら、彼女のベビーターを引き受けることを了承する。

「おねーちゃん、早く」

「今行くから少しは大人しくしてなさい!」

「あの子は生まれて初めて歳の近い子どもに会って、はしゃいでいるみたいだな」

「おいおい丹の妹は中学生だろう、歳が近いとは言えないんじゃないか?」

「実年齢が100歳以上の人間と比べれば、あれくらいの歳の差なんて些細なものだろう?」

「そうだな、蘇芳の倍くらいしか生きていない人間なんてあいつが初めてだ」

蘇芳に急かされて店を出て行く葵の背中を見つめながら斎が呟いた皮肉に、忠将は思わず頬を崩して笑った。葵がやや振り回され氣味に蘇芳と戯れる姿を見て、斎が彼女を養女に迎え入れるかどうかはともかく、彼女たちの相性は悪くなさそうだと忠将は思った。

第8回、たゆたう ちのみご 了

おまけ 作中年表（前書き）

執筆を進めるにあたり、作品で起こった出来事を整理するために時系列順に並べてみました。読み飛ばしても、今後この作品を読み進めていくには何の支障もございません。

前作『うつせみ たゆたう』未読の方には多少ネタバレになってしまう内容が含まれていますが、『血風録』の世界観を成立させるのに不可欠な要素なのであしからず。

おまけ 作中年表

16世紀半ば：南蛮貿易の始まりと同時期に、当時ヨーロッパで猛威を振るっていた吸血鬼が教会の弾圧を逃れるため日本に流入。教会に吸血鬼討伐の命を受けたエクソシストたちも、吸血鬼の流入に続いて来日。

16世紀後半：外国との貿易を奨励した信長の時代はエクソシストの吸血鬼の追討も捗った。しかし秀吉に天下が移り国内統一の妨げになる恐れのあるキリスト教を取り締まり出すと、吸血鬼の始末に滞りが現れ始めた。

17世紀前半：豊臣家の天下が終焉を迎え、代わって江戸幕府が成立。代を重ねる毎に権限を強めていく幕府の隆盛と反比例して、キリスト教への風当たりは強まる一方となり、鎖国体制の完成とキリスト教の禁教令によってエクソシストたちも吸血鬼を退治するどころか自分の身を守るだけで精一杯になってしまった。

同僚たちが吸血鬼を駆逐する任務を断念して本国に引き上げていく中、来栖の祖先は愚直にも教会の命令を厳守して日本に留まり孤独な暗闘を続けた。

17世紀半ば：来栖の先祖たちは御門を拠点に吸血鬼の駆除を続けていたが、彼らが始末する数よりも吸血鬼が増殖する速度のほうが上回っており劣勢を強いられていた。

消耗戦を中断して、来栖の先祖たちは吸血鬼と相互不可侵の和議を結ぶように持ち掛ける。交渉の結果、異空間にある紫水小路に留まる限り吸血鬼に手出しをせず人間を狩ることを認めることを条件に締約が成立した。

以降紫水小路に隠遁した御門の吸血鬼たちはウツセミを自称するよ

うになり、来栖の一族はウツセミのことを監視すると共に、人間が彼らの世界に干渉しないことを保障するウワバミとしての任に就き、代々人間とウツセミの均衡維持に尽力するようになった。

既にこの時代には朱美はウツセミ転化しており、彼女は紫水小路に入植した先駆けの一員であった。

19世紀前半：江戸幕府の衰退が顕著になり始める。源司や富士見氏族の古参のウツセミ恒、そして後に反乱を起こし紫水小路を放逐された平輔がこの時期に人間として世に生を受け、若いうちにウツセミへと転化する。

19世紀後半：二百年に及んだ鎖国が終わり、幕末の動乱を経て明治維新が始まると、名実共に日本の中心となった東京を起点にして吸血鬼の殲滅を目的とする教会を母体とする組織ハライソが発足。

代永氏族の中堅のウツセミである忠将や茜はこの時期に誕生し、世の中だけでなく自分自身の肉体にも大きな変革を経験した。

1930年代：来栖の祖父である先代のウワバミ、護通が誕生。戦争への機運が高まっていき、現世だけでなく紫水小路にも不穏な空気が漂い始める。

1940年代：太平洋戦争の勃発と日本の敗戦、進駐軍による旧体制の解体。戦後の混乱の中、家族とはぐれ街を彷徨っていた千歳が紫水小路に迷い込み、富士見の先代族長に拾われる。

1950年代：戦後の復興期、この頃から護通がウワバミの仕事に就任する。歴代のウワバミの中でも指折りの使い手としての頭角を現して、ウツセミたちからの信頼を得ていく。

1960年代：高度経済成長期、護通のウワバミとしての能力の最

盛期。成人を迎えた千歳は富士見の先代族長の召人として寵愛を受ける。この時代の前半に切島姉妹の父親斎、後半に紅子や来栖の母親である都が誕生する。

1980年代前半：代永氏族の族長の座から朱美が降りる。彼女の後任にはその能力の高さから族長の就任が有望視されていた平輔ではなく、源司が収まって一族の間に少なからぬ動揺が走る。

代永の族長交代と前後して、20年あまり召人として富士見の先代族長に仕えた千歳がウツセミに転化する。その直後に先代の族長が急逝し、紆余曲折を経てウツセミに転化したばかりの千歳が新しい族長に就任する。

1980年代後半：族長を引退後、娘が独立し妻に先立たれた護通と余生を現世で過ごすと考えた朱美はその背中に烙印を刻むが、銀の刃によってついた傷口からの妖気の漏出が著しく紫水小路へと帰還して療養生活を余儀なくされる。

またこの時期に千歳は晨と出会い、彼を自分の召人にする。晨は千歳に仕えるようになってからそう経たないうちにウツセミへと転化し、彼女の下を離れて酒蔵に奉公するようになる。

斎が新入社員の紅子と出会い、彼らが互いに惹かれていったのもこの時期だった。

1990年：この年の前半、都が来栖を懐胎していることが発覚し、恋人と入籍することになる。しかし正式に籍を入れる直前、都の恋人で来栖の生物学上の父親はナレノハテと遭遇し惨殺されてしまう。都は愛する者を失った悲しみを乗り越えて9月に来栖を出産し、女手1つで彼の養育を始める。

1991年：この年の2月に斎と紅子夫妻の間に長女丹誕生。翌92年の8月には次女の葵が誕生して、切島一家は幸せの絶頂期を迎

える。

1997年：丹の幼稚園卒園を目前に控えた3月。紫水小路にて平輔がクーデターを企てるが失敗、反逆者として同胞から追われる立場になる。源司に銀の刃で左腕を切り飛ばされて重傷を負うが、紫水小路を抜け出し現世へと逃走。平輔は逃亡中に紅子を襲って血を吸い、彼女に瀕死の重傷を負わせる。源司は平輔の行方を追う手懸かりを掴むため、紅子を蘇生させる目的で彼女を紫水小路へと連れていきウツセミへと転化させる。紅子が巻き込まれたウツセミの騒動の一部始終を丹は目撃していた。

4月、小学校に入学した来栖と丹は同じクラスとなり、苗字の頭文字が近いこともあって隣同士で学校生活を送るようになる。共に片親ということで親近感を覚える。

5月、同棲していた男に捨てられて路頭に迷っていた真実を忠将が介抱する。その縁で2人はなし崩し的に恋仲になるが、真実の胎内には別れた男との間に出来た蘇芳が宿っていた。

8月、母親である都が急逝し、来栖は唯一の肉親である鞍田山にいる護通に引き取られる。両親の幸せをぶち壊し、先祖代々討伐しているナレノハテの存在を祖父から教えられた来栖は非業の死を遂げた両親の復讐を果たすためにウワバミの後継者になる修行を開始する。

2000年：忠将に母子共に精気を吸われていた影響で発育が遅れたものの、蘇芳が生まれてくる。しかし妊娠と出産で精気を使い果たした真実は娘の産声を聞き届けて間もなく息を引き取った。忠将は母親の真実に代わって蘇芳の養育に取り組むことを誓う。

2005年：来栖が祖父よりウワバミの役目を継承し、活動を開始する。

2006年：4月、進学したくない橋高校の教室で来栖と丹は9年ぶりに再会を果たす。昔からやんちゃなところはあったが、喧嘩や夜歩きと荒んだ生活を送っている来栖の変貌に丹は内心を痛めた。

7月後半から8月下旬までの期間に『うつせみ たゆたう』の物語が展開される。丹は一連の事件で来栖が務めているウワバミの職務や、御門の住民を密かに脅かしているウツセミやナレノハテの存在を知る。更に失踪した母親の紅子との再会や丹自身もウツセミに転化してしまう出来事を経験した。

ウツセミとしての能力を失う代わりに陽光からの影響を緩和させる烙印を丹はその背に刻み、傷口を来栖の剣気で焼くことで過度な妖気の流出を食い止めて容態を安定させ現世で待つ家族や学友の下へと帰還する。

そして10月下旬、2学期が始まり来栖が切島家に居候するようになってから2ヶ月ほど経った頃から『うつせみ血風録』の物語が始まる。

第9回、忍び寄る影

夕刻、御門市北東の高級住宅地の一角に建つ安倍家の屋敷の一室。安倍家の令嬢真理亜を中心に数人の人物が華美な調度品の揃った室内にたむろしている。

「伴さんばんと十文字さんじゅうもんじの姿が見当たりませんがお出かけになられたんですか？」

「ええ、天連さんたちは鞍田山の方に行かれましたわ」

笑顔の仮面の奥から狡猾さが滲み出ている痩身の男、神尾がこの場にいるべき2人の人物の不在を疑問に出すと真理亜が彼の質問に答える。

「こんな時間にどうしてそんな僻地に、まさか天狗を拝みに行った訳ではないですね？」

「そのまさかですわ、天連さんたちは鞍田山に住む天狗を退治に行かれたのです」

「ご冗談を。我々の任務は御門の闇に潜む吸血鬼の駆除であつて、昔話に出てくる妖怪退治ではありませんよ？」

「あら、ここは千年の歴史を持つ御門ですわよ。吸血鬼以外にも闇に紛れて息づく魔物がいても不思議ではないのではなくて？」

「神尾さんをからかうのはその辺にしておきましょうよ、真理亜さん」

取り留めのない会話を続けようとする真理亜を、実直そうな少年聖が諫める。屋敷にいない2人の使徒が外出した理由を知っている。聖から話を聞こうと神尾は彼に顔を向けるが、頼に湿布を充てて目の周りに青痣が残っている聖の顔を見て嘔き出しそうになるのを堪える。

「天野くん、伴さんは十文字さんを共に連れてどうして鞍田山に赴いた訳を教えてくださいませんか？」

「鞍田山には例のウワバミとその師匠が潜伏しているんですよ。裏で吸血鬼どもと繋がっている奴らはどうやら化け物の巣窟に向かう鍵を持っているらしいんです。天連さんたちはその鍵を奪う目的でウワバミの隠れ家に行ったんですよ」

「水臭いですね、どうせ殺してしまうのだから使徒全員で襲撃する方が確実でしょうに」

聖から天連たちが鞍田山に出向いた理由を聞くと、除け者にされてしまった神尾は残念そうに溜息を吐く。

「化け物どもの根城への鍵の詳細を聞き出して、潜入する手筈を整えなければ皆さんにはお越しいただいた意味はありませんし、御門の抱える問題の抜本的な解決にはなりませんわ。相手を殺さずに身柄を拘束することを考えると、この場にいらっしゃる手練の中でも天連さんと十文字さんが適任ではなくて？」

「確かに、私や南部さんでは相手を生け捕りにするよりも殺す方が得手ですからね」

吸血鬼たちの隠れ家に関する秘密を吐かせるまではウワバミたちを殺す訳にはいけないので彼らを捕らえる任務を遂行しやすい人選を行ったと聞くと、神尾は自分が選抜から漏れた理由に納得を示す。

「貴様の言うように俺は相手を生かしたまま捕らえるよりも殺す方が得意だが、貴様のように相手を蹴り殺しにすることを楽しみはない。同類扱いされるのはごめんだな」

「それは失礼、てつきりあなたも私のように吸血鬼を狩ることを楽しんでるのだと思っていましたよ」

壁に背をもたれて腕を組んでいた中年の男、南部が神尾のように嗜虐癖はないと遺憾の意を示すと、神尾は平謝りをして肩を竦めた。

「伴の奴、俺たち衛兵のサポートなど不要と言いたいらしいな。どうやら当代一の聖火の使い手は、衛兵がお膳立てをするからこそ使徒が円滑に任務を遂行できることに気付いていないらしい」

「そんなことはありませんよ南部さん。ウワバミの連中はやたらと危険を察する鼻が利きますから、ぎりぎりまで気配を悟られないように天連さんは最低限の人数で任務に臨むことにしたんです」

「つまり衛兵が随行すると足手纏いになるということか。衛兵とは聖火が使えるか使えないかという以外に違いはないはずなのに、使徒も偉くなったものだな」

天連と同じく使徒の神尾以上に、通常の吸血鬼退治で使徒のバツクアップをする衛兵の南部は鞍田山への奇襲について何も知らされていないことに不快感を示す。聖の下手な弁解は余計に南部の機嫌を損ねてしまい、南部は整った口髭の下にある口をへの字に曲げて

渋面を浮かべる。

「衛兵の方々に活躍していただきたいのは吸血鬼どもの根城に踏み込んだ時ですわ。先日ウワバミと彼に手を貸した吸血鬼と交戦した際に少なくない数の衛兵の方々が負傷してしまいましたから、これ以上の人員の損失は任務完遂のためにも避けたいことですわ」

真理亜は聖の失言を取り繕って南部の機嫌を直させようとする。南部の表情に変化は見られなかったが、それ以上この件に言及することもないので多少は真理亜の諫言の効果はあったらしい。

「では今回の任務は使徒の精鋭に任せて、我々衛兵隊は休ませてもらう。稀代の使徒の成果に期待したいところだな」

「勿論ですわ。人間の安寧を乱す吸血鬼も奴らと手を結んでいる裏切り者も1人残らず殲滅するために、化け物どもの巣窟への道を開かなければなりませんわ」

南部の皮肉に対して真理亜は切れ長の眼をギラギラと狂的に輝かせながら相槌を打った。

* * *

鞍田山中腹にある粗末な山小屋。その座敷の上で当代の吸血鬼の天敵にして守護者であるウワバミの少年来栖は、彼の前任者にして実の祖父と対面していた。

「愛、本当にそんなものが奴らの力の源だっというのか？」

吸血鬼を始末する刺客として御門に送り込まれた使徒と対峙し、自

分の剣気と同質の能力である聖火の威力に脅威を覚えた来栖は、使徒の聖火が強力な理由を訊ねに剣気の制御する術の師匠である先代の下を訪れていた。

来栖の質問に対して返ってきた先代の答えは彼が予想もしないものであり、来栖は怪訝そうな顔でその真偽を問い質す。

「愛を軽々しく言うんではない。ハライソの奴らは信仰に背いたワシらと違い神の愛をその身に受けて自分で発生できる出力よりも強く剣気を増幅してある。神の愛を受ける者と戦うことがどれだけ厄介か、身をもって感じておろう？」

「ああ、格闘はからつきしのくせに剣気の威力なら圧倒されたからな。しかしそんな抽象的なモンで剣気が強くなるとはねえ……」

「たわけ、愛し愛されることこそ何よりも人を強くするものじゃろうが。今回は力押しでなんとかなる相手じゃったが、次はそう都合よくいくとは限らんじやろう」

「でもウツセミと休戦協定を結んだ俺たちは神のご加護を受けられないんだろう？　だつたら今ある力でどうにかやりくりするしかねえじゃねえか……」

愛という曖昧な概念によって使徒の聖火の威力が増すことに納得がいかず、しかも過去に敵対していた吸血鬼と和約を交わして神の意向に背いてしまったせいとその加護を受けられないのではやりきれないと来栖は不平を漏らした。

「背信者であるウワバミに神のご加護はないが、ワシらに助力してくれる存在はある」

「分かってるよ、神の代わりに手を貸してくれる存在がウワバミが代々監視を続けているウツセミって言いたいんだろう？　でもよ、ハライソの奴らと戦う時はウツセミの力を借りればよくても、源司さんみたいな強大なウツセミと戦うことになった場合、どうしても剣気の威力を強くしなくちゃ太刀打ちできないだろう？」

ウワバミとウツセミは相互扶助の関係であることを来栖は何度も先代から聞かされており、また同じことを言われそうになって少々苛立ちを見せる。現在紫水小路にいるウツセミたちとは良好な関係を築いており、むしろ自分と同じ人間の組織であるハライソと来栖は敵対状態にある。ウツセミの弾圧を目的としているハライソとの戦闘ならばウツセミたちの助力を借りれば対処できなくもなさそうだが、紫水小路に忍び寄っている影は教会から差し向けられた刺客だけではなかった。

10年近く前、紫水小路で謀反を起こして同胞から肅清されそうになり現世へと逃亡したウツセミ平輔が生存しており、自分を追放した同胞への復讐を企んでいる可能性も浮上していた。全盛期はウツセミの族長を務めている源司でさえ正面からでは対抗できなかったと言われるほど強力なウツセミと敵対する場合、現在の剣気の出力ではどうしても来栖は力不足を感じてしまう。

強大なウツセミと戦闘する可能性への不安やハライソの刺客と剣気の打ち合いで押し負けてしまったことで、来栖はどうにか自分の剣気の威力を高めたいと思うようになっていた。

「話は最後まで聞け。紫水小路にいるウツセミが心強い仲間であることは間違いないが、彼らとの信頼を保って得られるものは単純に味方の数が増えるというだけではない。深い信頼関係を結んでいる

ウツセミの存在がワシらの剣気の威力を高めることだってある」

「本当か……!？」

「別にウツセミに限らんでもいいが、互いに心から相手を思い合う関係、分かりやすく言えば相思相愛の関係にあるものがおれば、そのものからの愛をワシらも受けることができる。しかも一極集中的に相手からの愛を受けられることで、神からの愛に匹敵するだけの剣気を増幅する効果が得られる」

神以外の存在から与えられる愛によって剣気の出力を増幅できると聞き、半信半疑で聞き返してきた来栖に先代は力強く頷き返す。

「剣気をもっと強くできるのならハライソの奴らだけでなく、でかい蝕のウツセミにも対抗できるな」

「ところで託人、お前恋人あるか？」

「いや、ウワバミの仕事が忙しいせいでもそんなモンいねえけど。あ……」

「…自分を想ってくれる相手もおらんのにどうやって愛を注いでもらうんじゃ」

来栖は自分の剣気を増幅できる手段を聞いて嬉々とした表情を浮かべるが、愛情を向けてもらえる女性がいることがその前提である事を指摘されると決まりの悪い顔になる。

「お、女の1人や2人そのうちできるさ…当面は自分の能力を上手くやりくりして切り抜けるから問題ないって」

「女の心を射止めるのはお前が考えているほど簡単なことではないぞ」

「そうかもしれないけどよ、健全な男なんだから出会いの場なんかいくらでもあるって」

「お前のような無粋な男を好む女も少なくはないじやろう、だが神ではなくひとの愛情で剣気を高めるには剣気を発動させる際にその女がお前に触れていなければならん。お前に惚れる女の中で修羅場に立ち会ってくれるほどの度量の持ち主は何人おるかのお？」

「…きつと1人くらいはいるさ」

先代の話を聞いているうちに剣気を愛情によって増幅させることは出来ても、その条件がかなりタイトであることを来栖は悟る。ぶっさらばうで無骨な来栖のような男は昨今の女性の好みの主流ではないし、ましてウツセミやナレノハテとの壮絶な攻防を展開する場に立ち会えるような胆力のあるものは男女問わずそう多くはないはずだ。

来栖は剣気を増幅する方法は分かっているてもその実践が困難であることを痛感しつつ、ウワバミとして暗闘が続いている女性が現れる一縷の望みを抱くことにした。

「託人、お前居候先のウツセミの娘とはどうなんじゃ？」

「どうって言われてもな…飯と寝床の世話になっているお返しに、あいつに血を分けてやっている関係だけだ」

突然先代に下宿先の娘であるウツセミの丹まことの話題に触れられると来栖は素っ気無い返答をする。しかし祖父に丹との関係を言及されて来栖の内心が動揺したことは隠し切れなかった。

「託人、何度も自分の血を与えておきながらその娘に特別な感情は持たんのか？」

「別に：俺があそこに下宿しているのは、ウバミとしてウツセミを現世で野放しにする訳にはいかないからだ。あいつに自分の血を分けているのは俺の不注意が原因であいつをウツセミに関するごたごたに巻き込みしまったことの償いで、後ろめたさはあってもそれ以外に思うことはねえよ」

「嘘言え、ウツセミに血を吸われる感触は下手な性交よりよっぽど快感のはずじゃ。理性は否定しても体が相手のウツセミを求めるようになるのが自然じゃて」

「そ、そんなことねえよ。年甲斐もなく性欲を持て余すなこの助平爺！」

丹に血を与える度に性的な快感を感じていることを先代に言い当てられて、来栖は苦し紛れに祖父を罵倒する。だがその反応こそ来栖が丹に血を吸われることに悦樂を抱いている証拠であり、先代は皺の刻まれた顔に好色な笑みを浮かべた。

「…先代」

性的な刺激に流されている面が強いとは言え、丹に好意を抱いていることを先代に看破された来栖は不貞腐れたようにしかめ面をしていたが、急に真剣で彼に語りかける。

「囲まれたか、こんな近くまで気配を悟られんとは油断ならん輩のようじゃな」

「早速おいでなすつたか：先代、自分の身は自分で守れよ？」

「ひよつこがいっちょまえの口を利きおつて。ここでやりあうのは得策ではないし、割札から紫水小路に退くぞ」

「わかった：もういい歳なんだし気をつけろよ、爺ちゃん」

「あまり遅いようなら置いていくぞ、託人！」

小屋の外から発せられる殺気を感じた来栖と先代は、ハライソの刺客との戦闘を避けて紫水小路に逃げ込み体勢を整えることで合意する。座敷の上で2人は履物を足に通して、小屋から脱出するタイミングを覗う。

産毛を焦がすようなきな臭い気配から、外で待ち構えている相手は今にも小屋の中に踏み込んできそう感じだった。先代が肌身離さず身につけている朱印符を下げた胸に手を当てたのを合図に来栖は正面の戸口、先代は反対方向の裏口を目指して走り出す。

「喝！」

「うらああっ！」

玄関の引き戸を蹴散らしながら来栖は、威力は低いものの剣気を広範囲に拡散させる撥の状態で放ち、襲撃者を牽制する。小屋の外で待ち伏せをしていたハライソの刺客も、来栖とほぼ同時に剣気と

同質の生体エネルギーである聖火を放ってきた。

来栖の剣気とハライソの襲撃者の聖火が衝突し青白い光が瞬く。夕闇に包まれた山林が生体エネルギーの光に照らされて明るくなった瞬間、来栖は大きな影が自分に向かって突進してくるのを目の当たりにした。

「喝！」

来栖は小屋の外へと駆け出すと続けざまに剣気を撥の状態で発散し、肉薄してくる襲撃者を牽制する。先日ハライソの使徒の少年聖と戦った際は相手も聖火で剣気を相殺して間合いを置く戦い方をしてきたが、今対峙している大柄な使徒は迎撃のために聖火を発動させなかった。

「ぐっ…こんなもんかよウワバミ！」

来栖の放った剣気が相手の巨体を打ち据えるが、歯茎を剥き出しにして剣気を食らったダメージに堪えると大柄な使徒は足を止めずに怒号を上げて来栖に殴りかかってくる。

「くっ……」

同じ聖火の使い手であるのに相手が前回倒した聖とは真逆の戦い方をしてきて、来栖の相手の拳を避ける反応が遅れてしまい両腕を翳して咄嗟にその一撃をガードする。

これまで受けてきたどんなパンチよりも重い一撃を受け止めた衝撃に、来栖の腕が軋んだ音を立てる。

「このおっ！」

「無駄だ！」

来栖は相手の強打の勢いを借りて後方に飛び退きつつ撥状態の剣気で牽制して、まともな打ち合いを避けようとする。だが来栖の意図を相手も見通しており、今度は迫り来る剣気を自ら放った聖火で防ぐとまた間合いを詰めようとしてきた。

「聖を袋叩きにしたご自慢の拳を打ってこいよ！」

瞬く間に来栖の眼前に飛び込んできた巨漢の使徒は、岩のような拳を来栖に向かって何度も繰り出してくる。来栖よりも更に上背も体の厚みもある相手が拳を振るうたびに、風切り音が起こり風圧が来栖の体を叩きつけてくる。

「野郎！」

いいように打ち込まれているせいで先代と確認しあった当初の方針を忘れ、来栖は相手の挑発に乗ってしまう。パンチの連打を浴びせて一方的な攻勢と油断していそうな相手の足を掬おうと、来栖は顔を狙ってきた右ストレートを紙一重で避けるとがら空きの足にローキックを放つ。

「そんなモン、この十文字様にはお見通しなんだよ！」

しかし来栖の狙いに巨漢の使徒十文字も気付いており、来栖の繰り出したローキックを左足を僅かに動かして裁く。そして持ち上げた左足を着地させる動作に合わせて十文字の放った左フックが来栖の脇腹に食い込んだ。

「がつ……」

肋骨がへし折れたような鈍い痛みを覚えながら、十文字には劣るものの屈強な来栖の体が左に吹き飛ぶ。殴り飛ばされた先で辛うじて踏み止まり転倒は免れたが、間髪置かずに十文字の右の拳が唸りを上げて来栖の横面に飛んできた。

「あああつ！」

反射的に跳ね上げた左腕一本で十文字の剛腕の一撃を食い止めると、来栖は腕の骨が砕かれたような激痛を紛らわすように雄叫びをあげる。苦し紛れの絶叫を絞り出すと同時に来栖は剣気を発散させて、拳を振り抜いてがら空きになった十文字の体を打ち据える。

「ぐうっ!？」

来栖は十文字の鉄拳の連打を浴びた勢いに耐え切れず、地面を転がりながら彼との距離を作ろうとする。

一度目は耐え凌いだものの、さすがに二度も剣気の直撃を受けると頑健な肉体と強靱な精神力を誇る十文字でもかなりのダメージがあったらしい。来栖が地面に転がったまま起き上がれずにいるにも関わらず、右ストレートを放った場所で立ち尽くして追い討ちをかけてこようとはしなかった。

「やるじゃねえかウバミ、そうでなくっちゃやりがいがない！」

だが十文字は木彫りの彫刻のように粗い造作の顔を何度か横に振って気を確かにさせると、来栖が手応えであることを歓喜の雄叫び

をあげる。周辺の空気を振るわせる大音声で吐き出された十字架の咆哮と共に聖火の青白い光が来栖に切迫してきた。

「かあつ……！」

十字架に脇腹を強かに打たれたダメージはまだ残っており、来栖は呼吸もままならない状態で声を張り上げて剣気を放ち十字架の聖火を相殺する。聖火の威力自体は十字架は聖に劣っており来栖の剣気でも完全に打ち消すことができたが、体格で勝る上に殴り合いに慣れている十字架が猪突猛進で押し寄せてくることは来栖にとっても脅威だった。

牽制で放った聖火が掻き消されたことなど気にも留めず、十字架は猛烈な勢いで再び来栖に迫ってくる。十字架のパンチのダメージが抜けきっていない来栖の体の動きにはいつもの切れがなく、突き出される相手の拳に当たらないように避けるので精一杯だった。

「どうしたあ、もっと積極的にかかってこいよウバミ！」

既にかかなりの回数パンチを打っており、常人ならば一撃で昏倒する剣気を二発食らっているにも関わらず十字架は無尽蔵のスタミナで来栖を攻め続ける。一方十字架の左フックで腹部に痛手を負った来栖の体は十分な酸素交換が出来ず、息苦しい表情で相手のラッシュから逃れるタイミングを覗っているようだった。

「逃げてばっかいねえで、たまには反撃してこいよ！」

「…死んでも恨むなよ」

防戦一方の来栖を囓し立てながら十字架は剛腕を駆使して来栖の

顔を叩き潰すようなパンチを打つ。一撃必殺のパンチを身を屈めてかわし、十字字の懷に飛び込んだ来栖は念の押すような低い声で呟きながらおもむろに拳を固めた右腕を掲げた。

「おらああつ！」

「喝！」

十字字が器用に左腕を畳んで来栖を殴ろうとするよりも僅かに早く、来栖が右の拳を十字字の分厚い胸板を叩く。しかし密着状態から放った寸打は鍛え上げた来栖の腕力をもつてしても大した痛手にはならないはずだった。

「ぐああつ！？」

だが十字字の胸を打った来栖の右の拳が強烈な輝きを見せた途端、十字字の背中からは青白く光る刃の切っ先が突き出ていた。来栖が十字字の胸に押し当てた拳を引くと十字字の背中から突き出た光の刃が喪失し、十字字は系の切れた人形のように脱力して天を仰ぎながら背中から地面に倒れこんだ。

剣気を拡散させた状態で放つ撥では決め手にならないと判断した来栖は、ウツセミやそれが理性を失ったものであるナレノハテでさえ一撃で葬り去る剣気を一転に凝縮させた状態で打ち出す^{れん}劔を人間である十字字への使用を踏み切る。来栖の拳に収束した膨大な量の剣気に耐え切れず超人的な頑健さを誇る十字字も昏倒した。

十字字の剛腕を避けながら劔を発動させるのに充分な量の剣気を溜めるのは至難の業であったが、十字字の拳に捕らえられるよりも先に来栖は相手に劔を打ち込むことに成功する。

だが乾坤一擲の勝負に勝ったはずの来栖の顔に笑顔はなく、十字が蘇生しないかと注意深く地面に大の字で仰向けに倒れている彼の様子を覗いていた。

「しんどい相手だったな…まさか懸念した通りの相手が来るとは思わなかったぜ」

しばらく十字字の様子を観察していても、来栖を油断させるために倒れた振りをしているようには見えず来栖は相手への警戒を解いて安堵の吐息をつく。

「こんだけいいガタイしてんだから生命力も半端じゃねえだろ。悪いけどあんたの快方をしている暇はないんでこのままにしておくぜ、ぐずぐずしていると先代に置いてかれちまうんでな」

本来対人用の技ではない劔を使って十字字を倒したことに負い目を来栖は覚えるが、まずは自分の身の安全を守ることを優先することにする。相手とは生きるか死ぬかの命のやり取りをしている以上、余計な情けをかけることは命取りになってしまう。

地面に転倒したまま身動きひとつしない十字字を置き去りにして、来栖は先代との待ち合わせ場所に急ぐことにした。

* * *

来栖が十字字と交戦している頃、先代は足元が覚束ない暗い山林の中を走り続ける。先代がハライソの刺客たちと真っ向から戦うことを避けた理由は、対極を左右しない小競り合いで消耗したくないこともあったが、それ以上に自分の背後から迫ってくる者とは戦う

べきではないと長年修羅場を潜り抜けてきた彼の勘が訴えてきたからだ。

これまで幾度も人間よりも戦闘力の高いナレノハテやウツセミと渡り合ってきた先代だったが、半世紀に及ぶウワバミとしての任期の間に老いを自覚するようになった。来栖にウワバミの勤めを譲った理由も孫が夜の闇を跋扈する魔物たちに対抗できるだけの力をつけたこともあったが、満足に戦えなくなった先代自身の衰えも大きかった。

そして思い通りに動かなくなった身体では自分を追ってくるハライソの刺客を打ち負かすことが叶わないと悟った先代は、追っ手と正面からぶつかるのを避けて逃げを選ぶ。自分の庭同然の山道を先代は軽やかに駆け抜ける一方、追跡者は不慣れな道に四苦八苦しているらしくなかなか差を詰めることができずにいた。

「エイメン！」

「喝…なんじゃと!？」

年老いた相手の背中を追いかけるので精一杯な状況に焦れたのか、ハライソの刺客が先代の足止めをしようと聖火を放ってくる。相手が聖火を発動させた気配を察知した先代は自身も剣気を発動させて打ち寄せる生体エネルギーの波を相殺しようとするが、先代の発した剣気をハライソの刺客の撃った聖火は打ち消し、勢いを保ったまま先代の背中に襲い掛かる。

聖火や剣気には物理的な効力はないものの、ハライソの追跡者の放った聖火を食らって先代は全身を激しく揺さぶられたような感覚を覚えてその場に崩れ落ちてしまう。自分の前を逃げている先代の

足が止まった隙に、強大な聖火を放ったハライソの刺客は彼に追いついてしまった。

「先代ウワバミの来栖護通^{くるすもりみち}。化け物どもと内通していたとは言え、まがりなりにもこの街の治安を維持することに貢献してきたことに敬意を表し、我々に投降するのなら手荒な真似はしない。結果の見えている無益な争いで命を落とすことは、あなたも望んではいないだろう?」

「お前さんも教会の人間なんじゃから少しは老人を労わろうと思わんのか。あんなとんでもない威力の聖火をまともに食らっては、ウツセミも人間も関係なしに消し飛んでしまうぞ?」

周囲の闇に溶け込むような黒装束の男は、聖火のダメージからようやく回復して立ち上がるうとしていた先代に投降を呼びかける。先代は男の聖火の一撃でかなり消耗していたが、気持ちだけは強く保って相手の顔を正面から睨み返して抵抗の意思を示す。

「多少は威力を軽減させたとは言え、俺の聖火を受けたのにそれだけ喋れる者には手加減など不要だ。己の身を労わるつもりなら、大人しくこちらの指示に従え」

「自分の主張を押し通すばかりでこちらの話には聞く耳もたずか。東京のモンはせっかちで落ち着きがないのう」

「のらりくらりと話をはぐらかすことが御門の人間の美德なのか? 投降を聞き入れるつもりがないのなら力づくで従えるまでだ」

足首に届きそうなロングコートの裾をはためかせ顔を覆う長髪の隙間からナイフのように鋭い眼光を見せながら、先代の捕縛のため

に鞍田山にやってきたハライソの使徒、伴天連は自身の倍は生きている先代に強い態度で接する。

「肉体的な損傷はないとは言え、最悪の場合魂を吹き飛ばされて死んでしまう聖火はこれ以上撃たれたくないもんじゃ……」

「肉体だけでなく精神的にも衰えた老体には聖火のダメージは尚更重いだろ。分かったら素直にお縄につけ」

「そのためには意地でも逃げ延びなければならんのう！」

天連に追い詰められた先代は胸の前に腕組み、弱った顔で泣き言を漏らす。天連は自分と直接的な戦闘を回避した先代ならば、己の不利を察して投降を聞き入れるだろうと算段を踏むがそれが一瞬の隙を生む。

天連の注意力が低下した一瞬を見逃さず、先代は作務衣の袖から隠し持っていた閃光弾を取り出すと地面に叩きつけて炸裂させた。閃光弾の発する眩い光を直視してしまい、天連は反射的に目を瞑ってしまう。そして瞼を閉じた次の瞬間、天連は自分の太腿に鋭利な何かが突き刺さった痛みを感じた。

「卑怯だぞ、来栖護通！」

「若い上に桁外れの出力の聖火を使う奴が何を言う。お主みたいなモンと出会った時はまともに相手にせずに逃げるが勝ちじゃ！」

閃光弾で目潰しをされた天連は先代の正確な位置を分らない状態で、怒号交じりに聖火を撃つ。しかし先代は長年修羅場を生き延びてきたことで培った老獪さを存分に発揮して、才気に溢れる天連

のことをからかう捨て台詞を吐きながら剣気を発動させて自分に迫ってくる天連の聖火の威力を弱めると脱兎の如くその場を離脱した。

閃光弾で焼きついた天連の視界が元に戻るのにはそれほど時間がかからなかったが、既に先代は天連が気配を感じられない場所まで逃げてしまっていた。閃光弾による目晦ましに続いて先代が投擲した工作用の小刀で作られた太腿の傷は厚手のズボンの生地のお陰でそれほど深くはなかったものの、動かすたびに傷の周辺に鋭い痛みが走り思い切って地面を踏み切れなかった。

「身体能力や聖火の強さでは圧倒できても老練さでは及ばないか、さすがにハライソの先達たちが一目置いた使い手だ」

先代の全盛期の功績は御門から遠く離れた東京のハライソの人間の耳にも届いており、天連は先輩の使徒たちから聞かされた先代の噂を話半分で聞いていた。しかし実際に先代と対峙してみても、実力的には劣っているながら経験に基づいて窮地を脱したことを受けて相手の実力を認めざるをえない。

「二発目の聖火の効果がどれだけあったかは分からないが、一撃目だけでかなりのダメージを負っているはずだ。山道に慣れているとしても老人の足ではそれほど遠くには行けないだろう」

天連は冷静に先代のコンディションを分析すると、五感を研ぎ澄ませて姿を晦ませた先代の足取りを掴むことに専念する。落ち葉を踏み締めた跡や静寂に包まれた夜の山中で聞こえる物音のひとつひとつに気を配って、天連は再度先代追跡を試みる。

* * *

「ふう…とんでもない奴に鉢合わせてしまったわい。ワシらが鞍田の山奥に引き籠っておるうちにハライソの奴らはどんな修行を積んできたんじゃ、それとも盲目的な信仰があそこまで聖火の出力を高めたのかのう？」

二度目に放った天連の聖火は一度目ほどの威力はなく、先代の剣気で大半のエネルギーを相殺できたものの、取り乱した状態で天連があれだけ膨大な聖火を発動できたことに先代は肝を冷やす。

先代は少しでも気持ちを軽くしようとハライソの使徒たちが聖火の出力を上昇させた方法を冗談交じりに推測するが、天連のような強大な力を持つ者が他にも大勢いると思うと背筋が寒くなる。

源司や忠将などのように蝕が巨大で精気の許容量が大きなウツセミならば天連の放つ聖火にも拮抗できるだろうが、紅子や丹のように蝕が小さいウツセミではひとたまりもないだろう。

そして神の愛を受けられず自給する以上に剣気の出力が上昇させられない先代や来栖たちウワバミの切り札である劔よりエネルギーの収縮度が低い撥の状態で発しても過剰な威力の聖火を使える天連が、万が一ウワバミの秘奥である劔を使えるようになったら紫水小路のウツセミは誰も彼に対抗できなくなるだろう。

「過ぎた力は存在すべきではないということをつて奴が示してくれたな…あの時はウツセミに飛び抜けた存在が生まれたが今度は人間に不必要な力を持つ者が現れたか」

人間とウツセミの世界の均衡を保つには互いの力関係に適度なバランスが取れていることが不可欠であり、その天秤がどちらかに傾いてはいけない。そのバランスを崩すものの登場は、人間とウツセ

ミの調和を最優先事項とするウワバミにとって好ましいことではなかった。

先代は10年ほど前に起こった過ぎた力に溺れて謀反を起こそうとした一人のウツセミのことを思い出しながら、紫水小路へのアクセスポイントとなっている割札の傍までやってくる。

「へえ、人間のくせに俺と吊り合う力を持っている奴がいるのか？」

「お前はまさか……！？」

「久々に会った昔馴染みに対して随分な物言いだな、護道。しっかしたった10年見ないうちに随分お前は老けたもんだ、まあただの人間じゃ無理もねえか」

頭上に生い茂る木々の隙間から先代の眼前に降り立つ影がある。まだ落葉し終えるには早い時期だというのに、周辺の木々の枝には一枚も葉がついておらず月明かりが辺りに差し込んでいた。

おぼろげな月明かりに照らされる先代と向き合っている人物の顔は旧交を温めようとにこやかに微笑む青年のものだったが、先代は幽霊でも見たように引き攣った表情を浮かべる。

「やはり生きておったか、平輔……」

「脇の甘い源司にやられたんじゃ情けなくて死にきれねえよ。それであいつは元気に族長の仕事をやってるか、族長の椅子に就いて20年も経つんだからトロいあいつでも少しは板についたよな？」

「…源司の仕事ぶりが気になるなら自分で確かめに行けばよからう、

それにワシはもうウワバミではないから最近あいつがどうしているか詳しくは知らん」

「紫水小路には近々様子を見に行くさ、たっぷり土産を持ってな」

10年前に反乱を企てて源司たちに肅清され、左腕を失いながら現世に逃れたウツセミ平輔は以前と変わらぬ姿で古い知り合いである先代の前に現れる。平輔は軽口を聞くだけではあまり自分を放逐した紫水小路への同胞に恨みを抱いているようには思えないが、追放された故郷へ帰還すると語り口の端を吊り上げる平輔の表情に先代は不穏な気配を感じる。

「…紫水小路の秩序を乱そうとしたお前を源司や朱美が快く迎え入れると思うか？」

「いいや、俺だって同じことされたら相手を許さねえよ」

「そう考えるなら何故今更御門に戻ってきた？ 反逆者として紫水小路を追われたお前を見つけてしまった以上ワシは……」

「かつてウワバミだった者として俺を討たなきゃならない、だろ？ 相変わらず仕事熱心なことだ」

「亡霊は闇に還れ、平輔！」

先代は密かに収束させておいた剣気を、右手を平輔に翳して斂の状態で撃ち出す。平輔に反撃の暇を与えないよう、先代が全身全霊を込めて放った青白い生体エネルギーの奔流は一直線に闇を引き裂いていき平輔の身体を射抜くはずだった。

「皮肉なモンだなあ、昔仲良く盃を交わした奴を手にかけるつてのは！」

しかし平輔は源司に銀の刃で切り落とされて喪失したはずの左腕を迫り来る剣氣に向けて突き出す。夜の闇よりも更に暗く、陰のようにはやけた輪郭の平輔の左の掌に先代の渾身の一撃は突き刺さる。

例えウツセミが自分に向けられた剣氣を受け流すために己の身の内にある蝕を外部に具現化したところで、劔を食らっては注ぎ込まれた膨大な精氣を処理できず無事では済まないはずだった。だが平輔は先代の剣氣をともに受けても平然とした表情のまま、左腕を突き出したまま先代に突進してくる。

平輔が猛烈な速度で迫ってきたことと全力で劔を放った反動で先代の反応は遅れてしまったことで、先代はなす術もなく平輔の左腕に喉笛を掴まれてしまう。

「くわあ、つ……」

平輔の拘束の手から逃れようと先代はか細い声で気合を発し、剣氣を発動させる。先代の身体を中心にして同心円状に広がった剣氣は平輔の身体に命中したが、剣氣の直撃を受けても平輔は眉一つ動かさずに先代の首を左腕で締め上げ続ける。

「悪いな護通、お前が歳をとったのと同じように俺ももう昔のままじゃねえんだ。今の俺にはその程度の剣氣はそよ風にしか感じねえよ」

「へい、すけ……お前、一体……」

「あの世でのんびり見物してな、これからウツセミと人間を巻き込んだとびっきりの茶番劇をよ」

平輔は自分の腕の先で苦しげに顔を歪めている先代に哀れみの目を向けながら、死に逝く彼に不吉なことを言い聞かせる。

「茶番、だと…まさかお前……」

「そうさ。ウツセミとウワバミが数百年守ってきた、相互不可侵のぬるい関係をこの俺がぶち壊してやるんだよ。そして紫水小路に押し込められている仲間たちに、吸血鬼が本来あるべき姿を取り戻させるのさ」

「そうは、ません…そうはさせんぞ！」

平輔が10年近く前に目論んだ野望を未だに諦めていないことに気付いた先代は残された氣力を振り絞って彼の陰謀を阻止しようと意気込み、蝋燭の最後の瞬きのように剣気を発散させる。撥ほど拡散していないが斂と呼ぶには充分に剣気が収束されていないその一撃を受けても、平輔の示した反応は僅かに顔を顰めただけだった。

「がっかりだぜ護通、お前はもつと潔い奴だと思ってたのによ。こんな無様な姿を見せられるんなら、さつさと殺しちまえばよかったな」

「ぐう……」

先代の放った最後の一撃が中途半端なものであることを嘆かわしそうに呟くと、平輔は彼の首を掴んでいる左手に力を加える。先代はくぐもった悲鳴をあげて白目を剥くと、平輔の腕を引き剥がそう

としていた両腕をだらりと下げて事切れる。

平輔が絶命した先代の首から左腕を離すと、先代の身体は膝から地面に落ちて前のめりに倒れた。突っ伏した先代の枕元に平輔は跪くと、もう動かない先代の身体を物色して首に紐でかかっているものを取り上げる。

「やっぱり大事な朱印符は肌身離さず持ってやがったか。あとは適当にこいつを教会の連中に渡せば……」

「貴様、そこで何をしている？」

先代の亡骸から奪った紫水小路に入るため鍵である朱印符を眺めながら平輔が今後の段取りを立てていると、林の奥から自分に質問が浴びせられてくる。平輔が声のした方に振り向くと、先代の放った剣気を頼りに居場所を探り出した天連が木陰から姿を見せる。

「あんた教会の人だろ？　これやるよ」

平輔は先代から奪った朱印符を天連に投げ渡す。胸元の受け取りやすい位置に取り易い速度で投げ込まれたので天連は朱印符を掴むが、素性の知れない男からいきなり用途不明のものを渡されても疑念が積もるばかりだった。

「そいつは吸血鬼どもの住んでいる街に行く鍵だ。それをその割札に合わせれば周囲にいる奴は誰でも吸血鬼たちの街に入れるってからくりだ」

「何故そんなことを知っている、貴様何者だ？」

「俺がどこの誰かなんて吸血鬼を殺すあんたの仕事には関係ないだろう？ それじゃ用も済んだし、俺は行かせてもらっぜ」

「待て。何故貴様の足元にその老人が倒れているのか、その理由を教えろ」

「気になるんなら自分で確かめろよ、教会の殺し屋さん」

天連に投げ渡した朱印符がどんなものでその使用法を簡単に説明すると、平輔はこの場から立ち去ろうとする。だが平輔の足元に自分が追跡していた先代が倒れていることを不審に思った天連が先代の倒れている理由を問うと、平輔は彼の質問を無視して人間離れした跳躍を見せて遙か頭上の木の枝に飛び上がる。

「貴様、やはり吸血鬼か！」

ようやく自分の正面に立つ男が、組織を挙げて殲滅に努めている吸血鬼だと気付いた天連は聖火を平輔に向けて発する。だが天連の強大な聖火が周囲に広がっても、平輔にダメージを与えた手応えを彼は感じられなかった。

「あの吸血鬼、かなり強力な個体のようだな。しかし吸血鬼がどうして仲間を売るような真似を？」

聖火で足止めできずに平輔を取り逃がしてしまったことを天連は悔やむ。それと同時に同胞を売るような平輔の言動を不可解に思っ
て、平輔が語った朱印符の効力を信じる気にはなれなかった。

「爺ちゃん！？」

天連が右手に握った朱印符に視線を落していると、少年の声が聞こえてくる。生い茂る木の間から駆け出てきた人物は、恵まれた体躯をしている天連に勝るとも劣らない屈強な体格をしていた。

「…お前が爺ちゃんやつたんだな？」

先代の亡骸に駆け寄ろうとした少年は闇の中に佇む天連の姿に気付くと、警戒した様子で彼に向き直る。人気のない夜の山林に自分の祖父が倒れていて、その近くに不審な人影があればその人物を疑うのは無理もないことだが、少年は祖父の異変を目の当たりにして気が動転しているらしく短絡的に天連の仕業だと断定してくる。

「爺ちゃんと言っているからにはお前が今のウワバミか」

「葵を攫って丹をいたぶったことと言い、今夜俺たちを襲ってきたことと言ひハライソのやり方にはもう我慢ならねえ。今ここでめえをぶつ潰す！」

発言の内容から眼前の少年が先代の孫で現在のウワバミである来栖託人だと天連が察すると、居候している家のものや彼自身も脅かすハライソの強引さを勘弁できず来栖は怒りに駆られて天連に殴りかかっていった。

第9回、忍び寄る影了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6733x/>

うつせみ血風録

2011年11月20日11時31分発行